
崩れる歯車

こんこん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

崩れる歯車

【Nコード】

N7553E

【作者名】

こんこん

【あらすじ】

「紫煙の門」番外編です。新城冬香、17歳は、八鬼という組織に属していて特異な能力を持っていた。彼女は組織の仕事の一環として八坂市に転校生として現れる。そしてそこで出会った八坂神社の娘、八坂亜紀は学校寮のルームメイトだったが、彼女も変わった人間だった。学校生活を送るに連れて、亜紀の能力が明らかになっていくが、同時に同級生とも揉めることにもなる。一方、八坂市とは別の場所で一人の少年がとある事故をきっかけに能力に目覚めてしまう。そして理不尽な事件、事故に巻き込まれながら自らの凶悪

な目的のために手段を選ばずに行動をするようになる。そして八坂市で彼と冬香が偶然出会うことになる。

1話

私は自らの思い描いた世界のどの辺りにいるのだろう。

それは存在価値というものを見出すための秤を探している行為なのかもしれない。

私が生きていく意味を見つけることに疑問を持ち始めたのは成長の証なのだろうか？

そうだ。今までの生き方が殺伐としすぎていたのだから無理もない。

自分を殺し、一人で生きる力を見に付け、他人には絶対に頼らない。

そこに自分という存在があるのか？

ただの人形かロボットなんじゃないか？

自分で言うのもなんだが、私らしくというものが欲しい。

私は私だ…誰でもないんだ。

私が私らしく生きて何が悪い？

悪いはずないだろう？

これはほんのささやかな願いかもしれない。

しかしそれを成し遂げることこそが私の生きる価値なのだ。

それを奪われてしまったらそこで私という人間は死んでしまっただ。

「冬香…冬香…」

遠くから声がしてきた。

それは私の睡眠を妨げるもの、ということとは敵意外の何者でもない。

私のすべき行動は単純だった。

側にある目覚まし時計を確認することなく、むんずとつかまえる

と、
声の主に時速百六十キロでストライクゾーンへ投げ込んでいた。

「まじ…」

声の主はその素早い行動に驚きの表情を見せた。

しかし自分に向かってくる目覚まし時計を見るなり、あるうことかキャッチしていた。

普通なら砕けてばらばらになってしまっが、取った主は全ての衝

撃を緩和させていたのだ。

そして無傷のままの目覚まし時計をサイドボードにそっと戻した。
未だに横でぐーぐーといびきをかきながら寝ている私。

呆れ顔でその様子を見続けていたのは、私のルームメイトである、
八坂亜季。

見た目はどこに出しても恥ずかしくない容姿で、頭脳は明晰でこ
れといった欠点が見当たらない。

そして家柄もすばらしく、何代も続く八坂神社の跡取りで現職の
巫女である。

それにぴっぴちの女子高生様だ。

って私が言うのもなんだけど私だって同い年の十七歳だ。

「あんたさー…いい加減にその寝起きの悪さ何とかならないの？」

ぶつぶつと文句を言いながら寝ている私を諦めて一人で部屋をあ
とにした。

ようやく観念したか。私は人様に言われて起きるほど素直ではな
いのだ。

私の行動を縛ることなど皆無！

さて、そろそろ起きるとするか。

「ふあああああ」

ベッドからもぞもぞと出ると、身支度を整えることにした。

時計を見ると八時少し前だった。

「あちゃあ、今日も遅刻か…ま、しょうがないか」

半ば諦めながら、学校に行く準備を済ませて、ゆっくりと部屋から出た。

ここは八坂市と言ってその名の通りに八つの坂がある。

その坂は山の上から下へと流れる水のようにできていた。

そしてその山は大蛇山と言って神話からその名をもらった。

そもそも、ここには八岐大蛇伝説が根強く残っており、昔この山を八つに分断する光の衝撃がその原因にもなった。

まあ、そんなの私が見たわけじゃないから嘘かもしれないし、別にどうでもいいことだ。

八坂市はその山を取り囲むように町が広がる奇妙な町だった。

何でも大蛇山は神聖なもので、みんなで守ろう、とこの大

地主があほなことを言い出したのがきつかけらしい。

やれやれ…

うーん。私って何に対しても否定的だな。これは直したほうがいいのかな。

まあ、町の作りはそんな感じで、人工は二十万人と過疎化も進んでいない普通の市だ。

私はその街中にある、とある高校に通っていた。

私立雲雀ヶ丘高校。

そこは市内唯一の女子高であり、県下一のお嬢様高校で有名だった。

なぜならそこに通っているのは、地元の金持ちの娘ばかりだからだ。

近隣の市からわざわざ通う人もいる。

それだけここに入りたがるのには理由がある。

この高校は独特で、花嫁修業のような授業が盛りだくさんだった。

礼儀作法を重んじて道と名の付くものはほとんど習わされた。

身を守る上でももちろん、柔道、剣道、合気道もある。

勉学は超一流の先生が揃って教鞭を振るっていた。

しかもそれだけではない、学生寮、学食、合宿場が全て揃い、この料理はすばらしくおいしい。

何故ここまで施設が充実しているかといったら、そこに入っている子の親たちのお陰だ。

子どもに金を惜しまない馬鹿な親が寄付金をじゃんじゃん払うからこのようにエスカレートしていったのだ。

だからここを卒業しただけで、企業家やら政治家といった金持ちの男がすぐに食いついてくるのだ。

嫌でも権力を持って、金を持っている男が群がってくるから、親としても満足なのだろう。

しかしこの金持ちの連鎖はいつまで続くのやら…

お、そうだ。私がないでここに通っているのか疑問に思うだろう？

それはそうだ。だって品性の欠片もないような私がここに通っているのは奇跡に近いのだから…

そう言えば自己紹介がまだだった。

私は新城冬香、十七歳。訳があってこの八坂市に転校してきた高校二年生だ。

この土地へは一度来たことがあった。

それは十三歳の時だ。

来た理由はというと、四年おきにここへは来なくてはならない理由があるからだ。

まあ、その話は置いておいて、先に進むことにしよう。

2話

学校に入ると、すでに始業のチャイムは鳴っていた。

しかしそんなことはお構い無しに私は悠然と歩いていた。

クラスの戸を静かに開けると、先生は私を見てまたか、という顔を
をした。

そりゃあそうだ。今月五度目の遅刻だ。

今月は五日前に入ったばかり、ということは毎日遅刻だ。

「新城さん…今日は何で遅れたんですか？」

とりあえず理由を聞いてくれるらしい。

「あ…金縛りです」

「はい？」

「意識ははつきりしているのに体が動かない。

分かります？私、もがき苦しんだんですよ！学校に行きたいのに
行けない！

どうしたらいいんだーって。そしたらこうなっていました」

クラスは静まりかえっていた。

先生とこんな風に渡り合えるのは私ぐらいのものだから。

その答えを聞くなり、先生も分かりましたといった表情をして、席につくことを促した。

そしてまた授業が再開された。

私は教科書を開くなりそのまま寝てしまった。

「おい。冬香？もしもし…」

遠くから声がする。またもや私の眠りを妨げる敵か！

私は握っていたシャープペンを弓矢のように標的に向かって放った。

「ちょ…」

標的がそれを交わしたので、シャープペンは後ろのコンクリの壁に突き刺さった。

「相変わらず危ない子ね」

そして私を起こした。

「う…あ…ご飯の時間？」

寝ぼけた眼で辺りを見回すとそこには知った顔が。亜季だ。

「あ…亜季…」

そのまま瞼が閉じようという時、亜季は私の目を強引に開いた。

「寝るな！」

「いたたたたた…」

眠気が一気に吹き飛んだ。

「何するんだよ！」

「あんたねえ、毎日毎日、何してんのよ！同居人の私の身にもなつてよ」

「は？私が何をしたらって言うんだよ」

「あんたがそんなだから、先生にもきつく言われてんのよ。冬香を何とかしなさい。起こしなさい！っていつつもいつつもね。もう、今日という今日は許さないわよ！」

大きな声で怒鳴るので私は耳がきんきんしていた。

「まあ、まあ、落ち着けよ。私なら先生に怒られても平気だから」

「私が怒られるのよ！」

「そつなの？」

「そうよ！もう何を言っても聞く気がないみたいだから最後の手段を用意したわ」

亜季は不適な笑みを浮かべていた。

何をする気だ？私はどんなことにも屈しないぞ？

「上の先生に話して、あなたの食事だけ自炊にしてもらおうわ」

聞いた瞬間頭の中が真っ白になった。それは思いもしない罰だったのだから。

「え？嘘」

わ…私はそんなことでは…動じない。

「あなたのご飯は今日から自分で作りなさい。しかも自費でね。

それができるなら好きなかだけ寝ていていいわよ。ふふふふふふ

…」

悪女だ。この女、私の心の安らぎを奪おうとしている。

ならどうする？ここはあくまでも私らしさを貫くのか。

いや、前言撤回。ここは大人しく屈しよう。

「それだけは勘弁して。私の唯一の楽しみを奪わないで。ここのご飯は本当においしいんだから…」

がくんと頭を垂らして降伏宣言をしてしまった。

「そう、分かればいいのよ。なら明日からきちんと起きてね。もしも破ったら…分かっているわね？」

「やりと」

怖い、怖すぎるぞ。

亜季…あんたって子はそんな子だったんですか。

「それから、今日はそのことを分かってもらうために夕食は一人前しか食べられないからね」

「え？ちょ…ちょっと待ってよ！それはおかしいでしょ。」

「罰は明日からでしょ。なんでご飯の量減らされなきゃならないのよ…」

「あのね…あんたぐらいのもんなのよ。一人で五人前食べてるの。その分のお金は他の子たちが払っているようなものなのよ。今日はあなたに分からせる意味でそれで勘弁してあげるって言うてんのよ。何ならなしにする？」

「くそ…」

私は追い込まれていた。

たかが寝坊をただけなのに何でこんな仕打ちを受けなければいけないんだ。

理不尽だ。世の中理不尽だ。

「何か言った？」

「いや…」

これ以上何か話しても亜季には聞いてもらえないだろうから大人しくすることにした。

「はあー…今日ばかり締めのご飯食べないと」

机に頭を下げて一人悶々としていた。

すると亜季はそのままそくささとどこかに行ってしまった。

「ねえ、ねえ、冬香さん。何かあったの？」

クラスメイトの錦戸絵里が私達のやり取りを見ていて気になったらしい。私の元に近寄ってきた。

彼女は何かと私に絡んでくる。

私という人間に興味があるらしく、この三ヶ月いつも一方的に話かけてくる迷惑な存在だ。

「別に…あいつが悪魔だってことを教えられただけ」

「あの亜季さんが？嘘だあ？彼女生徒会長も勤める優秀な人だよ？」

「頭と心は関係ないの！あいつは私の弱みを握って脅した。だから悪魔なの！」

全く…こんなんじや帰りに買い食いでもしようかな」

「買い食いつて…そうだ。あのさあ、冬香さん。私とお茶しない？」

「お茶？それってお腹にたまるもの？」

「いやいや…本当にお茶だけ飲むわけじゃないから。」

「町に新しくできた喫茶店があるんだけど、そこでケーキバイキングやってるんだ。」

「それもたつたの五百円で。どう？安くはない？」

「その言葉は甘い誘惑だった。」

「私はすぐに飛びついた。」

「それ、本当！五百円で食べ放題なわけ？」

「うんうん…しかも紅茶付だよ。味も美味しいつて評判だし。」

「それに私相談に乗ってほしいことがあるからさ。奢るよ。」

「ほ…本当！」

「神がいた。ここには悪魔だけではない。神もいるんだ。」

「私は心の底から喜んで涙を流した。」

「そんな大げさなりアクションしなくても。まあ、でもちゃんと相談に乗ってね。」

「じゃなきゃ奢らないから」

「分かったって。よし、そうと決めれば今から寝ておこす」

こうして私の学校生活は食の話と寝ることとでほとんどを費やしてしまっただ。

3話

夕日が眩しく私の顔を照らしていた。

「む…あ…」

誰にも邪魔されること無く自然に目が覚めた。

そうだ。ケーキだ。ケーキが私を待っているんだ。

急いで辺りを見回すとそこには絵里が待っていた。

「起きた？ふふ…本当に寝っぱなしね。起こすと怖いって話には聞いてたから待ってたわ」

「え…と…今、何時？」

「四時だよ。授業終わってすぐだから、まだ間に合うよ。さあ、行く」

「うん…」

私はバッグを手に取ると、そのまま絵里と教室を出た。

するとそこには担任の先生がいた。

「冬香さん…」

「はい？」

「明日から遅刻したらどうなるかは、分かっていますね？」
なるほど、亜季からもう聞いたのか。

「はい。明日からは遅刻しません」

ここは素直に答えておこうと思った。

「そう。ならいいです。気をつけて帰ってください」

やれやれ、うるさい先生だ。どうも鼻に付いて嫌なんだよな。この学校の先生は…

ふて腐れながら下駄箱に手を伸ばすと違和感を感じた。

何だ？

何か入っている？

下駄箱の蓋を思い切り開けると中から手紙が五通出てきた。

「何これ？」

私は呆気にとられていたが、絵里はそれを見逃さなかった。

「うっわーすっごーい。冬香さんってモテモテだね」

「は？モテモテ？何のこと？」

「これって、女の子からの手紙でしょ。」

好きです！あなたと一緒に過ごしたい！私のことをずっと見て！きゅー、すごい、すごい…」

一人で勝手に妄想して盛り上がっている絵里だが、私はいたって冷静だ。

「お前、頭大丈夫か？」

「照れない、照れない、さあ、行こう！」

絵里は全く話を聞いていない。

夕暮れ時の街中はどこか寂しい。

人もぽつぽつとまばらな感じで歩いていた。

それにしても私に相談事なんて無謀にもほどがあるな…

私って正直に物事を話すから相手を知らずによく傷つけている。

まあ、それでも良いって言うならしょうがない。

そして目的の喫茶店の前に来ると、流石に反響を呼んでいるらしく、満員状態だった。

座れないのではないかと思ったが、そこは運が良く二席空いてい

た。

「ラッキーだね。これで、おいしいケーキと紅茶を味わえるね」

絵里はつきつきしながら席に荷物を置いた。

バイキング形式だったので、カウンターの脇にあるケースの中から好きなケーキを取りにいかなくてはならなかった。

私達はすぐにお皿を持って行列に並んだ。

店内の張り紙には、一度に取れるのは三個までです。と書かれていた。

私は順番が回ってくると適当に目に付いたケーキを三個皿の上に乗せていった。

絵里は一個しか乗せなかった。

そして席に戻り、椅子に腰を下ろすと黙々と食べ始めた。

三個もあったケーキは一瞬で姿をくらました。そしてすぐにおかわりを取りに行った。

絵里はまだ一つのケーキを三分の一しか食べていなかった。

私はどんどん食べた。

六個、九個、十二個…

「冬香さん！話聞いてよ！」

絵里が痺れを切らしたのか珍しく大声で言った。

「はい？」

私の口の中には十三個目のケーキが入っていた。

それを勢いよく飲み込んだので詰まらせてしまった。

「ぐ…は…お茶、お茶…」

慌てて側にあつた紅茶をがぶ飲みした。

せつかくの高い本場の紅茶も私に掛かってしまえばそこらの安いお茶にはや変わりだ。

味わうことなく一気に喉に流し込んだ。

「はあ…死ぬかと思った」

「あのね。冬香さん。最初の約束覚えてる？私の相談に乗ってくれなったら奢りじゃないんだよ？」

「そうだったっけ？」

「そうだよ！さっきから一人で黙々と夢中になって食べてるからこちが話しづらいでしょ！」

「はは…ごめん。ごめん。それで相談って？先に断っておくけど私

素直な答えしか言えないからね。

それでもいいんでしょう？」

「うん…」

すると絵里は心の内を話した。

「私さ…好きな人がいるんだ。私達の高校に近い男子校の男の子なんだけどね。」

部活がきっかけで知り合って電話番号交換して、たくさん話したり、たまに買い物に付き合ってもらったりもした。

だけど、絶対に家のお父さんが許さないようなタイプなんだ」

「どんな？」

「うん…家柄は普通で、学力、運動能力も普通の人」

「つまり全く普通の人ってことだな」

「そう。お父さんは普通の人は絶対ダメだって言うの。だから好きだとしてもきつと認めてくれないわ…」

その話を聞いて呆れてしまった。

どこまでお嬢様なんだよ…と。だから素直に話した。

「あのさ、それはあなたの気持ちじゃなくて、お父さんの気持ちでしょ。」

あなたがどうしたいかが大事なんじゃないの？それってつまんなくない？

何にもしていないのにはなから諦めている…

多少の障害や痛みが伴ってもやりたいことはやっておけば？」

「冬香さん…まともなことも言うんだね」

「まともは余計！それで、あんたはどうしたいわけ？」

「私は…できればこのままずっと付き合いたい。彼も好きだって言うてくれたから」

「じゃあ、付き合っていけばいいじゃん。良いも悪いも付き合っていれば分かるんだから」

あまりにもシンプルすぎる答えだったが、悩んでいる絵里には私の言葉が後押しになったらしい。

急に決意を固めたらしく、ふっきれた顔を見せた。

「そうだよ…うん、絶対そうだよ！ありがとう冬香さん！」

そして残っているケーキを食べ始めた。

「やれやれ…」

私はこれのどこが相談なのやらと思いつつも十四個目のケーキを口に入れていた。

4話

喫茶店に来てから一時間後、私は絵里と肩を並べて駅の方まで歩いていった。

彼女は自宅からの通学なので、電車を利用していった。

私と変える方向が反対なのだが、奢られた手前、そのまま帰るわけにもいかないので送っていった。

「しかし驚いたね。喫茶店の店長に呼び出されるんだもん…」

絵里は先ほどのことを掘り返して笑っていた。

「うるさいなー」

「冬香さん、食べすぎだって、いくら食べ放題だからって二十一個は食べすぎでしょう」

今日の晩御飯が一人前しか食べられないと分かっていたので、飛ばしすぎたかもしれない。

私は二十一個のケーキを食べた。

そしてさらにお代わりをもらおうとしたら店長に呼び出され、少ないお金と共に入入り禁止を言い渡された。

「だって…好きなだけ食べても良いって言われたらさー」

「限度があるでしょ。はははは、笑っちゃっよ」

「むうー」

「あのさ、話変わるけど、冬香さんってどんな人がタイプなの？」

唐突に何を言っただこの天然娘は！

私は予想外の質問に驚いた。まあ、隠すこともないから答えてやるか。

「私？私は…かわいい系の子が好きかな？子犬みたいな奴？」

その言葉を聞くなり絵里は引いていた。

「嘘でしょ…まさか、冬香さんがそんな人がタイプだなんて…」

どんどん私から距離を離していった。

「は？」

「私がイメージしていたのは、

全身に戦場の爪あとが刻まれたような、危険な匂いがする殺し屋みたいな人だと思ったのに」

おいおい…

「あのさ…私のことどう思っているのさ」

「違うの？」

「違うわよ！私だって男を見る目ぐらいあるわ！」

「そうかなー…そうは見えないよ」

絵里は私をからかっていた。

この女、女じゃなければ拳を叩き込んでいるぞ。

「じゃあさ、男の目を見る目が確かかどうか、試してもいいかな？」

「どづいうこと？」

「私の好きな人を見極めて欲しい！」

「何でそこまで私がしなきゃなんないのよ。あんたたちで勝手にちくりあっていればいいじゃない」

「これをあげるからさー…」

絵里は何かを取り出してこっちに見せた。

それは、まさか！

私の目は獲物を見るライオンのように鋭かった。

「八坂プリンスホテルの豪華夕食バイキングのチケット…」

そつだ。これは物凄いプレミアチケットなのだ。

有り得ないほどの豪華な食材を使ったバイキングなので、
地方からも食べに来るほどなので普通に買うことができない位の
競争率になっていた。

「私のお父さんはさ…ホテル業界の関係者だからこういうのも手に
入るんだよー」

ちらちらとチケットを見せびらかしていた。

くそー…私の弱みを知っていて駆け引きを出すとは…

「どうする？簡単なことだよー私の好きな人をちょっと見てくれる
だけでこれが手に入るんだよ？」

悪魔は亜季だけではなかったのか、ここにも予備軍がいるとは…
まさか、亜季の差し金か！

そんな馬鹿な…

私は何がなんだかわからなかったが、その申し出を受け入れてし
まった。

「やったー…冬香さんが判断してくれれば、私としても心強いわ」
本当に自分だけでは決められないお嬢さんだ。意思が弱すぎる…
って私が言えた台詞じゃないな。

「あのねー…何度も言うけど、私は素直なことしか言わないよ。だ
から何言われても後悔しないでね」

それだけをはっきりと話すと駅で別れた。

きっかり六時前には学生寮の食堂にいた。

「あらあら…流石にこの時間は守るのね」

私の前に亜季が現れた。

「ふん。誰かさんのお陰で一人前の食事だけどね」

「あんたねー…よく太らないよね。一度に五人前も食べる女子高生なんて聞いたこと無いわよ」

「私は基礎代謝が常人と違うのよ」

「そうか…分かる気がするわ…」

何を見てそう思ったんだ？

私は目の前の食事をしっかりと味わって数分で平らげた。

そして部屋に戻ろうとしたら亜季が声をかけた。

「今日どこかに行ったの？帰りが遅かったから…」

「うん。絵里がさ、相談に乗って欲しいっていったから話を聞いていた」

「そう…珍しいのね、あなたが人の相談に乗るなんて」

「そうか？」

口が裂けてもケーキに釣られましたなど言えない。

そのまま私は自分の部屋に戻った。

5話

二段ベッドの下のベッドに寝転がってため息をついた。

「はー…全く、学生ってのは本当に面倒くさいな」

正直な気持ちが思わず独り言で声に出してしまった。

私は学校というものに縁がなかった。それもそのはずで、通ったことがなかったからだ。

私が生まれたのはこんな都会の街中の病院などではなかった。

山奥の村の古い家屋でひっそりと生まれた。

そして親は十歳の時に亡くなった。私と妹を残して。

しかし十歳までの間に学んだことは人の一生をかけて学ぶものだったのかもしれない。

新城家という一族は不思議な能力を持っていて、空間という箱に干渉する能力を持っていた。

それは空間を捻じ曲げたり、異空間を作り上げたり、空間内の状況を好きなように変えたり様々だった。

その理を理解するには知識とそれに見合う体が必要だった。

だから努力して知識を大量に詰め込み。それに見合う体を作り上

げた。

そして僅か十三歳で私という人間が完成されてしまったのかも
れない。

だから私は両親の後を継いで新城家の代表となった。

代表になるということはとある組織の一員になることを意味して
いた。

この日本を守る存在として結成された八鬼という組織だ。

これは表、裏が存在し、古くから日本の治安を守っていた。

一人の人間が野心を持たないように、この国を脅かすものの存在
を未然に防ぐ。

そんな感じではあったが、確実に時代の節目に一役かっていた。

表、裏八鬼のルールは三つあった。

一つは必ず表、裏の組織に血縁の近い存在の身内を入れること。

二つ目は決して組織を抜けることは出来ない。

三つ目は命に代えてもこの国を守ることだった。

だから両親は三つ目の約束を守るために命を落とした。

それは私達にとっては誇りだった。

両親がそれだけ国のことを愛していたのだから。

そしてそれが私達を生かしていることにも繋がるのだ。

私はその日から表八鬼に籍を置いた。

周りにはみんな両親と同じ位の年だったので、いろんな意味でやりづらかったが、

彼らはいろんな技術や、知識を惜しみなく教えてくれた。

いきなりの出来事だと普通の人間ならパニックになってしまいうだろうが、

私達は五歳から両親に愛情ももらいながら厳しく鍛えられていた。

だからそんな環境にもすぐに慣れることが出来た。

みんなはそんな私を褒めて、認めてくれた。

この年ですばらしい。正に天才だ、と。

しかし私にとってはそんなことは別に凄いことでもなんでもなかった。

両親の教えをきちんと守っていただけなのだから。

だから私は気が付いた。生まれた時から自分は掛け替えのないものをたくさんもらっていたのだと。

他の人間とは比べ物にならないぐらいの愛情と力を…

そんな両親の意思を無駄にしないためにも、私が意思を継がなくてはならない。

だから同じ組織の中の人間と比べて何倍もの力を発揮できたのだ。

天才などではない。ほんの少しの才能と両親の教え、

そして弛まぬ努力の結果が私の史上最年少の八鬼メンバー入りを全員一致で決めさせた。

ここから表八鬼の説明になるが、この組織は古くは平安時代からその流れを汲むことになる。

それはこの日本という国に得体の知れない物が存在すると分かった役人がその対処する組織を作り上げたのだ。

そしてそれは、その時代に現れる奇妙な生き物、出来事の解決に一役かっていた。

その存在自体は明かされず、隠密行動がモットーだった。

日本という国を脅かす脅威があればそこに確実に係わるもの、それが八鬼という組織だった。

八鬼とは八人の特異な能力を持つ者の存在で、普通の人間とは異なるのから鬼として例えられていたのだ。

初めは八鬼という組織だったのだが、時代の流れと共に表と裏が存在するようになった。

表は主に情報操作、話術や交渉といった人を相手にしたもので

裏は、得体の知れない生き物、権力者、犯罪者の暗殺が主と役割分担が決まってしまった。

そして双方に身内を置くことで、裏切りを抑制し、情報公開を防いだ。

だから裏八鬼の方には私の叔父がいた。

父方の弟で優秀な人で、私も何度か会ったことがあった。

優しい人で、どこか影のある感じの人だったのは覚えていた。

しかし叔父さんも両親と同様に国を守る大仕事で死んでしまったのだ。

そこで、八鬼史上、前例のない出来事が決まったのだ。

それは私が裏、表に兼用で籍を置くことだった。

類稀な能力の才能と、強靱な精神力を買われたのかもしれないが私はそのことに異論はなかった。

全員一致で決まったことにただ頷くだけだった。

そこから私の国を守る使命に追われる忙しい日々が始まったのだ。

6話

「何をぶつぶつ言ってるの？」

現実に戻された。

そこには亜季がいた。

「え？」

「あのさ…独り言ずっと言ってたよ。気持ち悪いから止めてくれる」

「嘘、私、声に出してた？」

まさか、さっきの全部声に出していたのか？

「ええ、私は優れてるとか、類稀な人間だとか…自分の自慢ばかりね」

「それは…当たり前のことじゃない？」

「はー…全く、あんたみたいな性格が羨ましいわ」

「どういう意味よ」

「いいわ。別に…あなたがどんな人間であろうと、私に迷惑さえかけなければね」

遅刻のことをまだ根に持っているのか？心の小さい女だな。

「そう言えば、絵里の話なんだけど、何を相談されたの?」

「んー…あいつの好きな奴を見て、私なりにどうなのか判断してほしい、とかそんな感じ?」

「曖昧ね…でも絵里の家も相当な金持ちだから、それを狙って近づく奴じゃなきゃいいけどね」

「はは…そんなの知ったことじゃないよ。あいつの恋路が上手いこうが行くまいがね」

「ずいぶん冷たいのね」

「私はこう思うんだ。自分で判断できない奴つてのはさ、他人を頼るんだ。」

そして同意を求めて答えを出す。その結果が悪かろうがね。

だけど、いざ、自分が不幸になったとしてもそれを受け入れられず、何で?どうして?つてずつともがき苦しむんだよ。

それが悪循環の始まり…だけど、それは他人がどうこう言った所で分かりましたって直るものでもないんだよね」

「あなたはそんな人の不幸になる様を間近で見たことがあるの?」

「いや…まだないね。でも、人の意志の弱さは自らが気付いて直すべきものなんだよ。」

他人が踏み込めない領域ってものが誰にでもあるでしょ。

だから、私が見た結果が最悪だとして、彼女に私が何を言っても、彼女は上辺で納得するだけだよきつと…」

その言葉が気に食わなかったのか、亜季が反論をした。

「私はそうは思わないけどね」

以外だった。亜季はどちらかと私よりの考えをしているかと思っただがそうではないらしい。

「へー…あなたの意見はちょっと聞いてみたいかな。どう違っつての？」

興味もあつたので聞きたかった。

「弱い人間がそうなることは、分かる。

でも、それを助けてあげるのが身近にいる人間の役割だと思うわ…弱い人間は弱いままではない。

友人が家族が、上辺だけではない気持ちで必死に助けてあげれば救われるわ」

「以外ね…あなたからそんな言葉が出るなんて。

私はもつと冷酷な人間だと思っただけど、思い違いだったのかな…」

「本人を目の前によくそこまで正直に言えるわね。

まあ、それがあなたの良い所でもあるけど、そのままの生き方はきつと辛いと思うわ」

「へー…どんな風に？」

「あなたは器用で何でもできる…たぶん今まで挫折らしいものは味わったことがないと思うわ。

だから人の気持ちはまだよく分からないのよ。

でも、この先何が起こるか分からないのが人生よ…
自分は分かっている振りをしたところでも、どうにもならない出来事ってのは起こりえる」

何を言っているのだろう。私には全く理解ができなかった。

今までの修行の中で精神を鍛えることは何でもやった。

何も持たないで山の中に籠もったり、狭い密閉空間に閉じ込められたり、

虫や獣が大量に蠢く場所で過ごしたり、自らの死と向き合いつつ、ありとあらゆる方法で恐怖を克服していったのだ。

だから私に怖いものなど存在しなかった。

「まあ、私には分からないわね。知りたくもないし…」

まあ、そんな生き方をしてきたのが私なんだからしょうがないんだけどね」

「そう。なら、いいわ…」

絵里が何を考えているのかさっぱり分からなかった。

私はこう見えても読心術にも自信があった。

年齢以上の経験の成せる技ではあるが、彼女の気持ちだけは読めなかった。

それだけこの女は単純ではないってことか。珍しく私は他人に興味を持った。

「約束忘れないでよ。明日は早く起きるのよ」

しかし嫌な奴には変わらない。

7話

深夜一時、私は寮を抜け出して、大蛇山にいた。

地脈を探り異変が起きていないか、細かく調べる作業も三ヶ月続けば自然と慣れてくる。

大地に手を添え精神を集中させ、体と地脈が一体化する感覚を掴み取る。

そんな日課の作業を淡々とこなしていった。

どこにも異常は見られなかった。

私はゆっくりと立ち上がると、大気の微妙な変化を肌で感じながら、町並みを山頂から見回した。

特に変わった様子はなしか…

そう思えたときには時刻は二時を回っていた。

明日は起きられるのかな…でも起きなきゃ、ご飯食べられないしね。

悩みながら下山しようとする、人の気配を感じた。

「どつだ？様子は…」

林の奥から声が聞こえてきた。

私はその声に聞き覚えがあったので、足を止めて声のする方向に向かって話しかけた。

「何も変わらないわ…あのさ。姿見せて話したらいいじゃない」

すると林の奥から一人の男がすっと姿を現した。

その男は見るからに幾多の戦場を潜り抜けてきたかのようなオラを放っていた。

年は三十代後半で、背が高く、無精髭を生やしていた。

眼光は鋭く、目が合ったものは震え上がるほどの威圧感を持っていた。

「なんだ。耶甲か…」

こいつは立木耶甲という人物で、裏八鬼に所属している体術専門の暗殺者だ。

極めて真面目な男で、任務も証拠を全く残すことなく遂行するほどの完璧主義者だ。

そんな彼に私は幼少から体技を習っている。

だから素手でも私は強いのだ。

「何だはないだろうが…お前の様子が心配で出向いているというのに」

「余計なことね。大体何も起こっていない状態で出てこられても目障りなだけよ」

「相変わらずだな。息子もこうならないように鍛えよう」

彼には息子がいた。立木蓮十歳。おそらく彼の跡目を継ぐ子だろう。

「何も起こらないからと言って気は抜くなよ。」

この場所は我々が守護する土地の中でも警戒を緩めることの出来ない場所なのだから」

「ええ…それは耳が痛くなるぐらい聞いてるから知ってる」

八岐大蛇伝説になぞらえるぐらいの出来事が平気で起こる場所。

ここは異世界との干渉を最も受けやすい場所なのだ。

だから得体の知れない者がいつどこで現れてもおかしくないということで、

日本を守る組織の我々としては最も危ない区域として毎年表、裏八鬼の誰かを一年間置くことにしているのだ。

その周期が私は四年に一度来るのだ。

だから四年前にも一度来ている。十三歳の頃だ。転校生として来て、すぐに去っていく。

そんな私のことを誰も覚えてなどいない。

そしてその頃の私もまだ未熟な存在だったので、監督役が一人付いていた。それが彼、立木耶甲だ。

未だに私のことをがき扱っているのが、迷惑な話だ。

「何も起こらなければいいが、気持ちは緩めるなよ」

「はいはい……」

「本当に可愛げのない奴だな」

そう言うと耶甲は姿を消した。

朝の七時、アラームが響き渡る。

その数実に五個。

私はそれが鳴る度に拳で破壊していた。

しかし遠くに置いてある二個の目覚まし時計だけはどっにもならない。

私は体を引きずってベッドから起きた。

「ちぎしょじ……」

人の意見に従っているのが屈辱的な感じだった。

そして重たい体を無理やり起こすと、大きく伸びをした。

毎夜毎夜の夜の外出は、私の体に大きな疲労を蓄積させている。

それが解消されるのがいつになるのかは私は分からない。

「さて…」

とりあえず二段ベッドの上を眺めてみたがそこには亜季の姿はなかった。

亜季はもう学校に行っているらしい。

何て真面目な奴…

模範生徒として振舞わなければならない生徒会長という重い肩書きは私にはうっとおしいだけだ。

呆れつつも亜季の芯の強さに感心した。

頭がしゃきつとしない状態ではあったが、どうにか準備は整えられた。

実に数週間ぶりの時間内の登校。私は変な気分になっていた。

外は快晴で空気は澄んでいた。それが心地よく感じるのが普通の人間。

しかし私はそんな朝の恩恵を受けつつも機嫌がとても悪かった。

おはよーという言葉がいくら飛び交ったのかは分からない。

私はそんな言葉も耳に入っていなかった。

今日は早いよね、意外だわー、嘘、そんな言葉も有り得ないくらいに周囲で話されていた。

そして私を見るなり、すれ違う先生達は驚きの声を上げた。

普通の事を私がやったことで、ここまで周りが変わるものなのかな…納得させられた。

「冬香さん…おはよう。今日は早いよね」

教室に入るなり、三十回程聞いた言葉を絵里が口にした。

「あんたか…みんなでそのことばかり。つまんない」

「だって冬香さんの遅刻記録は前人未到だよ。」

記録をどこまで更新できるのか注目の的だったんだから」

「はいはい…」

そのことにいちいち対応するのも馬鹿らしく思えた。

「それよりもさ、昨日の話覚えてるよね」

「うん…覚えてるけどさ、あんたの彼氏って奴の写真は？名前と学

校名だけじゃわかんないよ」

「いやーん、そんなあー彼氏って…」

彼氏という響きが気に入ったのか、彼女は体をくねくね動かして喜んでいた。

そう言えば、絵里は相手の事をはっきりと彼氏とも言っていないかったしな。

「くねくねしないで、気持ち悪いから」

「写真でしょ、はい！」

そう言って写真を手渡した。常に写真を持ち歩いている時点で相好きなんだな、こいつのこと。

写真を眺めると、いかにもスポーツマンといった単発できりつとした目鼻立ちの男が写っていた。

まあ、悪くない顔だ…しかし私の好みじゃないな。

「ありがとう…」

すぐに写真を返すと、私はそのまま自分の席で寝ようとした。

しかししつこく絵里が声をかけてきた。

「冬香さんさ…いつ見に行ってくれるの？ねえ、ねえ」

全く…しつこい上にうるさい奴だ。

「え？さあ？私の気が向いたら？」

「ちょっと…そんなこと言わないでよー」

「絵里の約束のチケットって期限があるんだろ？」

なら、その前にはやっとかよ…だから、今は…眠らせて…ん…」

儼は自然と落ちて、もう絵里の言葉など聞こえてこなかった。

8話

キンコーン、カーンコーン

終業のチャイムが鳴り響く、私がそれに気が付いたのはきっと四度目のチャイムだ。

ということは…すっかり夕方だ。

「あなた…毎度毎度、よくそんなに寝られるわね。逆に感心するわ」「亜季が私を見下ろしていた。

「あ…亜季…」

よいしょと体を起こして伸びると、欠伸が出た。

「生徒会の活動は？」

「今日はないから、あなたに買い物に付き合ってもらおうかと思つてさ」「

「珍しい…私と買い物なんて…」

「付き合ったら、たい焼き奢ってあげるけど？どうする？行く？行かない？」

「行く…」

私は予定もなかったので、そのまま亜季に付き合うことにした。

しかし亜季が、どうして私みたいなのを気にかけているのか理解できなかった。

普通の人間なら私の破天荒な性格に疲れて、自然と見放すものだ。

自分で言うのも変だが…

まあ、私自身が深い友達を作りたくないと思っ手ているのかもしれない。

あまりにも人とは違う人生を送りすぎているのだから。

そのことは別として、亜季は本当に優秀な生徒だった。

生徒会の仕事も完璧にこなし、学業でも常にトップの座に君臨し、運動能力にしても体力測定で全項目でこの学校の歴史を塗り替えたらしい。

そんな万能人間がなぜ私の身近に存在するのかは最大の謎だが、彼女の話はそれだけでは収まらず、

実家の巫女という業務まで完璧にこなしているのだから凄い。

靈感がかなり強いらしく、霊媒師も顔負けの除霊、交霊を行うらしい。

それは八坂神社の系譜のせいかもしれない。

古くから神と根強い関係の彼らならではの遺伝子が、関係してい

るのは間違いない。

長年神に仕えた者に対する恩恵の一部がその能力だったと言える。亜季に関して分かることはそのくらいだが、彼女は決してそのことを鼻にかけない。

恐ろしいほど謙虚な人間で、力を誇示しようなど毛頭ないといった感じだ。

そんな人間は同い年で見たことがない。

精神の未熟さが露呈する年頃でここまで自らを律することができると、高僧の域だ。

だからこそ、この亜季という人間に皆惹かれるのかもしれない。

しいて言うなら私も…まあ、その一人だ。

「ほら、何やってるの？」

ぼーっと考え事をしながら歩いていると、前を歩いていた亜季が声を掛けた。

「ああ…」

追いかけるように亜季の後を付いていった。

そこは昨日絵里と歩いた街中だった。

「どこ行くの？」

「生地屋さん…」

「あんた裁縫でもやるの？」

「文化祭が近づいてきているからその中の出し物でメイド喫茶があるから、メイドの服を作らないと駄目なのよ」

「メイド…あんたがやるの？」

「や…やっっちゃ悪いの！…」

亜季はかなりの動揺を見せた。

「いや…そんなこと言ってないじゃない。ただ興味本位で聞いただけなんだけど。」

その慌てっぷりを見ると本当なんだ…くくっ」

「しょうがないじゃない！誰もやろうとしないから、私が率先して…その…

やるってことで、みんながやるっていうことになったのよ。だから決して私がやりたくてやった訳じゃないのよ！」

「あのさー…そこまで力説されると余計に怪しいんですけど」

「忘れなさい！」

強引だな。

そうこうしている内に目的の生地屋さんに着いた。

そこにはいろんな種類の生地があり、衣装を作るのには文句なしの品揃えだった。

私は何を見ていたらいいのか分からずただぶらぶらするだけだった。

亜季はというと真剣にいろんな生地を眺めていた。

そこまで真剣になっている亜季を見るのは初めてだ。

「退屈だ…」

本音がついぼろりとこぼれてしまった。

待つこと三十分、亜季は決意をしたかのように一枚の白い布を買った。

巻きで五メートル。

「これで大丈夫なはずね」

そうかな…私の見たところではあなたのサイズのメイド服を作るのなら一メートル半で足りるはずだ。

それが分からない亜季は裁縫が苦手と見た。

しかしそこには触れないでおこう。そんなことよりも私はすぐにたい焼きを要求した。

しかし亜季はそんな私におあずけをした。

「駄目：次は文房具屋さん：そこでポスターや飾りを作るのに必要な材料を買いつんだから」

「ちょっと…私のお腹のことも考えてよね」

「太り気味だから丁度いいんじゃない？」

「どこが太ってるのよ！あんた、いつ私の体重を見た！」

「冗談よ…」

ちくしょう…軽くあしらわれた。

そのまま亜季は文房具屋、スーパー、電気屋を回っているんなことを調べて買っていた。

「は…疲れた」

私は何もしていないのに疲れた。

それもそのはずだ。特に買うものもなく、ただその辺をぶらぶらしているだけなのだから。

これって一緒に行く意味があるのかすら分からなかった。

そして荷物持ちまでさせられている現状だ。

「さあ、約束のたい焼き買ってあげるわ」

その一言で救われた。

「じゃあさ、クリームと餡子と抹茶のやつを五個ずつでいいよ」

「図々しいにも程があるでしょ。一個ずつなら買ってあげる」

「えー…」

「文句を言わない!」

こうして亜季からたい焼き三個を奢ってもらえることになったが、私はそれを一分も経たない内に平らげた。

「あんなね…もつと味わいなさいよ!」

亜季はゆっくりと一個のたい焼きを食べていた。

二人で並んで公園のベンチに座っていたが、遊んでいる子どもの姿はもうなかった。

中心にある時計台を見ると六時を回ろうとしていた所だから納得もした。

「冬香：あんたさ、一週間後の試験は大丈夫なの？」

不意に亜季がそんなことを口にしたので、物思いに耽っていた私を現実に戻した。

「え？そんなのあつたっけ？」

私の頭の中にそんな記憶はなかった。

「先日、範囲と日程の発表があつたでしょ。ってあなたいつも寝てるもんね」

「そうよ」

「威張つて言えることじゃないのよ！赤点なんか取つたら退学になるかもしれないのよ。」

私達の学校は文武両道、そして品行方正をモットーにしているんだからね」

「何？その爽健美茶みたいな響き……」

「お茶じゃないのよ！」

「だってさ……私に品の欠片があるとしても思つ？今更求めても無駄だと思っただけど」

「それをどうにかしていくのが大事でしょ。」

好きな人ができたらどうするの？だらしない女は嫌われるのよ？」

「うーん……」

とりあえず考えてみた。

しかしまだ現実味のない話であつた。

「いきなり変えるってのは無理な話だけど、少しずつ自分を見直すことは大事なのよ。」

話が変わったけど、テストは来週の月曜日から水曜日の三日間よ。範囲は…」

亜季は鞆の中から「そごそ」と一枚の紙を取り出した。

「これに書いてあるから、確認しなさい。分からないことがあったら聞いていいから。」

同じ部屋のよしみってことで教えてあげる」

まるでお母さんのように私に諭した。

「なあ、聞いていい?」

「どうぞ?」

「何で私にここまでするんだ? たった三ヶ月前に転校した付き合いも薄い人間だよ?」

「さあね…秘密」

「何だよ、それ」

残ったたい焼きを食べ終わると、立ち上がって学生寮へと帰った。

9話

日曜日、澄み切った青空が広がる清々しい天気の中、私は一人で大蛇山にいた。

「ふあああああああ」

昼間に来る大蛇山は眺めがとても良い。

夜になると濃い霧が立ち込める不気味な山も朝になれば、普通の山にはや変わりする。

どうしてここにいるかというと、日課の修練の日だからだ。

普段は学校で忙しい毎日？を送っているので、こんな休みの日じゃないと、鈍った体を鍛えることができない。

それに周囲の目が常にあるからな…

私の能力は主に空間の温度を上げたり、下げたり出来るものだ。

それが広範囲であろうが、小さい範囲であろうが自由自在だ。

しかし広げる範囲にも限界はあり、視野に入る部分でなければならぬ。

私の能力を細かく分けると、まず見る、自分の好きな空間を固定、それから空間内を自由にいじくる…とまあ分かりやすく言ってしまう。

一番難しい作業は空間の固定、そして固定したまま技を出すことである。

ある程度の術者なら一点を集中して見ることで空間の固定が出来るのだが、それをずっと保つことができない。

新城家の人間のみに許された能力だからこそ、それが自然に行えるかもしれない。

私は精神を集中させて木々に的を絞り込む。

まずは小さい範囲から空間を固定し、温度を少しずつ上げてみる。

すると指定された箇所から、葉がよきよきと生えていった。

そこまで一時間…

今度はその空間の温度を少しずつ下げた。

すると今度は葉っぱが見る見る内に枯れ葉になった。

ここまで一時間だ。

「ぶひ…」

ここまでできたら一息つける。

空間の固定とはそこに一つの世界を作ることと同じだ。

そして私が温度をゆっくりと上げたり下げたりすることでその世界に季節が存在するようになる。

しかしこれはゆっくりと二時間掛けた結果である。

これが出来て初歩の段階である。

この修練の目的は集中して空間を固定し続けることにある。

しかしこれは実戦向けではない。

ちまちまと空間を固定して、ゆっくり暖めたり冷やしたりしているなど愚の骨頂だ。

だからここからが本当の力の使い方だ。

私は太い木を一本、飲み込むように視界に入れた。

すると間髪入れずに木はびきびきつと凍結した。

空間の固定、技の発動、これをコンマ数秒で自在に扱うのが達人の域だ。

私は一瞬で木の周囲の空間を固定し、冷却したのだ。それによって木は瞬間冷凍された。

そのまま拳で木を叩くと、まるでガラスのように砕け散ってしまった。

また一つ無駄なものを壊してしまった。

いやいや…木は無駄なものではない。

と自分に突っ込みを入れつつも力の制御が出来ていることを再確認した。

修練を始めてから三時間が経過しようとしていた。

そろそろ正午を回ろうとしていたので、私は休憩することにした。

無理を言っ作ってもらった弁当がここに三人前ある。

これは学生寮の食堂にいる名コックのおばちゃんに頼んだものだ。

五段重ねの重箱に山のように入っているおかず、そしておにぎり五個。

うん、適量、適量…

私は至福のときを迎えていた。

こんな空気の美味しいところで食べる弁当は格別だった。

無言で一流のおかずを次々とほおばっていた。

ここに来てもう少して四ヶ月が経とうとしているが、特に目立った動きはない。

四年前に来た時もそうだった。

全く…八鬼のメンバーも警戒しすぎだったの。

毎日、毎日、深夜に同じような作業を繰り返させやがって、こっちは寝不足だって。

この土地の地脈や霊脈に引き寄せられておかしな輩が出ないように見張るのが私の役目だが、
そんな馬鹿な奴はすぐに見つかるだろうに。

ぶつくさと文句を言いながら私は食事を平らげた。

さて…午後の予定は…特にないな。

どうしようかな。

この街の探索はもう済んでいるし、地形も完璧に把握している。

となれば…何を…寝るか？

何も考えられずお金もないので、学生寮に戻ることにした。

10話

部屋のドアを開けると、そこには裁断された布の前で一人で考え事をしている亜季の姿があった。

いつになく暗い表情だった。

「おい…」

私は声を掛けたが、返ってきたのは生氣のない言葉だった。

「な…何？」

「それはこっちの台詞だよ。あんたそんな所で死人みたいな顔して何やってるの？」

私のその問いかけに彼女のいつものような言葉の切れがなかった。

「服を…文化祭で着るメイドの服を作っているんだけどね、上手くいかないのよ！」

「はあ？」

以外だった。亜季にも苦手なことがあるのだ。

それも散らかされた部屋の中を見ればよく分かる。

ミシンの糸は絡まっていて、端切れがあちこちに散らかっている。

そして…ものの数分で出来上がるスカートがそこにはあった。

「え？え？」

亜季は出来上がったスカートを何度も見た。

まるで信じられないといった様子で。しかしこれは紛れもない事実なのだ。

私は家事が全般にできる。

それは幼い頃に両親を亡くしたせいもあったが、元来の貧乏性がそれに拍車をかけた。

極力お金を使わないように服も作ったし、ご飯も作ったのだ。

それがここでは、私以上のコックが料理を作ってくれるのでそれに慣れてしまった。

もちろん自分のお金ならそんな馬鹿なことはしない。

八鬼の援助のお金が出ているから好き勝手しているのだ。

それはそうと亜季は未だに現実の世界に帰って来れないぐらいの衝撃を受けていた。

まさか、あんななんか…といった感じだった。

「あなたが半日掛かって出来なかったことだけど…どう？」

私は得意気にそう言ったが、亜季はまだ私のことを認めなかった。

「はいてみなきゃ分からないじゃない」

スカートを手にとると、ズボンを脱いで徐にはき始めた。

少しは恥らえ、この優等生が。

そして次の瞬間自分の愚かさを知ることになる。

「完璧だ…私のサイズに…しかもこんなにフリルまで入れて縫えるなんて…」

これじゃあ、私の…完敗よ」

敗北宣言をして、両手を床についてうなだれた。

「ははははは…どんなものよ。

今なら豪華な夕食を三回奢るということで私が作ってあげてもいいけど？」

相手が弱っていることをいいことに条件を差し出したが、相手はいたって冷静だった。

何か策があるのか？

私は亜季の背中を見た。すると小刻みに震えて笑っていた。

「ふふふふ…はははは…完敗ね。確かに完敗を認めるしかないわ…」

「なら、私に従うのね」

「いえ…奥の手を使わせてもらっわ」

「奥の手？」

「ええ…この写真でね」

亜季が懐から取り出した写真は三枚。

それはどれも見覚えのある光景が写っていた。

「これは…」

「そう、あなたが今まで盗み食いをした数々の写真よ。

学生寮の冷蔵庫の中を漁るあなた…学食のラーメンのチャーシューを厨房から高速で盗み取るあなた…

最後は職員室からお菓子を盗み食いするあなた…」

いつどこで撮ったんだよ。

しかも全部盗み食いとは情けない…せめて裸の写真とかにしてくれ。

しかし私に気付かれないで撮るなんて達人級か？この女…

「いつ撮ったんだよ！」

「ふふふ…企業秘密よ。しかしこれで取引よ。冬香、どうする？」

どうするって…こんなこと学校にばれたら停学になるかもしれない

い…

そんな恥ずかしい理由で八鬼の任務に支障が出たら切腹ものだ。

まずいぞ…これは…

私は悩みに悩んだ。そして渋々答えを出した。

「分かったよ…この写真と交換で、あなたの服を縫ってあげるよ。相変わらず抜け目のない奴だ」

「ふふ…ありがとう。そう言ってもらえると私も助かるわ」

そして私は亜季から布を奪い取り、ミシンの前に座った。

11話

おっとその前に型紙を取らなくては。

「あんたのサイズだと…こんくらいかな」

亜季を見ながら物差しと鉛筆で紙に書き込んでいく。

そうだ大事なことをもう一つ忘れていた。

「あんたの胸…Aカップ？そうでしょ」

私は見たまんまのことを口にした。どこをどうみても胸というものの存在が見えないからだ。

しかし亜季は動揺を隠せず、大きな声を出した。

「なななな…何ですって？」

「いや…型紙作るのに胸の大きさも計算しないとさ…見た感じAでしょ？なら簡単だ」

さらつと流すつもりだったが、そうもいかないらしい。

「Bよー！」

強気に胸を強調するように張り出したが、どこにも突起物は見当たらない。

やれやれ…意地って奴ですか。

「どこをどう見てもAでしょ」

「いいえ、Bよ!」

「しつこいねー…別にあなたの胸なんかに興味なんてないよ。なんなら私の分けてあげようか?」

私はDカップだったので、亜季をからかってみた。

「いらないわよ、あなたの乳なんか」

「乳って…あなたね。それよりもどうするの、本当にBカップでいいの?」

その寸法で作ったら少しぶかぶかになるかもよ?

メイド服作るならぴちつとした方がいいんじゃないの?」

とりあえずアドバイスはした。後は素直に亜季が決められるかだ。

すると迷うことなくBカップで作れと言った。

「あつそ…」

私はこれ以上何も聞くまいと、黙々と衣装作りをした。

そして一時間後には綺麗なフリルのメイド衣装が出来上がっていた。
た。

始めたたくさんあった布も亜季の失敗のせいでほとんど残らなかつ

だが、ぎりぎりの状態で作れた。

「試着してみ…」

私が亜季に出来上がった衣装を渡すと、亜季はすぐに上下を合わせに着た。

「お…」

その姿は本当のメイドさんのようだった。思わず感嘆の声が出た。

いかんいかん…ここで調子に乗せる訳にはいかない。

「どっ…?」

亜季は少し照れながらくると回って感想を求めてきたが、私は冷たく突き放した。

「可愛さと純粹さ、そして何よりも白が似合わない！あなたは黒よ！そう、その腹黒さと同じで…」

「随分な言葉ね…」

予想外だと思われる言葉に打ちのめされ気分を悪くしたようだ。くく…いい気味だ。

なら追い討ちをしましょう。

「そこで私はあなたにこれをプレゼントしよう…」

そう、これは余った材料で作った私なりのサプライズだ。

「この角の付いたカチューシャと悪魔のしっぽをお尻につければ完璧よ。」

あなたは立派な悪魔のメイドさんになれる！

冥土の土産とはこのことね、ははははは」

くだらない駄洒落と一緒に角としっぽを差し出したが、亜季の怒りは頂点に達していた。

「と…冬香！ふざけんじゃないわよ！」

とつとつ亜季が切れた。

あんなに自分を律することのできる、大人の亜季がここまで感情を露にするのは初めてだ。

私は嫌な予感がした。

まさか…触れてはいけないものに触れたのか？

部屋の空気が一変した。

「おい…落ち着け、亜季…」

一生懸命説得を試みるがそれは無駄だということがすぐに分かった。

体の四肢の動きがなぜか鈍くなっていた。

「これは…」

亜季の方を見ると怪しげな呪文のような言葉を唱えていた。

「永劫の連鎖を乗り越え…私の言葉を糧にすることで…その身を意のままに…あの女に絡みつけ…」

まさか…亜季は特異な能力を持つ者。

私と同じなのか？

しかしこんなつまらないことで技を出すのもどうかしている。

「ちょっと…」

未だに体は動かず何かが絡みついていていような感じだった。

「冬香…今まで散々私をコケにしてくれた御礼をそろそろしなきゃね」

おいおい…目が怖いぞ。

亜季は身動きの取れない私を見て、部屋の片隅にある箱に目をやった。

それは、私の私物で鍵のかかっている小さな鉄の箱だった。

「まさか…」

私の表情は青ざめていった。次に亜季が何をするか分かったからだ。

亜季は鍵の掛かった鎖をまるで紐でも解くかのように、不思議な能力を使っても簡単に外した。

何という能力の無駄遣いの数々…

そして箱は開けられ、中身を晒された。

中身は、もちろんのこと私の大事な物ばかりだった。

「思った通りね…有名レストランやファミリーレストランのただ券の数々…

そしてあなたの好きなRONDROの高級チョコレートと、翁屋の真空パックの餡蜜セット…

今までは大目に見てたけど、寮にこんなもの置いていたら駄目よね…ふふふふ、没収ね」

「ちよつと…そんなの理不尽だろ！私は何も覚せい剤とか、煙草を保持していた訳じゃないんだよ？」

必死に抵抗したが、今の亜季にそんな正論は通用しなかった。

「は？…学生寮の規則忘れたの？」

おやつ等の食品関係の持ち込みは禁止、それに品位を損なう物は決して持ち込んではいけない」

「食べ物分かるけど、ただ券は関係ないでしょう？」

「いえ…大いに関係あるわ。」

これはあなたが大食い店の戦利品として得たもの…

だとすれば賭博行為に匹敵する。それは品位を損ねる行為であり、結果そのものなのよ。」

だから違反なのよ…」

「理不尽だ…こじつけにしか過ぎないじゃないか!」

「あら、そう?でも私とあなた、どちらの道理が寮長さんに通るのかしらね」

こいつ…よほど私のことが頭に來たらしいな。

まあ、からかいすぎた自分が悪いのだが。

当然、自ら決めたことを覆すほど、亜季は意思の弱い人間ではないので、

そのままその箱は没収され寮長に預けられてしまった。

くそ…私が三ヶ月掛かって集めたコレクションが…

アレさえあれば当面食べることに困らなかつたのに…

うな垂れながら一人部屋に残っていると、亜季が戻ってきた。

「いい加減、この変な呪縛を解いてよ」

私は亜季を見てそう話した。

すると彼女はそう言えばそうだったと返事をする、またぶつぶつと何かを口にした。

「自らの帰る世界へと…力を水の如く解き放ち…元ある姿に転生せよ…」

その呪文のようなものが詠唱されると、私の体は元のように動くようになった。

「ふう…」

金縛りにあったような感覚だったが、これは一体どういったものなんだ。

そんな疑問だけが残っていた。

だからかもしれない。亜季には自らのコレクションを捨てられたことよりもまずそのことを聞いた。

「ちょっと…亜季。この力は何なのよ？」

すると亜季はうつかりしたといった様子でもなく、普通に答えた。

「八坂神社に伝わる、言霊の一種よ…」

「言霊？そんなレベルじゃないでしょう。実際に身動きが取れないのだから」

「まあ…私の言葉を糧に生きている守護霊を飼いならすようなものだから…表現が難しいわ」

「どっちにしても普通じゃないの…！」

「少し説明が必要ね」

「そう願いたいね」

「八坂神社の血族は神の子と言われていたの。

だから遺伝的な関係でこういった特異なことができるらしいわ。

昔は主に靈魂を鎮めることを生業としていたらしいから、その能力が時代と共に進化したのかもね」

「あなた…私の前でこんな能力を使って何とも思わないの？追求されるとか、気味悪がられるとか」

そのことを聞いても亜季は全く動じなかった。

「あなたも普通じゃないんですよ」

「え？それはどういう意味？」

私はとぼけようと思ったが、無理な話だった。

「あなたの体には人と違った気脈が見えるのよ。

全体を覆っているように全身から力が溢れている…そんな人間は見たことがない。

この学校に来たのも何か理由があつてじゃないの？」

鋭すぎる…しかし今は何も起こっていない状況だ。

ここでそうだと答えればこの先何があるか分からない。

適当にはぐらかすことにした。

「いや…その…よく人と違うとは言われるけど、そこまで深い意味はないよ。」

何を根拠にそう思うのよ。あんたが目の前で見せたような力を私が見せたことある？」

「む…」

その言葉には反論の余地がないと思っただらしく、亜季は黙ってしまった。

「別にあんたのこと気味悪がったりしないわよ。」

八坂神社の巫女ともあればそれ位の芸当ができて不思議じゃないからね。

私が普通じゃないって思うのは自由だけど、そんな大それた能力はないわ…

「しいて言っなら食の大きさかな？」

てへっと言ってみたが相手はそんなの分かってるよと言わんばかりに、無表情だった。

そして諦めて一言口にした。

「冬香…そういうことにしてあげるわ」

「そう…」

「まあ、私なりにストレスの発散ができたからいいわ。これで手打ちにしましょう」

「え？」

やっぱり私のコレクションは持っていかれる運命か。

「ねえ、ちよつとでも許す気ない？」

私は譲歩してみたが、亜季はばっさりと私を切った。

「無理！」

こうして私の望みは全て絶たれてしまった。

12話

私とは無縁のテストが開始された。

そうだあれから一週間が経っていたのだ。

しかし私はこの一週間特に何もしていなかった。

目の前に広がる膨大な量の問題が書かれた紙…いくら眺めてもその解答が生まれるわけではない。

さて…どうしようか。

漫画のように、私が実はとても頭が良くて授業を聞かなくてもこの程度の問題をすらすらと解くと？

甘い、甘すぎる…そんな能力私にはない。

生きるための知識なら膨大な量を経験で埋めることができたが、こんなパズルのような解答は私にはあまり経験が無い。

中学生時代は義務教育だから放棄することもできず、八鬼の仕事をこなしながら何とか卒業することができた。

そしてその時の私の成績は聞いて驚くな。

体育と家庭科以外はオール2だった。

八鬼の仕事は過酷以外の何物でもない。

良い成績を取らせたいなら業務をもっと減らせと言いたかった。

先生は口々にこう言った。

「君は…いつも寝ているのにこのぐらいの点数が取れるのには感心する…」

そうですか…それは、やれば出来る子なんだからの言葉。

当然何も私の心には響くことも無く、ずっとその成績を維持しつつ卒業した。

しかし今は高校生。中学生のように問題は甘くもなく、成績が悪ければ落第、留年だってあり得るのだ。

それだけは絶対に避けなければ、八鬼の恥さらしになってしまう。

何故、そこまでして高校に通っているかだって？

そんなの決まってる。

高校生は何かと優遇されて便利だからだ。

学生つてのは何でも優遇されている。学割だけで年間どれだけ普通の人と違いがあるか分かるか？

それに女子高生つてだけで株が上がるのだ。不思議な世界だ…

どうでもいいことはさておいて、今はテストだ…

以前に通っていた高校は勉強に励む高校でもなかったの、テストも中学校の延長上程度で赤点を取ることもなかった。

しかし今私の前にある問題は別世界だ。

このまま普通に解答しても十点取れるのだろうか？

いや、無理である。なら…

私は斜め前の子の解答用紙に目をやる。そして意識を集中させる。

解答用紙一点に。

薄く薄く…

この間五秒これで仕込みは完了。次は空間の移動…ここが難しい。

空間の固定は初歩、空間移動は上級者が行う物で私もほんの少しの距離しかできない。

先生の目がこちらを向く前に事を済ませなくては…

少し焦りながらも自分の解答用紙に薄い空間を張り合わせていく。

すると…

空白だった私の用紙は薄く字が浮かび上がってきた。

これは斜め前の彼女の解答用紙の表面を軽く気化させたのだ。

紙、鉛筆で書かれた文字そのものを合い剥ぎのような形でいただ

いたってことだ。

当然彼女の方の紙も少し薄くなって、字が薄くなっているのは言うまでも無いが、大して気にも留めないだろう。

こうして解答の半分は確実に埋まったのだ。

ならあとは自力で埋めるだけなので、簡単な作業だった。

どんなに悪くても五十点取れていれば赤点はない。

それを信じて残りのテストも次々とこなしていった。

そして三日目まで、どうにか無事にテストを終えることが出来た。

そこでふと思ったことが一つあった。

私も亜季に言ったように能力の使い方を間違えているのではないだろうか…

うーん。まあ、そこは気にしないでおう。

全てのテストが終わって、すぐに絵里が近づいてきた。

また、あの話かい…

私は予想がついていたので、絵里の口を塞ぐように先に言ってや

った。

「明日にでも行って見てきてやるから、もう聞くなよ!」

それを聞くなり絵里は安心した表情で、

「良かったー…私、冬香さん、すっかり忘れていたのかと思ったから…」

「悪い、さっきまで忘れてたけど、あなたの顔見て思い出したんだ」

「相変わらずひどいな」

「そう言っつなよ。びしっと、見て判断してやるから安心しろって」

「きつと辛口評価なんだろうね。でも覚悟はしてるからさ…」

「ここまで私にしつこくお願いする奴も珍しいのでつい聞いた。

「どうしてそこまで、私に頼るんだ？他の奴でもいいじゃないか？」

するとあっけらかんと絵里は答えた。

「だって…冬香さん、嘘つけないじゃない。

周りの人は気を遣って本音を言わないから、ここは思い切って、人の本音も聞きたいかなって…」

私にそれを求めるのはよほどのチャレンジャーだろ。

私の言葉で何人泣かされたと思っているんだ。

「あんなね…段階踏みなさいよ。いきなり私の判断を聞いたら失神するかもしれないよ」

「だから…少し、わくわくするかも…」

「ドMだ…ここに変態少女が現れた。」

私は軽く流すと、絵里を追い払った。

「は…」

チケットに釣られて任されたとはいえ、どこか気が乗らなかった。

それは亜季が私に話した言葉が心に残っているからかもしれない。

しかし、そんな大それたことにはならないだろう。

ただ、相手の男を見て、友達と何を話しているかちよつとでも聞けたらその感想を素直に言ってやればそれで終わりだ。

それで私の事を怨むなら怨みやがれってんだ。

そう思って次の日に男子校の辺りを探りにいったのだが、

それこそが運命の歯車の動き始める瞬間だったのかもしれない。

13話

私達の通う高校とは反対側にあるのが、絵里の彼氏とやらがいる男子高校だった。

徒歩でも三十分あれば着いてしまう距離だ。

私は放課後にすぐに行動を開始した。

隠密行動はお手の物…ささっと様子を伺って帰ろうと心に決めていた。

すると、お目当ての高校が目の前に見えていた。

その男子校は特に荒れているわけでもなく、普通の男子が通っている、普通の高校だった。

絵里からの事前情報では、今日は陸上部の部活が無くて、友人と遊びに行く約束をしているっていう話だったな。

校門側でそつと出てくる男の子に目をやっていると、お目当ての男が三人の友達と一緒に出てきた。

あれだ！

そう思うと、私は十メートル後を歩きながら尾行した。

流石にこんなに離れていれば話していることも聞こえない。

しかし容姿だけはしっかりと見ることができた。

身長…普通、顔…普通、物腰、雰囲気、普通…まあ、普通人間だな。

そして修也という名前もまあ、普通だ。

彼は、友達と近くの喫茶店に入った。いかにも馴染みの店のよう
な感じだった。

私も中に入って様子を伺おう。そう思いポケットの中身を確認す
ると、二百円出てきた。

よし…コーヒー半分だけもらおう。

そう決意して店の中に入った。

からんからん…

今時こんな音のなる喫茶店は当たり前なのだろうか。

そんなことを思いながら、お目当ての人物と背中合わせの席につ
くことにした。

「メニューをお持ちしました」

すぐに女の店員がメニューを持ってやってきたが、メニューをも
らう前に私はこう言った。

「二百円分のコーヒーを下さい」

「え？」

それはある意味勇気のある行動だ。普通の人間なら罰ゲーム的発言だった

店員の女は戸惑いながら、店長に聞いてきますと行ってそこから立ち去った。

ちくしょう…やっぱりか。

コーヒー半分なんて無理な話なんだ。

自分の無力さを感じながら背中越しに会話に聞き耳を立てていた。

「テストどうだった？」

「いや…的はずれだったな」

「数学は割りと簡単だったけど、物理がな」

「そうだな…あいつ予想以上に問題難しくしゃがって」

他愛も無いテストの話がされていた。

私もテストを終えたばかりだから共感できる部分はあった。

「あの…」

先ほどの女店員が私に話しかけてきた。

「店長が、特別にコーヒー二百円でいいよだそうです」

「マジ？」

「はい…」

やったー言ってみるもんだ。私は得した気分でも嬉しかった。

そして店員は挽きたてのコーヒーを持ってきてくれた。

「うーん、香ばしい香りと、この匂い…それが定価の半額で味わえるなんて…私はずいぶん」

ぶつぶつ言いながらコーヒーをひとすすりした。

その瞬間、小さな幸せを感じてしまった。

とりあえず今の段階では、あいつらの話している内容も目立ったこともない。

普通の人間の立証がされた訳だから、とても普通で私の惹かれる所はどこにもないよ、と絵里には素直に話しておこう。

私はそう考えながら、残ったコーヒーをゆっくりと味わおうと思っていた矢先にとんでもない会話が耳の中に入ってきた。

「修也、お前彼女とはどうなの？」

「そうだ。今日はその話がメインだったんだよな」

「絞れるだけ絞れるのか？」

何だと？

そこには不適切な言葉が混ざっていた。

私は思わずカップを置いてしまった。

「あそこの高校はお嬢様ばかりなんだろう。普通の高校生なんか誰も相手にしないよな」

「そうそう…財界人、一流企業そんな権力のある人間としか付き合
いの無いっていうほどだからな。」

お前が羨ましいよ」

当の本人は一向に口を開かなかった。何て話すんだ？こいつは…

私はときどきしながらその様子を伺った。

すると、有り得ない言葉が飛び出した。

「なに…所詮は夢見るただの女だよ。」

憧れだけで恋愛している馬鹿な女さ…

「財界人やら一流企業の人間との交流も飽き飽きしてるんだよ、実
際は…」

だから俺みたいな普通の人間と恋愛したいのさ」

「へー…そういうものか」

「でも親から無理に勧められると反発したくなるもんな」

「あいつから一方的に好意を持ってくれたからこっちは楽だったよ。好きだって告白したらすぐに承諾してくれたし、

何よりも好きなもんもほいほい買ってくれるから便利な奴だよ」

「お前、財布要らないな」

「それよりも逆に増えてるんじゃないの？」

「はははは…それは言い過ぎだつて。そこまでいくかよ。

でもさ、書いた物全部買ってもらったら後は適当にあしらって別れるぞ。」

だつて俺、他に付き合っている奴いるもん」

おいおい…

「まじで？二股？」

「すげーな。お前そんなに大胆なこと出来るの？」

「いやいや…あいつは親が厳しいから滅多に会わないんだよ。

だからこつちとしては都合がいい。

長く合えない女の気持ちは相当に高ぶっているから、

会った時にでも好きだ、愛してるを連発してやればそれだけでずつと夢を見ていられる」

「悪い奴だな…」

「惚れた方の負けなんだよ。所詮は…」

とても今までの人物とは思えない発言の連発だ。

私は頭を悩ませながら話を聞いていた。

「お前らもさ…雲雀ヶ丘の奴らと付き合ってみろつて。あいつら奴隷みたいなんだぜ。花嫁修業のためだけに生きてる感じぢや。」

そんな毎日を送っていたら人間おかしくなるって…そんな奴らを口説き落とすってそんなに難しいことでもない」

「本当か？」

「それだったら、俺も今度積極的に話してみようかな」

「そうしろ…便利だぜ、使える女ってのは」

こいつ…どこまで女を見下しているんだ。

私は少し苛立っていた。

しかし私は絵里には同情しなかった。

私を感じていたこの学校の違和感をこの男が的確に話していたから。

全く…これはどうしたらいいものだろうか。

複雑な心境を胸に秘めつつ、残りのコーヒーをすするように飲み干した。

「この勘定、お前に任せてもいいか？」

「ああ…別に構わないぜ。」

この前もあいつに会って、部活に必要な靴が欲しいって言ったならこれで買ってって、金くれたからな」

おいおい…絵里…物ならともかく、金をやったらその時点で終わりだ。

私はその言葉でこの二人の関係は完全に破滅へ向かっていることを感じた。

これ以上いても胸糞が悪くなるだけだから、あいつらよりも先にここを出ようと思い、私は席を立った。

そしてなけなしの金を払った。

そしてからんからんというあの音が鳴り響いて私は外に出ていた。

14話

「ちっ…」

今の心境を表した態度が出てしまった。

私は舌打ちをしつつその場で悩んでいた。

どうする…このことを正直伝えるのか。それとも嘘を付くのか？

いや、嘘を付くのは私の流儀に反する。それは無理だ。

なら…

私は真実を話そうと心に決めていた。

相手がどう思おうともそれが真実なのだから…

そうこうしている内にあの連中が外に出てきた。

相変わらず何も考えずへらへらしている。

女を利用し、それを悪びれた様子もなく偉そうに語るあの鬼畜が…

私はぎりつと奥歯をかみ締めながらも、思わず向きを変えて帰ろうと思った。

だが…そんな私を引き止める奴が。

「あ…君さ…雲雀ヶ丘の人だよね」

気付かれたのか…

振り返ってそつちを見た。

男が四人。その中の一人は羊の皮を被ったゲテモノだ。

私は睨んでしまいそつちになった。

「あのさ…よければ僕らと遊びにいかない？」

さつき喫茶店にいたときからちよつと気になってさ…

まあ、その、遊ぶって言うてもゲーセンとかそついう所だよ」

ふふふ…そつか…こいつ、あの男に感化されて私という獲物に目を付けたのか。

雲雀ヶ丘の制服を着ていれば誰でもいいのだろう。

それを分かった上で私は演技をした。

「そつ…どつしようかな」

それらしく恥らつ演技をしてみた。

じらしつつも気を持たせる…そんな行為を今までしたこともないのしてみた。

すると男は予想通りに押すことに徹した。

「大丈夫だって…ほんの一时间ぐらいだし、ちゃんと門限までには帰れるからさ。」

人もたくさんいる場所だから危険もないよ。どう？駄目かな？」

なるほど…あくまでも良い人間を貫き通すのか…

いいだろう…付き合ってやるさ、その茶番に。

「そういうことなら…いいかな…」

声を細くしながら私は承諾してその男達についていった。

男達は当然やったぜ、といった表情を見せていた。

馬鹿が…お前らの少ない経験と脳みそではそう思うことが関の山だ。

私はこの先に起こりえるあらゆることを分析しながらほくそ笑んでいた。

「どう？このゲーム楽しいかな？」

修也率いる三人は一生懸命私の気を引こうと頑張っていた。

修也は絵里という金ズルが存在するので私には興味を示さなかった。

お前らでがんばれよとでも言うべき態度だった。

「うーん…難しいね。私には無理かな？」

私は自分でも鳥肌が立つぐらいのぶりっこをして見せた。

本当だったらこんなレーシングゲーム、ハンドルをもぎりにとって相手にぶつけて戦意喪失させれば型がつく…

慣れないことをして疲れながらも様子を伺った。

「じゃあさ…次は僕とこれやろうよ」

こいつら頭おかしんじゃないのか？こんな仮想世界で楽しんでどうする？

銃で敵を殺すなら戦場に行け！

車で勝負したいなら峠を攻めろ！

私はそんな持論を展開しながらあくまでぶりっこをしながらその場を乗り切った。

そして一時間が過ぎた辺りで男達は本性を現した。

「冬香さん。お願いなんだけど、僕と携帯の番号交換してくれない？このままさよならってのも…その…嫌だからさ」

「あ…なら俺にも教えてよ。俺も交換したいよ」

どの口がそんなことを言わせているんだ。

笑わせてくれる…

15話

私はこんな茶番に付き合うほど暇でもない。

さっさと私らしい状況に持っていくとするか…

「じゃあ…ここはうるさいから、外で話しましょう」

そんな言葉は男心をくすぐるのだろうか、みんな喜んでついてきた。

本当に単純な奴らだ…

私はゲームセンターの裏路地へ連れ出し、話をしようと思った。

人がまるで来ないような薄暗い路地裏。

そこは何かあるのではと思う少年たちの欲望を高める場所に最適だった。

しばらく歩いてから、私は不意に立ち止まると笑いながら立ち止まった。

「くくくく…」

その様子を見て男達は顔を見合わせていた。

そして私が発した言葉は、男たちが期待するような甘い誘惑などではなかった。

それはこいつらに人生の厳しさを分かせてやるための言葉だ。

「おめでたいなあー…お前ら馬鹿か？何も知らないで私がここに来たとも思っのか？」

どうせ私を利用するつもりなんだろう？」

男達の表情は一変する。

「な…何言ってるのさ」

「そうだよ…そんな根拠もないでたらめなこと」

あくまでシラを切るつもりか。

それはそうだろう。ここでそうなんですという馬鹿はいない。

しかしこいつらは本当の馬鹿だ。私を誘ってしまったのだから。

「いいさ別に…まあ…お前らみたいな軟弱な馬鹿は、半殺しで勘弁しといてやるよ。」

私を標的にしたんだからな。それともこのまま尻尾を巻いて帰ってもいいんだよ…私が怖いならさ」

にやりと笑って挑発をする。

私は彼らには逃げないで欲しいと願っていた。

こんな怒りを感じたのは久々だったのだから発散させなければ勿体ない。

案の定、男達は私を鋭い眼差しで睨みつけると、女のくせに言わんばかりの雰囲気を出していた。

「ちっ…こつちが下手に出てれば随分な言葉だな」

今までの穏やかな口調はどこにも見られない。それは悪意そのものをぶつけてきている。

「久々に頭にきたよ…なあ、こいつどうする？」

「少し分かせてやるか？修也どうだ？」

「ああ…辛いデジカメもある。裸にして写真撮ってやるっぜ」

「そうすれば、その生意気な口も黙るんじゃないか？」

くくく…こいつはいい。私好みの展開になってきている。

笑いを抑えることに必死になった。

「護身術なんかで腕に自身があるのかもしれないが判断ミスだな…こつ見えても俺と、こいつは格闘技の全国大会上位者だぜ」

「女のカじゃどうにもならないこともある」

体格の良い二人が何かをしているのは私も感付いていた。

残りの二人は絵里の彼氏の修也と、修也と同じぐらいの背格好の男だ。

修也は陸上部だって言ってたな。足はまあまあ速そうだ。

その隣にいる男は…論外だな。何もやっていない。

それぞれの体を見て大体の目付けが完了していた。

そして四対一の無謀な戦いが始まったのだ。

ここは裏路地でそんなに広くはなかったので、四人が一度に襲い掛かるのは不可能だった。

私は自然体を貫き通し、一切の迷いはなかった。

「おらあ」

私のことを押し倒そうと一人目の男が力任せに突っ込んできた。

馬鹿が・・・

両手で肩を掴もうとしているのが丸見えだった。

それなら私はから空きの腹部を攻撃するとしよう。

男の両手をしゃがんで回避すると、そのまま低い姿勢で拳を腹筋へ叩き込んだ。

男の力に正面から力で対抗したのだ。

女の力で鍛え上げられた男の腹筋を殴ったとしても拳を痛めるの

が当たり前だが、
私の力は次元を超えている。

腹筋など関係なしに体ごと後方へ吹き飛ばしてやった。

男の体は三メートルは近く飛んで、お決まりのようなポリバケツにぶつかり、ゴミを辺りにぶちまけながら失神した。

それを見たもう一人の格闘技経験者の男は激怒した。

「ふざけんなあ」

冷静にこの状況を見ていれば力の差が分かるはずなのに、私が女ということに信じる気もなかったのだろう。

男は拳を固め、殴りかかってきた。

いいね。こっちの方が戦っている感じがする。

轟音と共に男の拳は空しく空を切っていた。

それよりも私が切らせていると言った方が正解なのだろうか。

右に左に振り回される拳と言う名の凶器は大して怖くも無い。

この程度の実力なら目を瞑っていてもかわせる…

こつこつ奴には明らかに勝てないと分からせない。

そう思って、男の放つ無数の拳の一つを無造作に掴み取った。

「え？」

男の動きはぴたりと止まった。

「さあ…どうする？」

私は拳を握る力をどんどん強めた。

めきめきと骨の軋む音が聞こえる。

「く…っ…」

苦痛の表情で顔が歪んでいるのが分かった。

しかし男は自分のプライドが許さなかったのだろう、空いている拳を私の顔に目掛けて振りかぶった。

しかしそれよりも先に私の空いている拳が顔面にめり込んでいた。

そしてさっきの男同様に回転しながら宙を舞うと、地面に無様な格好で崩れ落ちた。

死ぬと困るので、手加減はしておいた。それでも、まあ、歯の数本ぐらい折れているかな。

残るは二人、さあ、この状況を見てどうする？

修也は何もせずただ立っていたが、それとは対照的にもう一人の男は策も無しに突っ込んできた。

私は軽くそいつの攻撃をいなすと、顔を見ることもなく、裏拳をそいつの顔面に叩き込んだ。

一撃でそいつの自尊心も砕きつつ、私は目的の男の前に立った。

「あんたはどうするの？私の写真を撮るんじゃないの？」

にじり寄ると修也はびくびくと後退するだけだった。

「女がみんな弱いとも思ってた？」

自分の思い通りに支配できる単純な生き物だと…ふふふ…確かにそついう奴もいるかもしれないわね」

「なら、何故、お前は俺たちに腹を立てる？」

軽く無視でもすればいいだろうが…」

「そついう奴は利用されても私はしょうがないとも思っている…」

「ただどね、私がそついう風に思われていたから腹が立ったのよ！」

「そんな…理不尽な。見た目で大体の人間は判断するだろうが」

「そんなの関係ない。私を標的にした以上はそれなりの報いを受けなければならぬのだから…」

「それにあんた達みたいな悪ぶったクソガキは大嫌いなよ」

私ははつきりとそつと言つと、修也は観念したかのように細い声で交渉してきた。

「なあ…俺はまだお前に手を出していない。だから見逃してくれな

いか？」

「虫のいい話ね…」

「あんたも男ならここに転がっている男達みたいに無謀でもいいから、私に掛かってきたら？」

「それは…」

「こいつはもう何も出来ない。」

「私の力に屈してしまったのだ。」

「情けない…悪なら最後まで、それを貫けてんだ。拍子抜けするぐらいの腑抜けだ。」

「まあ、いいさ…お前みたいな馬鹿には何の興味も無い。私はもう行く…」

「そう言ってもう関心はないような素振りをしてながら修也の前を横切ろうとした瞬間、私は修也の頬を殴っていた。」

「予想外の行動に身構えることもできなかったのは当然だ。」

「がくんと崩れ落ちる卑劣な首謀者の男。」

「弱すぎる。」

「私は返り血のついた拳をこすりながら、裏路地から表通りに出て行った。」

何にもないと思っていたのに、こんな結末を迎えようとは…
絵里の馬鹿：明日なんて言えばいいんだよ。

頭を悩ませながら学生寮を目指して帰った。

16話

翌日、私は昨日の出来事を思い出しつつも教室に入った。

そこには絵里の姿があった。

さて…何と話そうか。

あんたの彼氏は最低人間だよ。あんたはただ利用されてるだけ…
これにしようか。

それとも、あんたはあんたでがんばらないって励ますか…どっち
にしても無理があるな。

しかし嘘をつくのは嫌いだからはっきりと教えてやるか。

そう決意して、絵里の下へ近づくと、彼女は逆に私に食って掛か
った。

「ねえ！どうしてよ！」

「は？」

私はまだ何も言ってない。

「昨日、修也君を殴ったでしょ！それってどうして？」

あの馬鹿…彼女にもその話したのか？

男なら女に殴られたなんて恥ずかしくて言えないぞ？

「あれか…あいつらが私に無理やりからんできたから…その不可抗力だ」

素直に話してやろうかと思ったが、絵里の怒りは収まらないといった様子だった。

「嘘だよ！だって修也君は、裏路地を歩いていたらいきなり後ろから殴られたって話してたよ！

しかも鉄パイプで…」

どこをどう捻じ曲げたらそんな話になるんだ。

あいつ…どこまで腐った奴なんだ。

自分の彼女と同じ高校の奴だからまともな学園生活送れないように悪い噂でも流そうって魂胆か？

「痛い…痛いって…ずっと言ってたよ！」

絵里は涙を流していた。そこまでの男に心を奪われていたのか。

居室はしんと静まり返っていた。

「ふざけないでよ！私に恨みがあるなら、私にやればいいじゃない。それを…修也君を傷つけて…」

「おい！私の話も聞けよ！」

「うるさい、うるさい！あんななんか、大嫌いだよ！」

ぼろぼろ涙を流して、わめき散らしながら絵里は私の頬をひっぱたこうとした。

しかしそのまま叩かれるのは私の望むことじゃない。

その腕を掴んだ。

「落ち着けよ！お前は利用されてるんだよ。あの男に……」

「何を根拠にそんなこと言うの？」

「あいつらが話しているのを聞いた。そしたら……」

これは話すべきなのだろうか。決断に一瞬の躊躇はあったが、そのまま続けた。

「あんたは都合の良い女だってさ。何でもほいほい買ってきてくれる夢見るお嬢さんだって」

言い終わると私は掴んでいた手を離した。

その言葉は絵里をどれだけ傷つけたのか、今の私には分からなかった。

絵里は力が抜けたかのようにがくんと垂れていた。

「それで……それがどうしたって？」

低い声で私を下から睨みつけながら絵里が薄ら笑いを浮かべていた。

その目は酷く冷淡で、いつもの彼女の表情ではない。

まるで虫けらでも見る目だ。

「嘘つきの話すことなんか…信じられないのよ！」

「お前…」

完全にイっちゃてるな。

もう何を話しても信じてもらえそうにない。

私はただ黙っていることしかできなかった。

そして絵里はそのまま教室を飛び出した。

静まり返っている教室はとても不気味で、私もこの場所にはいづらかった。

だから私も無言で教室から出る形をとることにした。

17話

何をやってるんだ…私…

私は街の真ん中にある公園のベンチで腰を下ろしていた。

この公園は亜季とたい焼きを食べた場所だ。

時間は十時過ぎ…

こんな午前中に公園を利用しているのは、年寄りか、子どもを連れた主婦ぐらいのものだ。

何だって、あそこまで言われなきゃならないのよ。

あいつらだって私を利用したから当然の報いじゃない。

人に頼って、相談して、自分の力の無さを人のせいにして…ったく、くだらない。

自分を保護しすぎだ！

そこにある鉄製の大きなゴミ箱を蹴りたくなる気持ちを抑えつつ同じようなことを何度も思った。

この学校のお嬢様たちはやっぱり肌に合わない。

それからそこではばらく時間を潰すと、学生寮に戻った。

するとそこには亜季の姿があった。

珍しい。彼女の帰宅は五時過ぎなのに四時前にいるなんて。

「説明して…」

開口一番がこれか…

クラスの話聞きつけたか。

私は素直にいきさつを話した。

「そう…」

話し終わると亜季は落ち着いた様子で返事をした。

「なあ、私が悪いのか？」

私は亜季に聞いてみたかった。

こればかりは一人で勝手に解決して、納得することができなかつたからだ。

「私は…あなたの取った行動は軽率だと思っわ」

「は？」

いきなり否定的だ。

「話を聞くまではよしとして、その後、声を掛けられたのに付いて

いく理由は？」

「さっき話しただろ。こらしめてやるつもりで、ちょっと痛めつけたって」

「それが間違いなのよー！」

「どうしてー！」

「それはあなたの自己満足。」

絵里の事を考えたらその場は逃げて、その事実をゆっくりと伝えるのがベストよ…

彼女の性格を見てるなら分かるでしょ」

「分かるわけないだろ！」

あいつが勝手に私に相談して、それで本当の気持ちを話させて言っただから。

知るかよ、そんなの…あいつが彼氏に捨てられようが、ぼろ雑巾みたいになろうがな」

次の瞬間、私は頬を亜季に叩かれていた。

ぱんという乾いた音が響き渡り、久しい痛みを感じていた。

油断はしていなかった。しかし亜季の一撃は警戒する間もないほど自然な流れだった。

「だから話したでしょ…人の気持ちを軽んじるなって…今のあなたに欠けているの正にそれよ」

私はもう何も言えなかった。

そしてそのまま二人何も話さないまま夜を迎えた。

私はいつもの業務を行い大蛇山へと向かった。

今日あったこととは忘れ、今は業務に没頭するとしよう。

いつものように集中して、自らを巨大な受信機にしていく。

何もなかったので、一時間程度で終わった。

するとそこに人の気配がした。私はそちらを見ることもしないで闇に向かって話しかけた。

「何の用よ…耶甲…」

大蛇山で二度目の対面となる。

「いやー…ほっとけなくな。」

幸い俺の業務も今のところ無いから、冬香の援護でもしてやってくれって言われてるからさ。」

「暇人…」

「そう言っつな…それよりも、お前、何かあったのか？」

「どっしてそう思うっ？」

「あ？お前がイラついてるのが分かるからだよ」

「そう…そう思うならあなたのせいかもね」

「はいはい…まったく、こっちは損な役回りだな」

「ふん…」

「まあ、特に問題も無さそうだから、俺はこのまま行くさ…ま、仕事に専念してくれ」

耶甲は軽くあしらって立ち去ろうとした。

そんな耶甲を私は思わず呼び止めてしまった。

「ねえ、耶甲」

「あ？」

振り返って私の方を見た。

「私さ…今の高校止めたいんだけど無理？」

その言葉を聞くと、耶甲は目を丸くした。

「お前…本当に何かあったんだな。そんな言葉を聞くなんて夢にも思わなかったぞ？」

人間関係で揉めて嫌にでもなったのか？」

鋭すぎるぞ。しかし私は何も答えなかった。

「結論から言うと無理だな。」

最初の予定にもあるようにお前はこの高校で一年間を過ごさなければならぬのだからな。

前の学校でも問題は何も無かったはずだ。それを変えると言うのは任務の放棄に匹敵するぞ。」

「そんな…私はそこまで考えていない。ただ、そう思っただけよ。」

「そうか、ならいいがな。でも、お前が悩む姿なんて見たことがないから俺は楽しいんだがな…。」

「悪趣味な奴だな。いいよ、分かったよ。私は私なりのやり方で過ごすからさ。気にするな。」

耶甲は私の戸惑う姿を見て楽しんでいるようだった。

それが私の気持ちを更に逆撫でした。

「早く行けよ！」

追い払うように叫んでしまった。

すると耶甲は大人しく闇に姿を消した。そして去り際に一言。

「冬香…それは恥ずかしいことではない。これから先にもお前に必要なことだ。」

何を言っている。

私は耶甲の言葉の意味を深くは感じ取らなかった。

苛立ちだけが残ったままその場に立っていた。

朝、うるさい目覚ましの音で目を覚ますと、そこには亜季の姿はなかった。

朝早く登校したのだろう。

同じ部屋の人間とも気まずくなるのは流石に居心地が悪い…

そう思いながらベッドから起きると、私の目にテーブルの上にある一枚のメモ用紙が飛び込んだ。

何だ？

それを手に取るとそこには、私宛へのメッセージが書かれていた。

『冬香…昨日はごめん。一方的にあなたを責める形になってしまった。』

私も人の気持ちを考えない発言だったわ。

でもあなたのが嫌いであんなことを言っただけではないの
分かってほしい…

『できたら仲直りしよう』

けっ…そう思うなら素直にそう言えっつてんだ。

しょうがないな。帰ったら話でもしてやるか。

私はメモ用紙を握り締めながら何故か薄っすらと笑みを浮かべていた。

しかし、どこかほっとしている自分がいるのは何でなんだろう？

今までに無い感覚に襲われたことを不思議に思いながら私は身支度を整えた。

相変わらずクラスの視線は痛い。

私を見る目は今まで以上に厳しいものだった。

まあ、昨日の出来事を目の当たりにすればそれもそうか…

そんな第三者たちのことは全く気にしないで私は席についた。

一日の大半は私は寝て過ごすことに決めているので、そんなのは問題ではないのだ。私は私だ…

しかし絵里の姿が見られない。

今日は休んでいるようだ。

無理も無いか…あんなに揉めればすぐに学校に来たいなんて思わない。

私は絵里の席を見て、再び苛立ちを覚えた。

くそっ…

そしてその日はそのまま何事も無く夕方を迎えることとなった。

18話

深い深い黒い海の中に沈んでいる自分がそこにはいる。

それは誰もいない静かな世界。

ただただ無限に広がる海の底から、空気を求めるように這い出そうとする自分。

そしてこの黒い海が何を表しているのか、俺は分かっている。

そうだ。絶望だ…

いろんな人間の悲痛の叫びと、憎悪、悪意様々だ。

この世界には希望なんてものはない。ましてや神なんて存在も皆無だ。

誰一人として俺を救える者はいない。

そうだ…世の中腐ってる。腐ってるんだ。

運命なんてものは、何の前触れも無くいろんなものを奪い去ったり、幸せにする。

俺はそんな運命という理不尽な歯車に逆らってやるよ。この命が亡くなるまで。

俺は目を覚ました。

いつも見る夢、あの時から変わらずこの一年間見続ける…

いい加減見たくもないが、深層心理がそれを許さないのだろう。

悲劇の光景が脳裏にこびりついていて、忘れることを許さない。

「ちくしょう…」

その言葉しか浮かばない。

無力だった自分。

それがたまらなく許せない。

俺が目覚めると、そこは見慣れた雑居ビルの中だった。

誰にも使われていない真新しい廃墟。

しばらくの間、塹にしようと思っていた。

家が無いわけではない。

俺の家はあった。しかしあそこには二度と戻りたくない。

「ちくしょう…」

生活必需品はあらかじめ整っていたので、不自由はしなかった。

コーヒーを自分で沸かして、朝食のパンをかじった。

「学校に行くか…」

何のために通っているのかは自分自身も分からなかったが、今までの生活を変える気はまだなかった。

俺が住んでいる町はごちゃごちゃした大都会だ。

人も多いし、車も多い。

空気が悪ければ、自然も少ない、コンクリートの街並みだ。

だから俺のような奴が勝手に住める、壊すだけの廃墟ビルがいくつも存在するのだ。

管理体制が甘すぎるのはいうまでもない。

俺の名は如月雁亜、十七歳だ。

四ヶ月前に不慮の事故に会ってから毎日のように悪夢にうなされる。

それは事故の後遺症もある。

脳内に多少の衝撃を受けた俺は人とは違うものがはっきりと見えるようになった。

それは死霊…

死んだ者の魂がはっきりと見え、そいつと会話したり思い通りに操ったりすることが出来るようになった。

始めは自分の目がおかしくなったのかと思った…

病院内を有りえないぐらいの人が昼夜問わずに四六時中歩き回っていたからだ。

しかもそいつらは決まって俺を見るなり笑ってやがる。

まるで何かを訴えるかのように…

今思えば、あれは院内で死んだ患者達だ。

成仏できない魂が彷徨っているのだ。

それから段階を踏むように、会話、接触、そして思い通りに操ることが出来るようになった。

それは俺の才能が開花した証でもあった。

なら…俺にはやるべきことがある。

もしも俺の望みが叶うなら、こんな訳の分からない能力でも何でも利用してやるぞ。

そう思いながら学校へと向かった。

学校に着くといつものような雰囲気で、みんな俺には近づかなかった。

あの事件から四ヶ月経って俺は性格ががらりと変わった。

人生観が変わったせいもあったのだろう。

人をまるで寄せ付けない。

毎日のように死者と話、操っている生活をしていれば、普通の奴らは俺の事を気味悪がる。

それはそれでいい。

まともな人間と付き合うことよりも死者と付き合うことに慣れてしまった俺にとって、人はうつとしいだけだ。

くだらないおしゃべり、上辺だけの付き合い…うんざりする。

それでも高校生を続けている俺は矛盾しているかもしれない。

しかしそこには成すべきことが二つあったからだ。

その話をするには四ヶ月前に遡らなければならない。

19話

四ヶ月前

「久しぶりの連休だ。雁亜お前の誕生日祝いも兼ねてどこに行きたい？」

父親は俺と妹にそう聞いた。

「いや…別に…」

俺には特に何も思い浮かばなかったのでそっけない返事をした。

すると脇で一つ違いの妹が叫んだ。

「私、水族館に行きたい！この前オープンした所。

あそこでさ、凄い芸のできるイルカやオットセイがいるって聞いたから行ってみたい！」

大はしゃぎで父親に向かって話しかけた。

しかしよりによって水族館か…俺は気が進まなかった。

「えー…休日なら混んでるだろ。そんな止めようぜ。それに水族館で遊ぶ年でもないだろう？」

思い切り否定したが、妹は食い下がらない。

「お兄ちゃんは人ごみが嫌いだからそんなこと言うんでしょ。」

この際にそんなの克服したら？それに他にいきたい場所でも思い当たるわけ？」

それを言われると辛い。

俺は曖昧な人間だから物事の判断を他人に委ねる傾向にある。

「ん…いや…」

「なら、決定だね。お父さん！行こうよ」

妹は強引に今日の予定を決めてしまった。

まあ、いいか…

こうして俺にとっての誕生日のお祝いの旅行が決行されたのだが、それが悲劇の始まりだったのだ。

俺たちは一泊二日の旅行に出掛けた。

予定はこうだ。

まず水族館に行って数時間過ごし、それから旅館に泊まって一休み、

次の日は近場の大手ショッピングセンターで買い物をして帰る。

誕生日の祝いも兼ねていたので、何でも好きなものを買ってくれ

ると父親は言った。

そうか…それならば、高価なものでも頼もつかないかな。

俺は密かな期待を抱きつつ車に乗り込んだ。

家族四人が乗り込んだ車はそんなに大きなものではない、

セダンタイプのファミリーカーだ。

それでも文句の無い大きさだった。

俺たちは車の中で適当にくつろぎ、談笑をして、お菓子を食べつ

つ、

高速を乗ってごみごみした街から少しずつ離れていった。

景色がどんどん変わっていく。

「うわー…緑が増えてきたね」

「ああ…」

「お兄ちゃんさ、都会よりも田舎好きでしょ」

「は？何でだ？」

「だって…都会にずっと暮らしているのに未だに人ごみが嫌い、行列が嫌だって考えられないよ？」

「苦手なものは、苦手なんだよ」

「ふーん」

「でも…田舎は嫌いじゃない。好きな方だ。温泉なんかも風情があるしな…」

「何かおじいちゃんみたい」

「うるせーよ」

他愛も無い話を二人でしていると、母親も話しに加わってきた。

「雁亜…あなたテストの準備は大丈夫？」

「ああ…」

「お願いだから、高校ぐらいはきちんと卒業してね」

「おいおい…母さん、それじゃあ、まるで俺が不良少年みたいだろ？」

「はは…そんなつもりじゃないんだけど、あなたもそうなる可能性だってあるのよ？」

「決め付けんなよ」

「まあまあ…この先どうなるか分からない世の中だからこそその心配よ」

「そうか…なら大丈夫だ。俺はそんなに根性無しじゃない。ちょっと」

「とやそこらでへこたれないよ」

「お兄ちゃん強気だねー…流されやすいくせに」

「お前には関係ないだろ！」

「おいおい…今からそんなにシビアなこと話すことでもないだろ。楽しい未来が待っているかもしれないのだからな」

父親が助け舟を出してくれた。

「そうだよ。何も始まっていないのに、勝手なことばかり言うなよ」

「はいはい…」

母親はしょうがないと言った感じで折れた。

俺も別に悪い気はしなかった。

そこまで心配してくれるのは親心なのだから…

「あのさ…お兄ちゃん。実は私もプレゼント用意してあるんだ」

「へー…」

大した興味も無い返事をしてみせた。

「それは何だ？」

「今話してもつまらないじゃん。今夜渡すよ」

「そんなら期待しないで待ってるぞ」

「お兄ちゃん、天邪鬼……」

そんな会話はしていた矢先にとんでもない衝撃が俺たちを襲った。

まるで頭を鈍器で殴られてような痛み。

「あ……」

俺の意識はそこでぷっつりと絶たれたのだ。

20話

「目が覚めたかい？」

そんな言葉が聞こえてきた。

俺は何があつたのか全く分からなかった。

そうだ。車の中で会話をしている…それで、いきなり目の前が真っ暗になつたんだ。

あれは何だつたんだ？

俺はきよろきよろと辺りを見回し声の主の方を見た。

「君は三ヶ月意識不明の重体だつた…」

「…」

「しかし奇跡的に目覚めたんだよ」

まさか…

「脳に多少のダメージは受けたが、大丈夫のようだね。僕の指が何本に見える？」

白衣の男が指を差し出して俺に何度も話しかけた。

ついさっきまで車の中だつたはずだ…

周りの風景がここまで変わっているのはどうしてなんだ？

「何だよ…これ！」

思わず叫んでしまった。

今ある出来事が全く分からなかった。

少し前まで俺は車に乗っていた。それが何故三ヶ月も経っている？

その疑問だけが頭の中にあった。

「落ち着きなさい…」

医者であろうその男は、俺を説得した。

「君は事故にあったんだ。高速道路の橋の上でね」

「え？」

「お父さんはハンドル操作を誤ったらしい。タイヤを滑らして、橋の上から君達の車が落ちた…」

な…何だと？

「じゃあ、父さんや母さん…妹はどうなったんだ？」

「残念ながら…」

「何だよ！何で俺だけが助かっているんだ？おかしいだろ！
だって一緒に落ちたんなら俺も死んでるだろ！」

何も理解することが出来なかった。

しかし体は…いや、細胞が本能で怒りと絶望を感じていた。

医者は悪くないのについて当り散らすかのような口調になってしま
った。

しかしそんな俺を見ても医者は落ち着いたまま眼鏡を直して俺に
話して聞かせた。

「今の君に話しても信じてもらえないかもしれない…
しかしこれは紛れもない事実なんだ。君が助かったのは、奇跡に
近いんだ。

車が落ちた時に君の座っていた箇所だけが、何かに守られるよう
に衝撃が少なかった。

それだけなんだ…」

俺は何も話せなかった。

じつと下を見つめて掛け布団を握り締めていた。

無言の時間が進んでいる。

「今はゆっくりと休むことを考えなさい。
焦らなくていいんだ…君の脳もそれなりの衝撃を受けている、治
すことに専念するんだ」

そこまで話すと、医者は看護婦を連れてぞろぞろと出て行った。

ボタン、とドアの閉める音が俺を一層孤独な気持ちにさせた。

こち・・・こち・・・こち・・・

時計の秒針がうるさいくらいに部屋に響いていた。

目の前に広がる白い空間は未だに現実感を与えてくれない。

虚無の世界そのものだ。

まるで今の自分の心のよう・・・

「何でだよ・・・」

一人呟いて涙を流していた。

嘘ではない、本当なんだ。

そのことを実感するまでに数時間を要した。

気が付けば外は昼から夕方に景色を変えていたのだ。

差し込む夕日が白い世界を赤く染めていく。

悲しみはじわじわと心に湧き出すように俺の心を完全に侵食していった。

その日の夜はずっと泣いていた。

21話

目覚めてから一ヶ月目になり、俺は体の異変に気が付くことになる。

見えないものがずっと見えるようになったのだ。

いつも時間を問わず病院内をうろろしているあの爺さんは何だ？

それにあそこに血を流して立っている男は何故治療を受けない？

ここにも…あそこにも…

大きな怪我をした者や、青白い顔の者が平気な様子でうろろしているのが見えたのだ。

ここは病院だからそれは有り得る光景だ。

しかしおかしいのは、そいつらは壁をすり抜けたら、他の人には見えてないってことだ。

たぶん…幽霊だということには分かった。

しかしこんなにはっきりと見えるものなのか？

俺には普通の人間にしか見えなかった。

こんな話を誰かにしたら頭のおかしい奴だと思われてまた検査されるに決まっている。

だから俺は黙っておくことにした。

俺の退院が明後日に迫っていたので、変な発言は控えておくし
よう。

「調子はどうかね？」

いつもの診断の時間だ。

俺は医者と向かい合うように診察室に座っていた。

「特に異常は…」

「そうか…ならいい」

そしてそこから診断に関する質問を幾つか医者が話していると、
青白い顔をした爺さんがずっと部屋に入ってきた。

またか…

俺は知らない振りをしていた。当然医者には見えていない。

すると、その幽霊は医者に食って掛かるように話していた。

今まで幽霊の話す言葉など聞くことはできなかったが、その時に
はつきりと聞いた。

「よく聞け！お前は…俺を殺した！お前が俺を殺したんだ！この人
の皮を被った悪魔め」

酷い形相で医者に向かってまくし立てるように話しかけた。

「一ヶ月前：貴様は金欲しさのために、依頼され私を心臓手術と称して周囲に分からないように殺し、

死亡診断書を書きかえた…

い…今でも私の死に際に…貴様の呟く声はずっと残っているんだ。脳裏にこびりつくようにな！

可哀想だけど弱いものは…利用されるんだよって言葉だ。この悪魔め！」

いくら罵ろうが医者には全く聞こえていなかった。

その幽霊が何度も医者の顔や頭を殴ろうと腕を振り回しているのが見えるが、触れることはできなかった。

それに対して医者は違和感を覚えたのか、頭の辺りを触り始めた。

俺は視線を外すことなくじっと一部始終を見ていた。

「ん…どうかしたかね？」

俺がじっと医者の後ろを見ていたのが気になっていたんだろう。

「いえ…先生…俺からも質問していいですか？」

「ああ…なんだい？」

医者は頭を触りながら俺の話しに耳を傾けた。

「一ヶ月前に手術をした際に亡くなった方っていますか？」

「急に何を言うんだい？」

「ここは大きい病院だから何件かはあったかもしれないけど、私は知らないな…」

「それにみんな手遅れの患者さんばかりだよ」

「心臓手術なんです…」

「え？」

一瞬医者顔が曇った。

「こいつ…明らかに何かを知っている。」

「俺はもう一押ししてみた。」

「七十歳ぐらいのおじいさんです。」

「そうですね…あごの下に大きなほくろがあって、頬に傷がある…」

「俺は目の前で見えている老人の特徴をそのまま話した。」

「すると医者顔はどんどん青ざめていった。」

「はは…何のことかな…」

「俺が医者顔に話しているのを聞いていた爺さんは、自分の話を聞ける奴がいる、」

「と勝手に俺の事を理解者だと判断した。」

「おい、そこのお前…頼む、こいつを私に代わって裁いてくれ！」

必死に懇願する幽霊。

しかし俺にはどうでもいいことだ。

「いえ…忘れてください」

自分の目覚めた能力を確認すると、そのままそこを立ち去った。

22話

退院の日。

俺の能力が目覚める二度目の日となった。

俺は退院の準備を整えていた。

しかも一人で。

俺には親戚がいなかった。

それもそのはずで、父親と母親は駆け落ちのような形で逃げるように結婚し、俺たちを産んだ。

連絡の取れる親戚など存在しなかったのだ。

しかし父親の残した生命保険のお金はあった。ならそれでしばらく食いつなぐとしよう。

だが、高校はどうする…入学したが、通うべきか。

そのことを悩みながら荷造りを終わると、とりあえず自宅に四ヶ月振りに帰ることにした。

「さ…準備はできたかな？」

俺の担当医のあの医者が後ろから声を掛けた。

家まで俺を送ってくれるらしい。

一昨日、俺が聞いたあのことについては、今まで特に触れることも無かった。

車に乗り込むと、二人で重苦しい雰囲気ドライブを楽しむことになった。

車中の会話は何も無い。

俺があんなことを言ったせいもあったが、年の離れた大人と会話するのは苦手だ。

それに…こいつからはあの爺さんが話していたように人ではない邪悪な部分を感じる。

偽善者…そう言ったほうがいいだろう。

「あのさ…少し寄りたいたいところがあるんだけどいいかな？」

医者が話しかけてきた。

「え…どうぞ」

断る理由も無いので、そのまま意見に従った。

車は病院を抜けてどんどん山道に入っていく。

俺の住んでいる所からこの病院までは真っ直ぐ車で三十分程度。

何を思ったのかこいつは街の脇に存在する山道を通って遠回りをはじめた。

山に用事なんかあるのか？

俺は不思議に思いながらぼーっとしてみると、車は急に止まった。

「ここでいいか…」

目の前には杉林が広がり、昼間だというのに真っ暗だ。

人気も無い。

なるほど…そう言うことが。

俺は瞬時に理解した。

その時には医者俺を側面の窓に顔を叩きつけるようにして首を締め上げていた。

「う…ぐ…」

「君は…知ってはいけないことを知ったみたいだね」

「何のことだ？」

「とぼけるな…一昨日話したじゃないか。私の手術の事を…」

「私って…やっぱりあんたのことか。別に俺は興味ないんだけどな」

「いや…私には大有りなんだよ。
こんなことが世間に公になれば私の生活は一瞬で崩壊してしまう。
ひひっ…その前に君がいなくなってしまうばいいんだよ。ここは
私の所有地だ。」

深く埋めておけば誰も気が付かない」

「ぎりぎりと締め上げる力が強くなっている。」

俺は必死に両腕を押さえてそれを阻止しようとしていた。

「あんた…やつぱり最低だな」

俺は片足を上げて思い切り医者の体を蹴った。

それと同時に医者は手を離れた。

「ゴホ…ゴホ…」

俺はむせながら医者の方を見た。するとあるつことか手にはナイフを握っていた。

ポケットに忍ばせていたものを出したのだろう。

「車が汚れるから嫌なんだがね…これを使わせてもらつよ」

「まずい。こんな狭いところでナイフを振り回されたら逃げ場がない。」

「大丈夫、痛くはしない。一瞬で心臓を貫いてあげるからさ」

人の殺意を身近に肌で感じて分かった。

俺は殺されるといふ恐怖を今、はっきりと感じた。

「くく…君も悲惨だね。生かされて、殺されるんだから…」

それにあの事故…噂では暴走車を君のお父さんが避けようとして起きたものらしい。

きっと金でも握らしてその事実を誰かがもみ消したんじゃないのかな？ははははは…」

俺はもういなくなると思っ、べらべらと軽口を叩いていた。

人の皮を被った悪魔が…

その瞬間に悟った。

世の中は腐っている。腐りきっている。

誰も俺たちを救ってくれない。なら、どうする？

そんなの決まっている。

自分の手で何とかするしかない！

「さあ、終わりにしよう。私の未来のためにも…」

医者は何の悪びれた様子も無くナイフを突き上げた。

きらりと凶器が光り俺を死の世界へ誘う儀式が今正に行われようとした。

23話

俺は自らの心の奥底にある欲望にしたがったのかもしれない。

脳に衝撃を受けた時に目覚めた能力のせいだろうか。

ナイフの切っ先が肉体を貫く前に叫んでいた。

「こいつを殺せ！」

誰に命令したのかは分からなかった。しかし口が勝手に叫んでいるようだった。

言葉が力となり、力は目に見える形で発動した。

突風が車内に入り込んだかと思うと、一斉に医者 の 体 に 襲 い 掛 か った。

何だ…これは。

今まで見たことのない光景に俺は、あっけに取られた。

よくよくその風を見ると、それは靈魂の塊だった。

青白い無数の顔の塊が奇妙な雄たけびを上げながら医者 の 体 の 中 に 吸 い 込 ま れ る よ う に 入 っ て い っ た 。

そこにはあの老人の顔もあった。

にやりと笑ってこつちを見ながら口の中へ入っていった。

「ぐ…が…あ…」

全てを飲み込んだ医者は苦しんだ。

ばたばたと手足を動かし、目は白目をむき、口からは泡を吹き出していた。

首を押さえながらのた打ち回り、肉体の異常を分かりやすく表している。

この状況はまずいと判断して、俺は車から飛び出した。

何が起ころんだ？

俺自身もその先の想像ができなかった。

ふらふらとその場に腰を下ろすと、次の瞬間にぼんっとか何か爆ぜる音が山林に響き渡った。

そして騒がしかった車の中は急に静かになった。

じくじく…

俺の鼓動が高鳴る。

ここは確認するべきか、しないべきか…その選択が目の前にある。

そんなの決まってる。

確認するさ。自分がやったことなんだからな。

俺はゆっくりと立ち上がると車に近づいた。

一步…二歩…

そうさ、分かっている。あれはもう、車という棺だ。

そして車の中を見た。

「ぐ…」

ある程度の覚悟はしていたが、ここまでとは…

飛び散った肉片と、所々原型をとどめている内臓、そして顔が俺の視界に飛び込んだ。

しかし自然と嫌な感じはしなかった。

寧ろ喜びに変わっていたのかもしれない。

数秒でその光景にも慣れた。

人間の中身ってこんなもんか…テレビや映画で見たのとあんまり変わらないんだな。

まじまじと観察し、冷静になっていく。

こんなクソみたいな人間死んで当然だよな。

く…く…く…く…

何故か笑いが込み上げてくる。

「ははははは…」

声に出して大笑いした。

すると耳元で声が聞こえた。

「なかなか良い味だ…」

「うん…どす黒い感情が生命力の強さを感じさせたな」

振り向くとそこには三人の霊体が立っていた。

「お前らは…」

俺は普通の人に話しかけるみたいに話した。

「気付いているのだろうか？我々を呼び出したのだから…」

「そつだ。お前と我々の利害関係は一致しているんだ」

「殺しが望みか？」

「それとも一瞬で死ねない地獄が望みか？」

いきなり何のことを言っているのか分からなかった。

「何を？」

「分かっているはずだ…お前の家族を不幸に追いやった輩に仕返しをしたいのだろうか？」

「この一ヶ月間悩んでいた」

「どうやったら生き残った自分が生きる意味が持てるのか」

「そして、その結果に今正にたどり着いたはずだ」

「さあ、言え！」

「それとも俺が話してやるのか…」

俺は黙ってその話を聞いていた。

そして奴らが言おうというべきことも分かっていた。だから自分の声で話した。

「分かっている…俺が望むべき行為は、復讐さ…」

その言葉を聞くなり霊体は喜んだ。

「期待通りの主だ…」

「そうだ。我々が従うべきに相應しい」

次々と意味不明の言葉を投げかけた。

俺は頭の中を整理したかった。だから素直に聞いた。

「すまないが、お前らは何だ？分かりやすく説明してくれないか？」

「いいだろう…なら教えてやる」

「世界の数多に浮遊する、救えない魂の形が我々だ…」

それは死後の世界に到達できない逸れた靈魂で目的すら失いかけている」

「我々は…居場所を失ったのだよ。」

生きる者と死んだ者の狭間に存在し、自らの価値も見出せていない…」

「だからこそ、目的を与えてくれる主を求めていた…何百年と…そしてお前にめぐり合えた」

「お前の言葉は魂そのもの…我々を突き動かす力そのものなのだ。単体では人にも触れることもできない我々だが、集まれば肉体にも触れられる」

「お前が殺せと命じればあの程度の人間ならすぐに殺せる…憎悪と悲痛の叫びの塊は我々一つ一つが行えないことを可能にするのだ」

「お前らは何を望んで俺に従うんだ？」

俺みたいになちなけなガキに、ただ付いてくるようには見えない」

「お前にはもう与えてもらっている…十分な褒美をな。」

お前の言葉が我々を形作り、肉体や物に直接触れて壊す…それが何よりの褒美だ」

「生命のエネルギーは我々の糧になるのだよ。その数が多ければ多いほど…」

そうか…憑いて殺すってことか。

「なるほど…お前らの願いは死者の世界に帰ることではないようだな。

しかし未だに理解できない…俺の話す言葉にはそれだけの影響があるのか？」

「ああ…我々死者の魂にとってはな。神にすら等しいような存在だ」

「お前の言葉無しでは我々も動けない。活動源だからな。だからこそ主なのだ」

霊体の話す言葉に嘘はないとはつきり思った。

そして震えた。

自分とはんでもない力を手に入れてしまったのだと。

「ははは…そうか…お前らが従ってくれるというのなら俺も自分の欲望に素直になろう」

霊体たちはおれの喜ぶ姿を見て、一層期待を寄せていた。

「それでは俺の言葉で命じる。俺の家族を死に追いやった奴らがい

るはずだ。必ず突き止める」

そこには弱い自分などなかった。

俺の生きる意味を見出したのなら、恥じる必要は無い。

堂々と自分の道を貫く…例え何人死のうと。

「それは、そのまま我々が殺してもいいってことか？」

「いや…俺が捌きを下してやるさ。だから、殺すな…」

「分かった。それに従おう」

「異論はない…」

「楽しくなりそうだ」

「その前にお前達の名前だ…」

「名前？それは意味があるのか？」

「ああ…これから長い付き合いだ。それなら名前で呼んだほうがいいんじゃないか？」

「ふむ…それも一理ある。ならお前にまかせよう。好きな名前を付けるがいい」

俺は名付け親になることになったが、しばらく考えるとふと頭に浮かんだ名前があった。

「それなら…お前がオシリス、そしてお前がセケル、最後にお前がアヌビスだ…」

次々と指を差して、名前を呼んだ。

ひよろ長い奴がオシリス、大きな体の奴がセケル、そして安定した体格の持ち主をアヌビスとした。

「何故その名を？」

「エジプトの神話に出てくる名高い死神たちの名前だ…今のお前達には相応しいだろ？」

「死神…それはいいや。俺たちが冥界の神になったということか」

「ならお前は神を従える神以上の存在ということか」

「御託はいい。時間が勿体ないから目的に向かって動いてくれ」

俺のつけた名を気に入ったらしく、三人はご機嫌のまま姿を消した。

それから俺は一人、山林の中で立って考えていた。

これでいいんだ…

この世界に神がないのなら、俺が代行者になるだけだ。

世の中は腐っている。

俺が…あいつらを裁くさ。

それは正義ではない。分かってる、悪だ。なら俺は必要悪だ。

自分を正当化させるように自問自答を繰り返し、自らの欲望を高めていった。

ふふ…元々俺はこういう人間だったのかもな。

24話

四ヶ月振りの自宅に帰ると、そこは懐かしい匂いがした。

思い出の詰まった小さな籠の中。

俺はいろんなことを思い出した。

父親の事…母親の事…そして妹の事。

それを思い出す度に気持ち締め付けられる。

どうしてこんなこと…

その思いだけが強く残っている。

思わず胸をぎゅっと握り締めた。

カーテンは閉じられたままで、薄暗い室内の中心にあるテーブルに腰を下ろした。

「ふー…」

一息ついてから、俺はパソコンの前に座った。

事件がどのように記されているのだろうか。

俺はパソコンの電源を入れると、ネットを開いた。

そしてマウスを動かしながら事故の全容を見た。

『高速道路でまさかの事故。』

十二月二十三日、高速道路を走行中の車が橋から転落。

三名死亡、一人重体。

長い一本道で見通しも良い場所で起こった事故は、ハンドル操作を誤った事故と処理された。

目撃者は数名おり、全員が自ら引き起こした事故と証言。事件性は無いと見られている。』

たった数行の文章だけで片付けられている。

こんなもんだ。

俺はパソコンを切ると、荷物をまとめることにした。

ここを出よう…

そう思ったからだ。

ここには思い出にいつまでも浸って何も出来やしない。

それならここを出るべきだ。野宿でも何でもしてやるぞ。

俺は以前のような普通の人間じゃない。強くなったんだ。

どんな場所でも生きていける。

それよりも学校はどうする？

今となつてはあんなところ行く必要もない。

そう思っていると、セケルがぬつと壁から姿を現した。

「よお…」

「よおじゃないだろ。何の用だ？もう見つけたのか？」

「おいおい…それは無理な話だろ。まだ、半日と経っていない。俺たちにも無理なこともある…」

「それを承知で命令したんだがな」

「そうかりかりするな。一つだけ朗報がある。

あの事件には未成年が絡んでいるらしい。中には高校生もいた…お前と同じようなな」

「それで？」

「お前もただ俺たちに命じて動かしているだけではつまらないだろう？」

「なら、お前も自ら糸口を探してはどうか？」

「そうしてこそ、復讐のしがいってものがあるものだ。過程と結果を結びつけるためにもな…」

「くく…霊体に説教されるとはな。まあ、いいさ…それなら俺も調べてみるさ。

「それなら情報をくれ…未成年の特徴をな」

「ああ…分かった。数日掛かるとは思うが待ってる」

そう言つとまた、すつといなくなった。

そして俺は高校を辞める訳にはいかなかった。

明日から普通の高校生として通つとするか。

それから今に至る…

あれから数日が経っているが、進展はない。

俺も用がなければあいつらを呼ぶ気もないので、何も変わらない
日常が繰り返されていた。

学校の中にも霊はいた。

自縛霊という奴か…自殺した奴らだな。

生徒に混ざつてあちこちに見える。

首吊り、飛び降り…様々だな。

「雁亜くん…」

俺を呼び止める声があった。

こいつは俺と同じクラスの女子、相田花音。

小学校からの付き合いでよく一緒に帰ったりしたことがあった。

「何？」

「あのさ…家庭科でクッキー作ったんだけど。どうかな？」

目の前に綺麗に作られ、装飾されたクッキーが広げられた。

俺はそっけない態度を取った。

「ん…悪い…別にいいや」

「え？あの…」

気まずそうにしている花音を見ることもなく、振り返って教室に戻った。

クラスの中は相変わらずざわついている。

何が楽しいんだ？

今の俺の心を満たしてくれるものはここには存在しない。

まるで他人事のように見ているだけだ。

そして授業が開始された。

放課後、玄関に一人でいると、花音が待っていた。

「雁亜くん…その…ちょっといいかな？」

相変わらず、もじもじしてやがる。

こいつは昔から気が弱い。そして俺を頼っていた。

四ヶ月前の俺なら笑って対応もできただろう。

しかし今の俺は違う…一人に徹したい。

「何だ？俺…忙しいんだけど」

「う…あ…その…」

本当にはつきりしないな。こいつは…

俺は無視して進むことにした。

三月の風はまだ冷たい。

俺はポケットに手を突っ込んで足早にその場を立ち去った。

25話

三人の霊体は少しずつではあったが情報を増やしていた。

流石だ…人間にできないことをやってのけている。

まず分かったことは、事故に係わる人間はこの市内に存在するということ。

そして暴走車は二台いた。

ここからは簡単な推測で理解できる。つまり、二台でレースをしていたのだ。

高速道路をサーキット場に見立て、自分らがレーサーとになって

未成年のやりそうなことだ…

この事故に係わった人間は全部で六人。

それぞれの車に数人乗っていたということだ。

こいつらは同じ高校からの先輩後輩関係で繋がっていた。

学校は俺の高校から二つ駅で離れた場所にある工業高校。

ここまで分かれば後は簡単だ。

「俺が分かったのはここまでだが、もう少し時間くれればこいつら

の全員の住んでる場所まで分かるはずだ…」

オシリスが自信を持って話した。

「どうする全部俺たちがやるか？」

セケルはにやにやしていた。

「いや…いい。お前が話した通り、過程を知ってこそその結果だ。それなら後は俺も動くさ」

「その意気だ」

霊体に励まされても何も嬉しくなかった。

それでも前に進めるのは嬉しい。

俺はうずうずしているんだ。

こいつらを皆殺しにできる…

どんな殺し方をしてやろうか…

そんな妄想ばかりがぐるぐる頭の中を回っていた。

「アヌビスはどうしたんだ？」

この場にはいないもう一人の霊体について聞いた。

「何でも剣を探しているんだと…お前に持ってもらいたい剣がある

って言ってた」

「剣だと？そんなものどうするんだ？」

「さあな…俺も詳しく知らないからな。後のお楽しみにしとけ」

しょうがない奴だ…

俺はそのまま今日は寢床につくことにした。

「ねえ…雁亜くん…話をしようよ」

花音はしつこく俺に付きまとっていた。

もうかれこれ一週間も前からだ。

俺は無視しているのに、必死に食らいついてくる。

何だってんだ。

俺はいい加減嫌気がさしてきた。

だからしょうがない。話を聞くことにするか。

そう思い、放課後に会う約束をした。

夕暮れの街中を二人で歩いていた。

まるで死神と歩く美少女だ。

花音は正直かわいい。それに手先が器用で何でもできる。

お菓子を作ってくれたり、料理、裁縫、何でもできた。

しかし短所もある。それは心の弱さだ。

自分の気持ちをはっきりとぶつけられない。

だから相手が強い口調で話すと引いてしまっただ。

きつと誰にも嫌われたくないんだ。

かわいそうな奴…

俺はそう思いながらも懐かしく肩を並べて歩いていた。

いつ以来だろう…

「久しぶりだね。一緒に歩くの…その…ごめんね。何度も話しかけて」

「別に…」

「う…」

そのまま雰囲気も盛り上がらないまま、公園の中に入っていった。

適当なベンチを見つけて俺たちは座った。

「それで？」

俺は本題に入った。

早くこの場を去りたかった。

「え…と…あのね。この前、家のお母さんが話してたんだけど、今度家でご飯食べないかなって…」

「何で？」

「だって…一人でいろいろ大変なんじゃない？あんなこともあったし…」

本来ならありがたく受け止めるべき言葉だ。しかし俺は全く別の言葉を発していた。

「余計なお世話だ！俺は一人でも十分やってる…」

声を張り上げて言った。

それに対して花音はただ怯えるだけだった。

俺はそのまま立ち上がった。

「悪い…俺…一人になりたいんだ…もう、構わないでくれ」

ベソをかいている花音を背に公園から出た。

何故かイラつく。

あいつを見ていると、話すとイラつく。

どうしてだ…

知らず知らずの内に早足になっていた。

「おい…」

耳元で声がした。

それはセケルの声だった。

「あの女…邪魔なら殺すか？」

俺と花音の一部始終を見ていたから言えることだった。

「盗み見か？趣味が悪いな」

苛立ちをそのままぶつけた。

「お前がそんなに苛立つから言ってるんだ。邪魔なんだろう？だったらさくつと俺らに命じろよ」

「うるせえ！」

俺は人の目を気にせず大声で叫んだ。

そのままセケルを無視するように廃墟の埒へと急いだ。

26話

翌日も花音は俺を玄関で待っていた。

どうしてそこまでする…

俺は花音の気持ちが分からなかった。

そして俺は彼女を避けるように窓から外に出た。

今日は少しでも集まった情報を頼りに、あの高校に行こうと思っ
ていた。

だからこんなところで足止めを食っているわけにはいかないんだ。

電車に乗り二駅先で降りると、そこはあまり来たことの無い場所
だった。

薄汚れた駅前には随分と柄の悪い高校生の姿ばかりが見られた。

髪を染め、ピアスをして、中には制服のまま煙草を吸っている奴
らが目に付いた。

何も言えない大人たちは端を歩き、あのアホ共は我が物顔で悪さ
をアピールしていた。

そして目的の工業高校は駅前に近くにあった。

やはりあの悪そうな奴らはここの高校生か。

俺はどうするか考えことにした。

すると、見慣れない制服の奴がうろついているのが気になったのか、その学生に声を掛けられた。

「おい…」

三人組みの連中が俺を囲むように話しかけた。

「何？」

「何じゃねえだろ？こつちが聞きたいんだよ」

「お前ここの生徒じゃないだろ。何の用だ？」

「いや…別に…ただここの前を通っただけだ」

「ふーん。成城高校ね…勉強ばかりのキモイ連中か…」

「俺らの財布みたいな奴らだよな。こないだの奴らも殴られてすぐに財布出したよな」

「ああ…こいつにも財布になってもらうか？」

「いいね…育ちがいいから、きっと大金持っただろうな」

俺はその話を聞きながら少し震えていた。

「おや？震えてるんじゃないの？」

「はは！弱虫だねーぼくー大丈夫ですかー」

「今なら、ここで裸になれば勘弁してあげるよー」

好きなように俺を囲んで囃したてている。

俺が震えている？

そつだな…こんな機会は初めてだからな。

「まあまあ…ここじゃ何だから。あっちに行こうねー」

まるで赤ん坊扱いだ。

一人が俺の肩に手を回して人気のないところまで誘導した。

連れてこられたのは学校の裏の狭い袋小路だった。

そしてどんつと壁に突き飛ばされた。

「おら！さつさと出せよ。もってんだろ？」

早速金を要求してきた。

「今から金を出すのが一秒遅れるごとに一発殴ってやる…タイムリミットは三十秒。」

もしもタイムリミットを過ぎたら三十発殴って金を取る。さあ、何発で済むかなー」

完全に楽しんでいるな…

「はは！それじゃあ数えるか？」

「よーいスタート」

「いち…にーい…」

愉快に数を数える奴。

笑いながら余裕で煙草をふかして見ている奴。

俺を殴る準備をして、拳を握っている奴。

こいつらみんな痛みを感じたことがないんだな。

味わったことのない痛みって奴を…

笑わせてくれる…

カウントは十を過ぎていた。それでも俺は何もしなかった。

ただ壁を背に薄気味悪く立っていた。

「ほらほら…十五すぎたぞ？こいつの拳はイテエぞー」

「歯が全部折れた奴もいるからな。ついでに鼻もな…」

「にじゅういちー…にじゅうにー」

未だにカウントが続く。

そして最後の三十の数字が叫ばれると、男は待ってましたとばかりに近づいてきた。

「さつき膝…震えてるって言ったよな」

「ああ…テメエが弱虫だからな。ビビッてんだろ？」

「見当違いだ…」

「は？」

「嬉しかったんだよ。悪い奴に捌きを下せるのがさ」

俺はくくくと笑った。

「てめえ、気持ち悪いんだよ！」

すると、男は腹を立てて俺の胸倉を掴んで拳を顔面に叩き込んだ。

「ん…」

しかし顔面には到達していなかった。

何故軌道がずれた？こんな接近してははずすのは、おかしいと思えば自らの拳の先を見た。

拳は有り得ない方向にぐにやりと曲がっていた。いや、腕からと
いった方がいいだろう。

根元から二回転ぐらいしていた。

それは雑巾をしぼったような状態に等しい。

理解不能。そして激痛はその直後にやってきた。

「ぎいやああああああああ」

女のような甲高い声を上げて、男はその場に崩れた。

「う…腕があ…」

それを見た残りの二人は今までのようなへらへらした表情から一変して、闘志をむき出しにした。

「てめえ！何をしやがった」

一人が、ただ無謀に突っ込んできた。

そこで俺は男の足に狙いを定め一言呟いた。

「折れ！」

話し終わると同時に骨の折れる音が耳の奥に張り付く。

ゴキン…

そして二人目の絶叫が響き渡った。

「ひいああああああ」

二人目が泣き叫びのた打ち回る姿を見て、三人目は動きを止めた。

本能で感じたのだろう。

このままではまずいと…

そんな痛がる二人を見て俺は話した。

「加減したつもりだが…この様子だと、足も手も使い者にならないかもな…」

ま、もう一つ残っているから何とかなるだろ?」

立場が逆転したのだ。

俺は三人を完全に見下した。

そして無傷の三人目は震えていた。

俺は笑みを浮かべながらゆっくりと近づいた。

「あれあれ?どうしたんだ、そんなに震えて。君は弱虫なのかなー」

俺は茶化した。なぜなら素直に今の状況を楽しんでいるからだ。

男は何も言えなかった。

がたがたと震える体を抑えることで精一杯だったからだ。

「お前には何もしない…しかし今から俺が聞くことに素直に答えたらだ。」

嘘をついたらすぐにばれるからそのつもりでな…」

「う…」

怯えながら俺の方を見た。

「こここの高校生で四ヶ月ぐらい前に、高速道路でレースをやっていた奴に心当たりはないか？

六人いるはずだが…」

男は助かるために必死になって答えた。

「し…知ってる。」

運転していたのはここを卒業した佐倉って奴と、大橋…

二人とも街中の怪しいバーで働いてるって聞いたことがある」

「なら、他の奴らは？」

「それは…俺のクラスの木戸、佐々木、穴戸だ…」

「後一人は？」

「お…俺だ」

何ということだ。

いきなり本命を引き当てるとは俺も運がいい。

「何であれをやるうと思っただんだ？」

「俺は良く知らないんだ。」

あいつらとはあんまり仲良くないし、面白いことやるから来いって言われて付いていったから……」

「そこに罪悪感があった？」

「え？」

「いや…いや…」

俺は一息つくと、視線を男から外した。

背後からは未だに、痛みに苦しむうめき声が聞こえていた。

「なあ、正直に話したからいいだろ？」

「ああ…」

俺の殺気から解放された男は肩を下ろして安堵の表情を見せた。

「何でそんなことを聞くんだ？」

「うん…」

今、俺の心の何かに触れた。

そして俺は無意識に叫んでいた。

「喰らえ！全ての形を残さずな」

「え？」

男が残した言葉はそれだけだった。

俺の脇から現れた無数の亡者は男の体を貪り喰らった。

暗闇に次々と集まる狂気の集団。

まるで餌に群がる魚だな…

男の姿はなくなり、そこには血の海だけが残っていた。

「俺は約束を平気で破るんだ…覚えといた方がいい」

27話

時刻は十時。

俺は自らの意思で行ったことを思い出していた。

するとオシリスが話しかけてきた。

「今日のは、なかなか食い応えがあつたぞ」

「ああ…ガキの割にはなかなか強い魂だったな」

「それで…これからどうするんだ？」

「一人ずつ殺していくさ…」

「お前も力の使い方に大分慣れてきたようだな。アヌビスが喜んで
いた」

「それで、アヌビスはどうしたんだ？」

するとアヌビスが待つてましたかとはかりに現れた。

「遅くなってすまない」

「何をしていた？」

俺はそのことが聞きたかった。

「刀だ…主が持つに相応しい刀を持つてきた」

そう言っで一振りの刀を差し出した。

「これは何だ？」

「イザナミの刀だ…」

「イザナミ？あの黄泉の国を作った神という奴か？」

「ああ…これは魂そのものを抜き取ることができる」

「どうしてそんなものを俺に？」

「今後必要となるからだ…それはいずれ分かる…」

意味深なことを話した。

まあ、くれるというならもらっけ。

「おい…あの女また来てるぞ？」

俺はセケルが指差す方向を見た。

すると窓から廃墟の外にはあの花音の姿が見えた。

「あいつ…」

どこまでお人よしなんだ。

俺にいくら話しかけても無駄だというのに。

もう昔の俺ではないし、今日も自らの意思で人殺しをした。

それを悪いなんてこれっぽちも思っていないんだ。

なのに…何故、あいつを見てるとこんなにイラつくんだ？

感情を抑えられずに、拳を窓枠に叩きつけていた。

「どうした？」

「何でもない…」

そのまま三人を無視して俺は寝た。

有力な情報をもって俺はどうしようかと思案していた。

ただ真正面から行っても、無関係な奴まで殺しかねない。

昨日みたいなこともある…

だとしたら一人のところを狙って確実に殺すか。

そうと決まったら…まずは雑魚からだ。

復讐の仕方にも段階がある。

あの事故と係わる者が次々と消えていけば、嫌でも次は自分の番だと感じる。

その時間が長ければ、長いほど焦る。

精神的にも追い詰めてやるさ…

だから主犯格は最後に取っておく。

俺はいよいよ自分の計画が動き出すことを喜びながら学校へと歩いていった。

昨日は花音がしつこく付きまとっていたから、そのことを考えすぎてあまり眠れなかった。

学校の中に入ると、早速昨日の事件が噂になっていた。

「おい…聞いたか？隣町の工業高校の生徒の話…」

「ああ…行方不明者一名と病院送りが二名だつてな。」

学校裏にはおびただしい程の血が地面に広がっていたって話だぜ」

「それって殺されたんじゃない？」

「ああ、その可能性は大きい…でもさ、あいつらいつもでかい態度取ってるから、自業自得じゃないの？」

「それも言ってる。鬼畜系高校生なんて、自ら自慢するぐらいの悪だからな」

「怨みも多いはずだ」

みんな悲しんだりするよりも、ざまあみろといった感じだった。

それもそうだ。

散々好き勝手やってきた連中だ。

トラブルに巻き込まれるのは日常茶飯事だから、そんなに不思議ではないのかもしれない。

しかしこれから犠牲者は増えるのだ。

俺という殺戮者がその舞台の主人公なのだからな。

同じクラスの生徒が話すことに聞き耳を立てながら俺は一人優越感に浸っていた。

そしてクラスのホームルームが始まると、昨日の事件の事をこと細かく話し、

当分の間部活は休んで、全員登校を命じられた。

ざわつくクラスの連中とは対照的に俺は一人静かに笑っていた。

そして一週間後には同じ工業高校の人間が三人行方不明になっていた。

それはもちろん俺がやったことだ。

28話

学校は更なる警戒態勢を取るようになった。

未だに見つかからない生徒達を探す警察関係者の数もどんどん増えていった。

俺の気持ちの高揚はどんどん高まっていた。

いよいよメインディッシュに向かおうとしていたからだ。

どんな殺し方をしてやろうか。

どんな気持ちで怯えているのだろうか。

そのことばかりで頭がいっぱいになっていた。

くくく…後、数日後には俺の満たされない心も至福の気持ちで満たされるはずだ。

それだけを信じ、殺戮を繰り返していた。

それだけ俺の復讐は着々と進んでいたのだが、一つだけ気になることがあった。

それは、最後の奴を殺す時に誰かに見られた気がした。

一瞬だったが、人の気配を後ろで感じていたのだ。

まさか、誰かに見られたのか？

そんなことはない。

俺は人気の無い場所で、音も無く殺したのだから…

気にしすぎだと思いつつながら俺は目の前の刀に目をやった。

そうだ、アヌビスにもらった刀だ。

この刀は全く役に立つことなく、無造作に椅子の上に置かれていた。

「おい…これって役に立つのか？」

誰もいない部屋の中で聞いた。

すると、ぬっと天井からアヌビスが顔を出した。

「役に立つ…今はその時期ではないだけだ。お前の欲望をきつと満たしてくれるはずだ」

これのどこが役に立つと言うのか分からなかった。

魂を抜くだけなら、お前らがやればいいだろう。そう思ったりもした。

しかし嘘を付くような奴らでもないの、素直に信じることにした。

「さて…いよいよだな」

セケルが壁から姿を現した。

「ああ…俺がこいつらを殺していることは誰も知らない…後は首謀者だけだ」

「首謀者？そいつらにその言葉は違うんじゃないか？」

「そうそう…あいつらはただの哀れな加害者さ…」

「哀れな加害者だ？どうして？」

「そもそも、この事故自体を捻じ曲げている奴がいるのはお前も知ってるだろ？」

「ああ…」

「首謀者という言葉を使うなら、寧ろそいつらの事じゃないのか？」

言葉尻を取っているような形だが、その言葉は間違いではなかった。

「確かに…金を握らせたものが本物の首謀者かもしれないな…しかしきっかけを作ったのは奴らだ。

それはきつちりと裁くさ」

「それで…首謀者は見逃すのかい？」

オシリスが俺の気持ちを知っててわざと聞いた。

いや…俺をあえて誘導しているのだろうか？

まあ、何でもいい。俺はこの事故に係わった者、全てを許す気な
どない。

「分かっている…そいつらも殺すさ」

その言葉を聞いて安心したかのように俺の事を褒め称えた。

「それでこそ、お前も真の結末を迎えられるってものだ」

しかし結末のことには俺も疑問があった。

「そこには何があるんだ？」

それは分からないものだった。

俺も、彼らも…

そして諭すようにセケルは話した。

「それはお前にしか味わえないものだ。お前が考え、感じ、結末を
決めればいいさ。

俺らは共感することができない。まさか…今更後悔はないよな？」

「ああ…それだけはない。例え何人もの屍の上を歩もうが俺の決意
は揺るがない。

罪悪感なんてものは昔に捨てたさ…」

「なら、今夜はどうする？」

「もちろん、金を掴ませた主犯格の親を殺すさ…」

「それでこそ、主犯格の奴らの恐怖が増すつてものだ」

「いいね」。人の恐怖…それは俺たちの好む味だ」

そして夜に廃墟を出ようとすると、花音がそこにいた。

ここまで俺の事を追いかける珍しい女には頭が下がる思いだった。

だから花音を見る目も冷たかった。

「何だ？こんな時間に出歩いていて親が心配しないのか？」

すると、花音は苦しそうに訴えかけた。

「お願い…雁亜くん…何をしようとしているの？」

「あ？」

「以前の雁亜くんと全然違うよ…ねえ、どうしちゃったの？」

あんなに優しくなかったじゃない。ねえ…どこであなたを失くしたの

よ

何故、俺が悪事を働いていることを嫌悪するように話す？

あの時感じた誰かの視線を思い出す。

そうか…俺は殺害の現場をこいつに見られていたのか…

花音は泣いていた。

ぼろぼろと涙を流して必死に俺に話しかけた。

「笑ってよ。ねえ…昔のあなたはもっと笑っていたじゃない。

それなのに。あなたは悲しい表情しか見せないよ。どうしてなの？」

どくん…

何かが胸の中を叩いた気がした。

「お願い…帰ってきて。私のこといくら嫌いになってもいいから…

帰ってきて、前の雁亜くんになってよお！」

弱いはずの花音が声を振り絞って俺に訴えかけた。

「何を…」

帰ってくる？

どくに…

俺が？

その時に懐かしい光景が頭の中を一瞬横切った感じがした。

笑い合う俺と花音。

家族と笑い会っている俺…

クラスメイトと仲良く談笑したり、遊んでる俺…

う…う…

止める…止める…止める止める止める…

「止める！」

俺は叫んでいた。

びっくりと話すことを止める花音。

「頼む…俺にはもう…構わないでくれ」

俺はそのままゆっくりと花音の前を通り過ぎた。

そして…

「俺は…俺は…お前のこと大嫌いだよ」

それだけを告げて、そこから姿を消した。

置き去りになった花音は放心状態でその場に立っていた。

もう二度と俺のことを追いかけはしないだろう。

そう、思いつつ…俺は何故か夜の公園に向かっていった。

29話

「なあ、今夜やるんじゃないのかったのか？」

不満そうにセケルが話した。

俺はブランコに座って黙っていた。

キィ…キィ…と金属のこすれる音だけが、暗闇の中に響き渡った。

「なあ、おい…」

何もは無さに俺に何度も話しかけてきた。

すると、アヌビスが割って入った。

「セケル…主は疲れてるんだ。少し休ませてやれ」

そう言っただけ俺のフォローをしてくれた。

「ああ…今日は無しだ…」

空ろな目で俺はそう呟いた。

それだけで、三人の霊体は理解した。

その場からすつつと姿を消してどこかに行った。

何度もあいつに心を乱される。

どうしたんだ俺は？やるって決めたんじゃないのか？

どんなことでもやるって…

それをあいつごときの存在にかき乱されるのはこの先…俺自身がどうなるか分からない。

そんなことを考えつつ、セケルの言葉がどこかひっかかった。

『あの女…邪魔なら殺すか？』

くっ…

胸が張り裂けそうになった。

俺がそれをして…それこそ帰ってくることはもうできない。

分かっている。

俺は悪だが、そこに意思がある。断固たる決意も、もちろんある。

それが俺そのものを生かしている理由だ。

そして、もしもそれが全て無くなったら時、俺はただの獣に成り下がる…

ただ欲を喰らい尽くす人の皮を被った獣に。

そうなってしまったらあいつらと同じだ。

俺が否定し殺した奴らと…

それだけは絶対に嫌だ。

俺は空を眺めつつ、完全に悪になりきれていない自分を情けなくも思った。

どうしたただ…花音と話をしていると俺が…俺がしてきたことが悪いことに思えてくる。

その夜は何も出来ずにそのまま帰った

それから二日後、俺は次の計画を実行に移すことにした。

俺の心は落ち着きを取り戻していた。

あれから学校には行っていない。そして住んでいた廃墟も場所を変えた。

もう二度と花音と会うこともないだろう。

その方がお互いのためなんだ。

俺も心を乱すことなく、残りの奴らを殺せるだろう。

そして下調べをしておいた街中にある、高層ビルの前に来ていた。

ここは俺の住んでいる街でも五本の指に入る大きなビルだった。中に入っているのはもちろん一流企業ばかりで、その中の一つ、佐倉工業という企業が目的の場所だ。

主犯格の一人、佐倉健人は親が社長を務める佐倉工業の三男だ。親が金を持っているということからやりたい放題だったらしい。高校生の時も金に物を言わせ、先生から生徒の全てを操っていた。しかし親も同じように金を操って、事実をもみ消していた。

息子を救うために…いや、自らの会社の障害を取り除こうって腹だ。

それは自分のためだ。

そんな連中は生きていても、この先同じことを繰り返すだけだ。改心なんて言葉はどこにも見当たらない。

なら…俺が裁こう。

そしてゆっくりとビルの中に入って行った。

そこはまるで別世界で、きらびやかな光景が辺りを包んでいた。

目的の場所は地上二十七階。

エレベーターで一瞬だったが、そこにはまず障害が…

この社員ではないと、何重にもあるセキュリティを突破できない。

しかしそんなことは俺には関係ない。

一人の社員を見つけると霊を使って憑依させ操らせた。

後は彼の後ろをついて歩くだけだった。

難なく、その会社に入ることが出来た。

時刻は八時。

社員のほとんどは退社しているが、俺が得た情報では今日は社長がここにいるらしい。

さて…

俺は怪しまれないように、すれ違う社員を次々に霊つを操って気絶させた。

広い空間に数人の人間が転がっていた

目指すは社長室。

30話

普通の扉ではない、高価な作りの扉の上にはごく丁寧に社長室と書かれていた。

これはなんだ？

力を誇示したいが故の象徴か？

人の皮を被った獣のくせに…

俺はだんだん腹が立ってきた。

そして思い切りドアを蹴飛ばすと、そこには何事かといった様子の社長と、

数人のいかにも訳ありの男達がいた。

明らかにその筋の人間だ。

「何だ貴様は！」

社長である佐倉孝義は偉そうに俺を見て怒鳴った。

しかし俺は冷静だった。

以前の俺なら心も多少は乱しただろう。

しかし心を乱す障害がない今、俺は誇りを持って殺せる…

「お前が…あの事故をもみ消したのか？」

素直に聞いてみた。しかし孝義はなんのことか分からないといった様子だった。

「何のことだ…」

そうきたか…

やはりあの事件はその程度のものなのだ。

欲にまみれた汚い人間には、もみ消した事件、事故の数は山のようにある。

俺は笑ってしまった。

「貴様、何がおかしい！そもそも、どうやってここまで入ってきた」

俺の不可解な行動に孝義は取り乱していた。

それをなだめるように、側にいた数人の男が俺に質問した。

「坊主、ここがどこか分かっているのか？」

「お前のようなガキが入れる場所ではないんだぞ？」

この場にいたのは俺を含めて全部で十人だった。

おそらく孝義の仕事の関係者であろう、裏組織の人間が八名いた。

今まで何を話しているかは分からなかったが、まずい話をしていたのだろう。

だから、俺の事を生かしてはおけない存在と判断した。

仕切っている男以外の者がそれぞれ武器を出した。

ナイフ、拳銃。

これまたお決まりな物騒なものを出してきたものだ。

そして孝義の顔は安堵の表情に変わっていた。

自分の危機が回避されると。

これは大きな間違いだ。

お前はこれから味わったことの無い絶望を抱くのだからな。

その言葉が立証されるまで、一分と掛からなかった。

彼らは俺をガキだと思って、四人が武器で威嚇し捕まえようと不要に近づいた。

その瞬間、彼らの体は何の前ぶりも無く大きく弾けた。

そうだ…俺の飼いならす霊たちが、肉体を貪り食ったのだ。

それを見た残りの者は、当然武器を使用することを決断した。

銃を構え俺に狙いを定める。

だが、彼らの武器も霊を操る俺からすれば、玩具同然だ。

手にあつたはずの武器が引き剥がされるかのように、宙を舞っていた。

「え？」

誰一人そのことを理解できなかつた。

そして空手になつた彼らを待っていたのは、貪欲なまでに腹を空かせていた死霊だ。

奴らは全てを喰らい、肉片を高価な絨毯の上にどんどんぶちまけた。

「はははは」

俺は笑いが止まらなかつた。

一方、目の前に広がる光景に味わつたことのない恐怖を全身で表す、孝義とリーダー格の男がそこにいた。

俺はゆっくりと近づいた。

「や…止めてくれ！」

孝義が叫んだ。

「お前の欲しい物なら何でもくれてやる。金か？金が欲しいか？それなら金庫に一億ぐらいは入ってるはずだ。」

お前にそれを全てあげよう…どうだ？悪くない話だろ？」

「俺が欲しいのは別の物だ…」

俺がそう言うと、孝義は助かりたい一心で何が欲しいのか聞いてきた。

「分かった…何でもやる。だから…命だけは助けてくれ！」

「本当に何でもくれるんだな？」

「ああ…私の命以外なら、何でもだ…」

それを聞いて俺ははっきりと答えた。

「なら、俺の家族を返せよ。お前がもみ消した事件の家族だ…」

「な…」

孝義の顔からは大量の汗が流れていた。

「む…無理だ…人の命など」

「お前、何でもくれるって言ったじゃないか。あれは嘘か？」

「そんなことは言っていない…しかし、可能なことと無理なことが…」

「お前の道理なんか聞いてはいない。お前がもみ消した命なんだ。なら責任はとらないとな」

俺はゆっくりと近づき、セケルたちに再び命じた。

「や…止めてくれ！」

怯えて、恐怖に体を支配された哀れな金の亡者。

俺はにやりと笑いながら一言。

「じわじわ殺してやれ…」

そして出口に向きを変えると、そのまま振り返ることなく、その場所から立ち去った。

それと同時に俺の脇を霊の嵐がどんどん部屋の中に流れ込んでいるのが見えた。

後に残されたのは孝義の絶叫のみ。

何をされたかは分からない…

しかし聴いたことも無いような人間の苦しみの声がドア越しに永遠と続いていた。

これで俺の復讐もほぼ完成を向かえることになった。

残りは二人。

車を運転していた奴らだ。

一人は今さっき殺した佐倉孝之の息子の佐倉健人。

もう一人は事故の直接の原因になった奴、大橋誠也だ。

こいつはこのレースそのものを作り上げ、俺たちの乗っていた車に接触しそうになった奴だ。

くそ…どうやって殺してやるのか…

俺はひとまず新しい罫に帰り、次の標的を殺す算段を立てようと考えた。

31話

復讐劇を始めてもう一ヶ月半が経とうとしていた。

学校は辞めてから一週間が経つ。もちろん花音にはここを突き止められていない。

俺は情報を集め、健人と誠也の働いているバーというのがどこにあるのか突き止めた。

もし二人ともいるなら、かえって手間が省ける。

しかし事故関係者が次々に失踪または、死んでいると知らされれば、どこかに隠れているかもしれない。

それならそれでいいさ。

家族の元に帰っているなら、お前らの家族ごと全員殺してやるよ。

俺はお前らに同じことをされたんだからな。

さあ、どづいつ気持ちで彼らは俺に殺されること待っているだろ
うっ？

俺の興味はそこにあつた。

簡単に薬なんて安っぱいもので壊れていないでくれよ…

それが俺の率直な望みだ。

そして俺はそのまま夜の街に繰り出した。

そこは暗い路地だった。

怪しいネオンの光を放ち、まるで違う国のような感覚にさせられる。

異文化を好む日本人が作り上げた擬似の世界がそこにはある。

数件建ち並ぶバーはどれも普通の店のような雰囲気ではない。

歩いている人間もその場の雰囲気に合わせてように刺青やら、ピアスを見えるように付けていて、

まるで力を誇示するかのように振舞っていた。

俺はそんな奴らを見ても何も感じなくなった。

以前ならこんな場所に踏み込もうものなら、足もすくみ、心臓も高鳴り、まともじゃいられなくなるだろう。

それが、力を得たことで…自分に打ち勝てるものがないというだけで、悠然と歩くことができた。

場に相応しくない俺の姿は目立っていた。

こいつらにとっては、俺みたいな存在は暇つぶしの格好の存在だ

った。

以前訪れた高校の生徒と同じだった。

見た目で人を判断し、自らが上だと勝手に思い上がる…

しかし俺はそんな優位の立場を簡単に崩してしまうのだ。

早速、目を付けた馬鹿な男女五人が俺を取り囲んだ。

「さつきからきよきよろしているが、何か探してるのか？」

一人の男が声を掛けた。声を掛けられたからには素直に答えた。

「ああ…佐倉健人と大橋誠也って奴をな」

その人物の名前を聞いてそいつらは驚いた。

「知ってるぜ…あいつらとは付き合いが長いからな」

「ああ…それにやばいことも何度もやってきた」

「お前みたいになちよろい奴とは縁のないことをな」

自慢げに話してきた。

「それで…奴らはどこに？」

「焦るなよ、お前か…健人の仲間に係わっているって噂の高校生は

…」

「高校は辞めたがな…まあ、事実だ。何故そのことを知ってる？」

「お前が奴らのことを調べているのは、とつくに耳に入っている。奴らの高校を尋ねたのも知っている奴らがいたからな」

「そうか…健人たちには俺が動いていることが漏れていたのか。」

「それならここにいる可能性は少ないな。」

「なら…」

「当然、いないな」

「そうか…」

「俺はもうここには用は無いと思った。」

「しかし彼らはまだ俺に用があった。」

「おい…待てよ。お前、あいつらを殺したのか？ここいらでは噂が広まっている…」

「事件にはなっていないはずだが？」

「それは知っている…あくまでただの噂だ。」

「それでな、お前がもしも来たらこう言えって代弁を頼まれた」

「そこまで話すとギャラリーはくすくすと笑い始めた。」

「何だ？」

「埠頭の倉庫にお前の大事なお友達を預かっているそうだが、返して欲しければ、何も持たずにそこに来いだよ…」

「大事な友達だ？」

「ああ…何でも同じ高校の可愛い女の子だそうだが、くくく…あいつら、何もしないで待っていていられるのかな？」

「壊されなきゃいいけど…」

小さかった笑い声が次第に大きくなり辺りを埋め尽くす。

その言葉は俺の四肢の動きを奪い去った。

たった一言でここまで俺の心を揺れ動かす言葉はまずない。

忘れたはずだ…

俺には関係ないことのはずだ。

そう割り切っていたのに、今まで制御できていた自分の気持ちも、上手くコントロールできなかった。

怒りと、焦りと、悲しみがごちゃごちゃになって、嫌なことばかりが頭の中を過ぎる。

何故だ…何故俺の体がこんなに反応する？

32話

「それと…もう一つ」

男は横を向きながら話すと、不意に懐から短い鉄の棒を取り出して、いきなり俺の頭を殴りつけた。

「ぐぐー！」

俺の体は全く反応できていなかった。

先ほどの一言が俺の全ての動きを封じていたのだ。

反応することも出来ずにただ殴られた俺の体は大きく崩れ落ちた。

「ここで殺せるなら、殺しておいても構わないそうだ…報酬はきつちりともらえるらしいからな」

そう言いながら倒れた俺の腹部に数人が思い切り蹴りを叩き込んだ。

「ほらほら、やっちゃえー」

「私らにも分け前、頂戴ね」

見ている女二人は、まるで他人事のように離したてて場を盛り上げていた。

「うっら…」

「お前！気持ち悪いんだよ」

俺の見えるている体の部位をお構いなしに痛めつける。

「あちこち嗅ぎまわっているゴキブリ野郎が！」

攻撃する力には殺意が込められている。

こいつらは本気で俺を殺す気だ。

しかも面白半分には……

俺は怒りに身を任せてしまったのかもしれない。

しかし後悔はない。

ぼそ…と一言呟いた。

すると、散々俺の事を痛めつけていた男達の手と足が音と共にちぎれ飛んだ。

ぶちん

一瞬の沈黙の後には絶叫の嵐が来た。

「ぎぎいやああああああ」

「ひいひいひいひいひい」

痛みに苦しむ馬鹿な男達。

自分達が優位な立場と勘違いしていた輩には当然の報いだ。

俺は頭から血を流しながらゆっくりと立ち上がった。

その様子を見ていた女達は恐怖で、逃げ出そうとしていたが、思うようにいかない様子だった。

俺はそいつらの中のリーダー格の男の髪の毛を引っ張りあげて無理やり引き起こした。

「おい……」

「ひい……」

そいつの右腕は肘から先が無くなり、大量の血を流していた。

「お前らは俺を殺そうとした……それなら殺されても文句は言えないよな」

「え？」

「自分だけ、優位に立って弱いものを殺そうっていうのは虫が良すぎないか？」

見た目は最強の男だが、圧倒的な力の前には丸裸にされていた。

「止めて…止めて…」

懇願の声が聞こえた。

「はぁ？お前、俺がその言葉を口にして止めるのか？」

やっぱり、あいつらの知り合いはみんなクズだ。死んで当然だ…」

「俺たちは…もう、動けない…だから…勘弁して…もう…二度とお前には係わらない」

「くくく…それで、許されると？お前らは何でそうなんだ！」

自分の犯したことが自らに返ることはないと勝手に思い込み、弱いものを嘲り笑う。

それで許してくれだ？」

「本当だ…頼む…もう…二度と…こんなことはしない…」

「哀れだな…力を誇示することで、結果この様なんだから…しかし俺は許さない。

お前らが悪いんだ。自業自得だと思え！」

「頼む…」

最後の懇願も空しく、そこまで話すと、重傷の三人は今までの人間のように靈魂に肉体を食い漁られた。

その光景を見ていた二人の女性は失禁していた。

まあ、無理も無い。

身近な人間の血と肉と内臓が飛び出すビックリショーを目の当たりにしたんだ。

しかしどうしたものか…

俺はゆっくりとそいつらに近づいた。

「ひいいい…たす…助けて…」

やはり言葉にはならないか…まあ、彼女らには肉体的危害を加えるつもりはない。

それなら…

俺は霊魂を使って脳に進入させ、かき乱させた。

「あああああああああ」

女性達は瞳孔を大きく見開きながら、張り裂けんばかりの声を出して絶叫した。

そしてがくと頭を垂らすと、意識を失った。

その姿はお世辞でもきれいとは呼べない。

涙や鼻水、よだれを流したまま、鯉のようにはくばくと口を動かしていた。

それに目は空ろでどこを見ているか分からなかった。

「こんなものか…」

脳内を靈魂にいじらせたので、良くて記憶喪失、悪ければ植物状態かもしれないが、俺には関係ない。

そして俺は何も考えずに埠頭を目指していた。

33話

頭と胸部が痛い。

たぶん…肋骨は数本折れているかもしれない。

頭からは未だに血が流れている。

しかしそれでも急がなくては…

どうしてここまで俺が気持ちを揺れ動かすのか…

その理由を確かめるためにも。

焦る気持ちを必死に抑えながら、一時間後には埠頭についていた。

薄暗い大きな倉庫が三つ並んでいたが、その一つの扉が不自然に開いていた。

あそこか…

見張り役のような男が数人そこにいるのが見て取れた。

俺に今までのような余裕の二文字はなかった。

抑制できない気持ちがそうさせたのかもしれない。

見張り役の数人の男を声を掛けることもなく、一瞬で殺した。

びちゃっ…という音と共にそこには数人の肉片が飛び散る。

その血の海を歩きながら、中に入っていく。

ぎぎぎぎぎぎぎ...

重たい扉を完全に開けると、中は真っ暗だった。

外の光が中に入り込んでいたが、入り口付近しか見えなかった。

そこに彼女はいるのだろうか？

呼吸は荒く動悸が激しい。

走ってきたせいもあったが、いすれ訪れるかもしれない絶望を予期する力が体を蝕んでいたのだろう。

悪いことしか思い浮かばないのだから。

そして目も暗闇に少しずつ慣れてくると、倉庫の中央にゆらゆらと動く影が見えた。

う...

何かが上からぶら下がっている？

俺は何も考えないで、そのぶら下がっている場所に走っていった。

近くに行つてその影の正体を知った瞬間、俺の頭の中は真っ白になつた。

嫌な予感は的中したのだ。

そこには鎖で天井から吊るされていた、花音の姿があった。

その姿はぼろぼろで服は破れていた。

いや…破られたのだろう。

俺は鎖を死霊の力を使って断ち切った。

がくんと落ちる体を必死に受け止めた。

体温はある…死んではない。

気を失っているだけではあったが、この無残な姿を見る限り、相当の陵辱を受けたのだろう。

俺はふるふると震えながら、花音の肩を力強く握り締めた。

「う…あ…」

言葉にならない。

俺はどうしたらいいのか分からなかった。

何で…こいつがこんな目に？

俺のせいか？そうなのか？

いや、そうなんだ…

俺の目指した復讐の結果がこれなんだ。

俺は思い切り地面を叩きつけた。

何度も何度も…

張り裂けそうな気持ちをどうしていいのかわからない。

誰か、教えてくれ！

俺は正しいのか？

叫びたい気持ちを抑えながら、花音の顔をまともに見ることが出来なかった。

すると…奥から人の声がした。

「待っていたぞ…殺人鬼くん」

ふらふらと闇の中から、俺の視界に一人の男が姿を現した。

「お前かぁー…俺の仲間を殺しまわっている奴って…くくくく…」

そいつは視点も定まっておらず、言葉のろれつも上手く回っていない。

明らかに薬をやっているような様子だった。

「俺もさ、得体の知れない恐怖が迫ってくると、何度も悩んださはははは。」

でもさー調べたらお前みたいなガキなんだもん。

ひひひひ…そんなら、俺の方が力は上だろ？なあ、誠也…」

その言葉に釣られて、もう一人の主犯格が出てきた。

「ああ…何でもこの前の事故のことを嗅ぎまわってるって話だぜ」

「事故だあ？そんなのあつたか？」

「あのな…お前の親父がもみ消したやつだよ。あの時に事故が起こつたからな」

「はは！思い出した。」

俺を避け損ねた間抜けな車だ…そうだ、そうだ…確か、橋の上からボーンだっけ？」

「真つ逆さまだったと思うぜ。ま、そんなこといちいち覚えてねえけどな」

俺はただ黙って聞いていた。

しかし真つ黒い海の中に体がどんどん浸かっている感覚が体の中に沸き起こっていた。

「お前があー俺のこと探してるって知ったから、仲間をこんなに集めちゃったよ…」

その声で奥から出るわ出るわ、武装した男達…その数三十人。

手には拳銃、ナイフ、鉄パイプ様々だ。

「金でさ…雇っちゃった…どう？一度にこいつらを殺せるか？」

俺は円の中心にいて、取り囲まれた。

この状態で全員を殺すのは無理だ。

俺が言霊を使って、死霊を呼び出しても、せいぜい数人を殺すことしかできない。

その間にリンチにあえば、俺は死ぬだろう。

初めて、自らが窮地に立たされたことを実感した。

34話

「健人さん…こいつ殺した奴にはボーナスが出るって本当ですか？」

健人の側にいた男が聞いた。

「ああ…こいつに止めを刺した奴には百万やるさ…」

でもさ…ひやはっ…誰が止め刺したか分からないぐらい…ひき肉みたいになつたら、どうするかな？

これって…誰が多く致命傷を与えたってことになるかな…うん…
そうだな」

「判断難しくないですか？」

「そうですねよ…それに、あの女も一緒にセットにしてもらえませんか？」

「このままだと、手柄がもらえない者が多くなる…」

「それもそうだな…ひやははは…ならさ、あの女を潰した奴にもボーナスをやるさ。」

ぼろ雑巾のようにしてやったのに…死ぬことしか許されない哀れな奴だな…」

「もう少し楽しませてくださいよ。顔はいいんだからもつたいない」

「はははははははは」

俺は不幸の連鎖を招いたのか…

いや、違う…

「ただでさえ、ぼろぼろなんだ。手足を打ち抜いて動きをとれなく
しとけよ」

この世界にはやはり神はいないのだ。

そう、あの時にそれを考えたんだ。

「頭は打ちぬくなよ。一瞬で終わってしまっ」

人は本能のままに従ったその時にそれは人ではないんだ。

俺は復讐のために何人も殺したが、その道を踏み外さないように
踏みとどまっていた。

「誰からやる？俺…女の方がいい…」

しかし…俺は…もう、そんな無意味な枷を自分に付けておく理由
などここにはない。

欲のままに…

そっだ…

「お前は、何度も味わったろ？くくく…今度は俺の番だ」

バキン…

何かが壊れた。

俺の心を支えていた壊れやすい何かだ。

ここにいる全員…いや、人間がみんな死んでしまえばいいんだ。

憎悪と怒りで先が見えない。

俺の意識はもうなかった。

そこには自らの欲望に従った一人の哀れな獣がいた。

今まで言霊で制御していた漂う死霊は、俺の体の中に取り込まれるように入ってきた。

どうも黒い感覚が体をどんどん支配する。

自らが霊の集合体になっていく、そんな感じだ。

俺は望んでその形になったのだろうか？

しかし人間を止めてしまったことは確かだった。

自分の体がどんどん黒くなっている。

そして花音をゆっくりと地面に置くと、俺はゆっくり立ち上がった。

それを見た健人はそれが、殺戮開始の合図だと判断した。

「さあ！好きなように暴れる！ひやはは」

人ではなくなつた俺と、人の道を踏み外したもの…その両者にどれほどの差があるのだろうか？

彼らは自らの欲望のままに俺らを殺しに掛かった。

しかし俺は全ての物理的攻撃を弾いた。

銃撃、斬撃、打撃その全てがその理を無に返した。

霊たちの出す、人の思念のオーラが形となり、俺の体を覆いつくしていた。

弾丸は俺の体の手前で止まり、刃物で体を切ることができなかつた。

俺は何もせずにそこに立っていた。

今動けば花音が傷つく…そこまで理解していたかは分からない。

必死に俺を殺そうとする奴ら、俺は無意識のまま、一人ひとりを撃破することにした。

「ははははは！」

不用意に俺の手の届く先に来た男を見つけると、笑いながら拳を顔面に叩き込んだ。

すると、相手の顔は生温かい感触と、べちゃっと言つ音と共に吹き飛んでしまった。

何とも簡単に潰れるんだ？

そこには頭の無い体が、びくんびくん動きながら糸の切れたマリオネットのように倒れた。

しかしその様子を見たからといって相手は怯まなかった。

そこは感心する。

以前の俺なら、こんな人数に一変に襲い掛かれたらそこで、終わりだ。

出鼻で相手の戦意を喪失させられれば、勝機が見えるのだ。

だが、相手はお構いなしに次々に襲いかかった。

それは薬のせいだったのかもしれない。

次々転がる死体を見ても、敵は襲い掛かるのを止めなかった。

それともここで殺さなければ、殺されるとでも思ったのだろうか。

どちらでもいいね…

俺は高笑いをしながら、ぶちんぶちんと肉体を玩具のように解体していった。

その光景は、無邪気に見えるかもしれない。

ただ一点、人を壊していることを除けば…

無造作に散らかる手足、内臓、眼球、脳漿、

その数はどんどん増えている。

匂いは充満し、血の量は増えるばかりだ。

俺の体はどんどん侵されていく。

憎悪と怒りに…体は変色を続けていた。

全身が墨のように真っ黒になったら、俺はどうなるのだろうか？

そして辺りを見渡すと、そこには五人程度しか残っていないかった。

気がつかなかった。

短時間でこんなに壊してしまうとは…

しかし気分は爽快だった。

35話

もつとだ…もつと俺に人を壊させてくれ。

「こんなんじゃ、全然足りない。」

全ての人間を壊さなければ満たされない。

満たされない。満たされない。満たされない。

満たされない。満たされない。満たされない。

満たされない。満たされない。満たされない。

「満たされない、満たされないんだあ！」

俺は心の底から絶叫していた。

恥じることも無く素直に気持ちを口に出した。

五人から四人、四人から三人…

その場にいた人間は次々と姿を消した。

渦中の人物の誠也もその中には含まれていたが、雑魚同然、声を上げることなく俺の餌食になった。

そして最後の一人、俺の最大の獲物である健人が残った時、俺は復讐の事など全く頭になかった。

そこに動くものが存在するという理由だけだった。

「ひ…はは…最高だ…お前、最高だよ…」

健人は過度の薬物を摂取していたせいか、恐怖心を感じることもよ
りも楽しんでいるようだった。

これでは俺の望みは叶わない。

絶望というものを徹底的に味あわせてから殺そうという目的だっ
たのだから。

しかしそんなまともな思考を今の俺には持ち合わせていなかった。

そして今までのように右腕を振り上げ、体を斜めに切り裂こうと
した瞬間、一人の人間が割って入った。

「う…」

理性が残っていたのだろうか？

俺の四肢は一瞬動きを止めた。

しかしそのまま止めることも出来ずに、割って入った人間を切り
裂いた。

「きゃあああああ」

血しぶきを上げながら、倒れるのを何とか踏ん張っていた。

血だらけの少女は俺の目を真っ直ぐに見て、両手を開いて健人の盾となっていた。

「どうして…」

俺にはその言葉が自然と出ていた。

「お願い…帰ってきて…帰ってきて、雁亜くん…こんな雁亜くんじゃない…」

話しながらもごぼごぼと血が吹き出す…

残り数分と持たないだろう。

それなのに、こいつは…何で…ここまで俺の事を…

俺を完全に支配しかけていた、黒い憎悪の侵食はそこで止まった。

「私は…こんなになっちゃったけど…
でも…雁亜くんが…帰ってきてくれれば…それだけでへっちゃらだよ…」

花音は薄っすらと涙を浮かべながら満面の笑みを見せた。

あんなに弱かったのに…

あんなに俺は冷たくしたのに…

「どうして…どうしてだよ…なんで笑ってられる？」

俺の体はどんどん元に戻り、意識もはっきりとしてきた。

「自分から逃げちゃだめだよ…ごめんね。」

最後までうるさく付きまとって…でもね…あなたのことが…ほん
…とう…に…」

ふらりと体が崩れそうになる。

俺はそれを受け止めようとするが、それもままならなかった。

今までのダメージの蓄積で体が悲鳴をあげていたのだ。

足がもつれて、そのまま倒れた。

花音はそのまま体を地面に叩きつけると目を閉じたまま動かなくな
った。

その言葉の先も聞けないままに…

俺は号泣した。

血まみれの自分を洗い流すように泣いていた。

健人はとっくに逃げ去ってしまったが、そんなことも全く気にし
なかつた。

俺はその日に完全悪になりきれなかつた弱い自らの存在を呪った。

あれから三日が経った。

その間、俺はずっと悩んでいた。

自分のしてきたことが正しかったのか。それとも間違っていたのか。

食事は取れなかった。

そのせいもあって、俺の意識は何もしていないのに朦朧としていた。

情けない…俺の望んだ結果がこれなのか？

何度も何度も自己嫌悪に陥り、自らを傷つけた。

それを見かねたアヌビスは遂に口を開いた。

「イザナミの刀を使う時がきたか」

「あの刀か？あれって魂を奪い去る刀じゃないのか？それが何の役に立つ？」

セケルは聞いた。

「あれはな、神酒を呼び起こす儀式に欠かせない刀なのだ…」

「神酒だと？まさか…八岐大蛇を眠らせたというあれか…」

「そうだ…あれは万能の薬であり、黄泉の国から魂を肉体に戻す生命の酒なのだ…」

「それはどこにある？」

「八坂市というところらしい。」

何の因果か知らないが、健人っていう奴もそこにいる凄腕の霊能者を頼ってそこ逃げ込んだらしい」

「なるほど、それなら一石二鳥だな。」

復讐の相手を殺し、蘇らしたい奴を蘇らすことができるのだからな」

「ああ…それにはこの刀を使って、その土地縁の者の魂を集めなくてはならないがな。」

なあ、どうする？」

アヌビスは黙っている俺の方を見た。

「それは…本当の話なのか？」

目には未だに力が入らない。

「ああ…」

「死んだものも蘇るのも…」

「事実だ…嘘はない」

そして俺はようやく生き返った。

「なら…俺が…するべきことは見つかった」

そう思い、虚無の心に火を灯し、意を決したかのように立ち上がった。

目指す場所は太古の神の伝説が幾つも存在したという、八坂市だ。

36話

俺の心はどぶ川のように澱んでいた。

この一ヶ月という短期間に人生の半分以上を費やした体験をした。

絶望、目覚め、そして快感を得て再び絶望を味わった。

俺の心はそれらを一度に許容できるほど、大きくはなかった。

だから壊れかけたことも何度もある…

自分の体はすっかり汚れてしまったのだ。

黒く濁った、腐臭を放つどぶ川のように…

だが、今はそこに一輪の花が咲いているような気がしていた。

それは希望であり、俺という物語の終焉のきっかけとなるものだ。

俺の事を本気で愛してくれた家族。

そしてクラスメイトの女の子…

何度も俺の心に残り続けて、人間であり続けるきっかけを与えてくれた人たち。

そんな人たちのためにも俺はその一輪の花を大切に取っておきたい。

私は自らの行動に迷いはなかった。

そこには私らしさがあつたのだから…

人は所詮一人…無駄と一緒になつても思想が別なら同じ空間にいても、上辺だけの付き合いにしか過ぎない。

だから私は言いたいことも言える、行動も自分の好きなようにやる。

例えそれで周りから非難されようとも…

言いたいことがあるなら、はっきりとさえいい。

そんな強い気持ちを抱き続けているが、それは間違いなのか？

人を想う気持ちを持たなければ、それはただ単に人を傷つけるだけの行動なのか？

分からない…

人とたくさん交わる内に、私というものが分からなくなってきたのかもしれない。

これは迷いなのか…

私の体験したことのない、新たな感覚。

俺の…私の…

信念を最後まで貫き通すことはできるのだろうか？

その日の八坂市は気温が三十度を超えた真夏日となっていた。

何もしなくても勝手に汗だけは流れ出す。

私は公園で制服の胸元をぱたぱたと仰ぎながら一人思索していた。

絵里がこのままずっと学校に来なかつたら、私のせいか…

しかしあのまま何も無かったとしても、あいつは不幸になるだけだ。

男に利用され、簡単に捨てられ…

そっちの方がましだって言いたいのか？

くそっ…分からなくなる。

人の気持ちって奴が…

絵里が学校に来なくなつて一週間が経とうとしていた。

その間にいろんな生徒や先生が家を訪れて説得に行つたらしいが、まるで耳を貸さなかつたらしい。

ただ、私が学校を辞めるのなら行つても構わないと話していたらしい。

これで私は学校の全員に怨まれる対象者となつた。

「思い切つて辞めてやるかな…でも…逃げるみたいで嫌だな…」

ぶつぶつと独り言のように呟いていると、不意に一人の男が目に入った。

「ん…」

何だ？こいつ…

私は周りの空気と溶け込めないような異質の男が気になった。

おそらく高校生であろうその男は、見た目はきゃしゃで、顔も悪くない。

簡単な手荷物と、長い何かを持っていた。

しかしどこか違つ…

それが何かは理解できなかったが、私はその男に魅入ってしまった。

私の視線に気がついたのだろう、その男も私の方を見ると、何かを一人で呟いているようだった。

そしてそのまま何事も無く男は去っていった。

私は寮に帰ってから、亜季と話をした。

今まで亜季の言葉に全く耳も貸さなかったが、今日は素直な気持ちで相談した。

「私さ…その…柄じゃないんだけど、このまま学校辞めようか悩んでいるんだ…」

その言葉を聞くと、亜季は安心した表情を見せた。

「そうか…あなた、前進したんだね」

その言葉が何を意味しているかは分からなかった。しかし亜季は祝福しているような感じだった。

「ちょっと…どっという意味？」

「あなたはね…今まで、人の事を軽んじて見すぎていた。人がね…多くなれば多くなるほど、いろんな人間との繋がりが増えてくるの。」

あなたはその経験が浅かった…だから、絵里のことも扱い方が分

からなかったのよ」

「え？」

「いい…あなたが悩んでいることは悪いことじゃない。
それはあなたが変わってきた証拠なんだから…私はそれが嬉しい
の」

「しかし…私がいなくならなきゃ、絵里は良くならない…なら…私
が学校を辞めるのが得策だろ？」

そう話したが、亜季は首を縦に振ることはなかった。

「それは駄目。逃げたことになる…」

「だって…じゃあ、どうしろって言っただよ」

「あなたが自ら出向いて、謝罪して、それでも許してくれなかった
ら、何度でも話して聞かせるのよ」

「でも…相手が話を聞いてくれないんじゃないのか？」

「そう思う気持ちが駄目なのよ。あなたは最初からこいつはこつだ
からと決め付けている。」

それは違う…その人をまずは認めなさい」

「う…」

凄い迫力で亜季は私に詰め寄っていた。

「格好なんか関係ない。一人の人間をあなたの行動で不幸にしたならそれを償いなさい」

正論のオンパレードだったが、私は今までのように無視はしなかった。

「そっか…」

どこか、心が動いてきた。

「話をもっとしなさい。その人間というものを知るためにも、あなたは真正面からぶつかると」

一方的であつたが、亜季の真剣な言葉は私の気持ちを後押ししていてくれた。

正直私自身もこのまま逃げるのは性分ではない。

それならとことん付き合つた。

こうして気持ちをどんどん切り替えていくことができるようになってきた。

そんな自分の心境の変化には驚きだが、それよりも亜季の私を親のように叱ってくれる様にはもっと驚きだった。

「分かった…それなら、明日、あいつの家に行って話すよ」

「私も付いていったほうがいい？」

亜季はそう言ってくれたが、断った。

「これは私の問題だから……」

そう言っただと亜季も分かっていたらしく、ふふっと笑っていた。

37話

私は絵里の家の前にいた。

そこは大豪邸と呼ぶに相応しく、大きな家の周りを長い外壁が覆い。

その長さは四百メートル近くあった。

壁の外からかろうじて庭の木と家の二階が見えた。

私は早速インターホンを鳴らして名前を告げた。

すると、

「娘はあなたには会いたくないそうです」

の一点張りで断られた。

私はそのまま帰ることしかなかった。

しかしそのまま諦めるもの嫌だったのでしばらくの間粘った。

だが、結果は何度話しても同じだった。

辺りを歩いている人間にも怪しい目で見られたがそんなこと関係なかった。

そしてその日は終わってしまった。

次の日も同じように学校の帰りに立ち寄ってインターホンを鳴らした。

返ってくる言葉は同じだった。

「そこを何とか…お願いです。話だけでもさせてくれませんか？」

私はまたもや食い下がらなかった。

「嫌だと言ってるでしょ！」

そこでぶつんと切られた。

私はそのまましばらく家の前でたたずんでいた。

周囲を歩く人間の目がまた痛い…

翌日も通った。

しかし結果は同じだ…

何を話しても親が取りあってくれない。

まだ…私の気持ち伝わらないのか…

そして私は暗くなるまで二階の窓を見ながら、ずっと立っていた。

一週間が経とうとしていたが、未だに状況が進展することはなかった。

私はそれでも諦めなかった。

何度も何度もインターホン越しに娘さんに謝りたいと話した。

これほどまで人の気持ちに向き合ったことはどない。

それでもここまできたらそうしなければ自分の気持ちがすまなかった。

しかし親が私を家に上げることはなかった。

私は諦めながらまた一人で二階を眺めていると、突然、インターホン越しに聞き覚えのある声がした。

「入っても…いいよ…」

絵里の声だった。

門が自動で開くと、私は初めて絵里の家に招きいれられることになった。

「おじやまします…」

母親に一礼してから、二階へと案内された。

母親は気が気ではない様子で、私の事を憎んだ目で見ていた。

しょうがない…自分の蒔いた種だ。

階段を上って部屋に案内されると、そこは真っ暗だった。

よほど一人で悩んでいたんだろう…

部屋の中はめちゃくちゃだった。

「適当に座って…」

「ああ…」

私はごちゃごちゃした床に適当に腰を下ろした。

「それで…何の用かな？」

絵里の目はとても冷たい目をしていた。私の事を完全に拒絶している。

こんな目は相手にされたことがなかった。

だから少し怖かった。

しかしそこから逃げない。逃げたら終わりだ。

「言い訳はしない。純粹にあなたに謝りたい」

きっぱりとそう言い切ると、私は正座をして綺麗な姿勢を保ったまま、ゆっくりと頭を下げた。

「ごめんなさい」

こんなことは今までしたことがなかった。

元々頭など下げる気がなかったからだ。

しかし今の私は違う…

本当に謝りたい、その一心に体が従ったのだ。

頭を床にこすり付けて、じっとその時間を耐えた。

絵里は何も言わない。それでも構わなかった。

簡単に許されることでもない。

「頭を上げて…」

私はそこで頭を上げた。

絵里の目を真っ直ぐに見た。

しかしそこには彼女の憎悪の炎は消えうせていなかった。

「それで、何になるの？」

冷たい言葉を投げかけられた。

「あなたはそれで満足かもしれない…でもね、私の心は取り返しのつかない所まできたわ。

彼に電話しても無視され…もう、会いたくないとまで言われた…私に謝る前に、彼に謝ってよ！

くう…」

泣きながら叫ぶやせ細った少女の気はなかった。

そこまで私が悩ませたというのか…

「なら…そうするよ。」

あなたが今までのように戻ってくれるなら、私は学校を辞めてもいいし、相手に謝りにいく。

例えそれでも許してくれなくてもいい。だけど…」

「だけど？」

「自分を傷つけるのはもう、止めて」

絵里の左手首を見ると、無数の傷があった。

私はこれ以上ここにいても迷惑になると思い、早々に立ち去った。

夕暮れ時の日差しは日中に比べて、穏やかにはなっているものの、それでも暑かった。

私は絵里の家の前の外壁にもたれかかった。

「人の気持ちって…難しい…」

今までのことを考えながらそう呟いた。

俺がこの町に来てから一週間が経とうとしていた。

見慣れない土地に馴染むには十分すぎる時間ではあったが、未だに土地勘はなかった。

大体の調査は霊体たちがやってくれた。

昔何があって、どんな史実が残っているのか、そしてどんな人間が住んでいるのか。

しかし自分で歩くと、どこがどうなっているのかは分からなかった。

ふらふらと公園に足を運ぶと、そこには変な女子高生が一人でベンチに座っていた。

普通の女子高生なら気にも留めない。

しかしこの女はどこか違う…そう感じさせたのだ。

俺は自然にその場をやり過ぎそうとしたが、そいつは俺のことに気がついたのか、じっと見ていた。

こいつも何か感じたのか？

そう思いながら、すたすたと通り過ぎようとした。

すると、

「あいつ…普通じゃないな…」

耳元でセケルがそう言った。

「何がだ？」

「纏っている気配が違う…人とは違った能力を持っているかもな。お前のように…」

それを聞いても俺は取り乱さなかった。

「ふーん。不可思議なこの土地の者だからかもしれないな」

そのままその女を無視して公園を通り過ぎて行った。

38話

その日の夜。

目的を実現するための話し合いが廃ビルの中で行われた。

「神酒を得るためには重要なことが二つある。

一つは生け贄…もう一つは神酒の元になる神の涙の結晶だ」

「神の涙？」

「ああ…八岐大蛇伝説に基づくものだ。

スサノオノミコトが八岐大蛇を眠らせるために用意した神酒の中には神の涙が入っていた。

それはどんな効力も持ったという話だ…」

「なるほど…それで、それはどこに？」

「八坂神社だそうだ…あそこは代々神酒を守っているらしい。悪用されないようにな。

だからお前に匹敵するぐらいの霊能力者がいてもおかしくはない…」

「それで…佐倉健人はそこを頼ったのか？」

「たぶんな…しかし探す手間は省ける。お前の復讐と願いが一気に叶うというものだ」

その話が本当ならそうだ。

俺はその時点で、二つの目的を達成することになる。

「それで…生け贄はどうする？」

一番気がかりだった質問を霊体たちに浴びせた。

「生け贄か…お前の持つイザナミの刀で三人の魂を抜き取ればいいさ。」

それを今度は神の涙の結晶に突き立てれば、神酒が姿を現す。

しかし以前も話したが、この地に縁のある者でなければならぬ。因果関係がその願いを成就させる鍵になるのだ…だから、目ぼしい所は調べておいた」

「どこだ？」

「そう急かすな…この地に根強い関係を持つ家はそう多くない。

九段家、田代家、大宮家、設楽家、錦戸家、そして八坂家だ…

最後の八坂家は神の涙を守る一族だから、一筋縄ではいかない。

それなら他の一家の者の魂を抜き取った方がリスクも少なく早い…」

「そうだな…」

「しかし、健人がそこに逃げ込んでいたら、いずれはやりあわないといけない…」

三人の霊体は悩みながら話し合っていた。

それなら俺が決めるしかない。

「分かった…八坂家には手を出さずに、残りの家の者の魂をいただきますように。」

「もしも健人がそこに匿われているのなら、その時は全力で戦うさ…それまでに無駄な怪我は避けておきたい…俺は無謀な賭けに出る気はない」

全ての望みを叶えるためには今まで以上の警戒心が必要となる。

それを肝に銘じながら、今後の動きをそれぞれに指示していく。

「少しずつ動いていく…まずは…九段家の者の魂を奪う…九段家の場所を調べる」

「分かった…」

こうして俺の第二の計画は動き始めた。

予定は順調に進んでいた。

九段家の場所を掴んでから、家の者が外に出て一人になるのをじっと待った。

そして家の中から若い女性が出てくるのを見計らって、後をつけた。

数十メートル離れながら、尾行を続けると、女は誰もいない路地

を歩いた。

これはまたとない機会だ。

目撃者を出してしまえば、この先動きづらい。一撃で決めなくては…

自らの手で行う殺人にも似たこの行動は緊張する。

何故殺人ではないかというのと、この刀で心臓を貫かれると魂だけが抜け出すようになっていたからだ。

魂を抜かれた者は生きながら意識の無い状態になる…

つまり入れ物だけの残った肉体がそこに生き続けるということだ。

生きている限り殺人ではない…

おかしな道理だが、そう受け止めた。

この作業は極めて慎重に行わなければならない。

もしも心臓以外の部位を傷つけようものなら、それこそ本物の殺人になってしまふからだ。

刀は心臓の一点のみ傷つけない仕組みになっている…下手すれば重傷を負わせて終わってしまう。

だから失敗はできない。

がら空きの背中から一気に突き刺さなくては…

にじり寄りながら、相手との距離を測った。

十歩といったところか…

俺は意識を集中させ、自らの体に霊を憑依させた。

最近覚えたことだが、俺にはもう一つの能力があった。

自らの体に霊を憑依させ、肉体の能力を上げるといったものだ。

それは、過去の知識、経験を持つ死霊を呼び寄せ、寄生させると
いうものだが、

そのお陰で俺はどの分野の達人にもなれた。

しかしリスクもある。

長時間の憑依は自らの肉体に負荷を与え、細胞を蝕んでいくのだ。

もしもその進行が完全に進むと…俺は人を止めることになる。

それは以前の経験で嫌というほど味わった。

それだけは避けなければ…

そして俺は数多に存在する霊の中から剣の達人を探し出し、自らの
体に憑依させた。

入り終わると、俺の集中力は一気に増した。

すつと体に入り込む感覚には未だに慣れない。

きいいいいん

耳鳴りがした。

目の前に見える女性の背中が広く見え、心臓の一点が大きな穴のように見えた。

刀をすつと抜くと、全身の力を抜いて軽く身構えた。

突き刺すタイミングを計りながら、じつと相手の様子を伺う。

そして機が熟した時に大地を蹴り上げると、体に羽でも生えていくかのように風を切って前進できた。

足音をさせることなく、十メートル以上ある距離を一息で詰める。

相手は振り向くことすらしなかった。

そして地面と平行するように長い刀を一気に突き刺した。

手ごたえはなかった。

するんという感じで刀が背中から胸を貫いた。

「……」

女性は声を上げながら膝を付いて地面に倒れた。

体を見回して見たが、どこにも傷はなかった。

一方、刀には血らしいものは一切ついておらず、青白く光っているだけだった。

神の刀ということだけはあるな…

俺は憑依していた霊を引き剥がし、刀をしまった。

「くっ…」

がくんと体勢を崩してしまった。

やはり…体に霊を憑依させるといふ行為は、想像以上だ…

体の痺れが抜けていないが、時間が無い。

俺は通行者に出会ってはまずいと思い、急いでそこから立ち去った。

初めての行動にしては上出来だ。

それから二日後には同じように大宮家の者を襲い、その魂を奪い去ることが出来た。

39話

「残り一つか…」

オシリスが俺を見た。

「順調に進んでいるようだな」

「ああ…それで、健人の動きはどうなっている？」

「思ったとおりに、八坂神社に逃げ込んだようだ…ここ二日はあそこから出ていない」

「そうか…なら、その場所は最後に取っておくか…なら…」

「最後の一人の魂を奪うとしよう」

そのまま俺は三人を残して一人で最後の魂を奪うために下調べをしようと思いいビルを出て行った。

そこに残った三人の霊体は不適な笑みを浮かべながら会話をしていた。

「くく…もうすぐで我々の願いも叶う」

「ああ…神酒、イザナミの刀、そして言霊を操るあの少年がいればな…」

俺はあいつらが何を企んでいるのかは知らなかった。

その屋敷はとても大きかった。

ねぐらから一番遠い場所を選んでみたが、思った以上の金持ちだ。

今日は屋敷と家の中にいる人間だけでも把握しておこう。

俺は周囲を歩き始めた。

すると、見覚えのある女がそこにいた。

誰だ？

そうだ…公園で会った奴だ。

そいつは外から、じつと外壁の中の家の二階を眺めていた。

誰かを待っているのか？

俺はそのまま立ち止まるのも怪しいので、通行人の振りをして歩いて通り過ぎた。

通り過ぎる時に表札をもう一度確認する。

うん…間違いない。

錦戸家だ。

最後の魂はこの人間にするとしよう。

それ以上の用は無かったので、俺は大人しく帰っていった。

私は遂に不穏な空気を感じ取った。

この八坂市に来てから四ヶ月と少し…

何も無かったかのように思われたこの土地にもこの時が来たか。

いつものように大蛇山から町の様子を眺めていると微かではあったが、何かを感じた。

上手く感じとれない…しかし邪悪なものを感じる…

こういった細かい作業は苦手なのだが、文句も言ってもらえない。

相手が派手に動き回る前にそれを阻止しなくては…

耶甲はあれ以来ここには来なかった。

自分で考えろってことか…

そう受け止め、私は山を下りた。

部屋に戻ると、亜季はいなかった。

何でも実家に訳ありの客人が来たらしく、その対応の手助けをするためにしばらく帰るらしい。

私だけのいる部屋はどこもなく寂しくも感じさせた。

いつもいる存在がない…これだけで、寂しく感じるなんて…どうかしたのか？私。

私は今日も絵里の彼氏に話をしようと思った。彼氏…いや、元彼氏かもしれない。

そんなのはどうでもいい。

やることだけはやっておこう…そうしなければあの子が壊れてしまう。

私はそのまま学校に行った。

「ねえ…冬香さん。どうするつもりなの？」

「そうよ！絵里がこのままじゃ可哀想でしょ。何とかしてよ」

最初は何も言えなかったクラスメイトがまとまって私に話しかけ

た。

一人じゃ何も言えないのかね…

半ば呆れ顔でその話を聞いていた。

「私にこの学校を辞めろってこと？」

簡単な結論を話した。

「…まあ…そういうことになるわ…」

「ええ…」

「そうよ…」

その気持ちも分からないでもなかったが、私は納得がいかなかった。

「それで解決するわけ？」

「え？」

「私が辞めて、それで絵里は元通りになるのかって聞いているの」

「それは…」

「私はあの子の心に大きな傷を与えてしまった。だからそれを治すまで私は辞めない。」

「それが私の責任だから…」

「でも…」

「何か文句でも？」

ぎろりと群集を睨み付けた。

私は殺気立っていたのかもしれないが、女の子達は縮み上がった。

そして虫の子を散らすかのように群集はいなくなった。

「人の事言えるのか？私…」

ちくしょう…

偉そうなこと言ってる自分が恥ずかしい。

私だって最初はこの学校を辞めようって思っていたじゃないか。

それなのに亜季の言葉の受け売りをさも自分の言葉のように話して…

歯がゆい気持ちを抑えることができず、拳を握り続けていた。

40話

放課後、私は絵里の彼氏のいる高校の前にいた。

こんなこと…

私らしくないと思ったが、そんなこと言ってもらえない。

絵里を追い詰めてしまったのは私なのだから。

しばらく待っていると、あの三人組が姿を現した。

笑いながら校門を出て、商店街を目指して歩いていた。

流石に学校の前はまずいと思い、私は後をつけた。

そして人気も少なくなった頃を見計らい、高架下に入った姿を見て、彼らの前に立ち塞がった。

「ちょっと…」

私の姿を見て、三人は驚いた。

「な…何だ？」

「お前…あの時の…」

嫌なことを思い出したのだろう。三人の内二人はびくびくしていた。

しかし一人の男は堂々としたものだった。

「なんだ…お前…学校辞めてないのか？」

私が制服を着ているのを見てそう話した。

薄ら笑いを浮かべているあの男…そう、絵里の彼氏の修也だ。

「あいつもさ…もっと利用できると思ったんだけど、もう無理だよ
ね。」

「どこの誰かさんが邪魔したお陰でさ…」

「おい、修也、これ以上そいつを挑発するなよ！また何されるか分
かったものじゃない」

一人は修也をなだめようとしていたが、修也はお構い無しに話続
けた。

「無理無理…そいつが一方的に悪いことになっているからさ、根回
しは完璧だ」

「そつ…なのか？」

「ああ…だから心配するな。こいつにはもう、俺らを殴ることはで
きない」

腹は立っていた。

本当ならこんな奴らぶちのめしてやりたい。

しかしそれはできない。

「それで、何をしに来た訳？あいつとはもう別れたんだけど…」

こんなこと話したくないが止む終えない、自らの気持ちを殺してお願いした。

「あの時はすまなかった…お願いだ。絵里のことを立ち直らせてくれ…」

こんなこと私が頼む義理じゃないが…あの子は今、殻に閉じこもっている…」

別に復縁しろって訳じゃない。

嘘でもいい…優しい言葉をかけてあげてくれないか…」

くそっ…遂に言ってしまった。

これは不幸の連鎖の始まりかもしれないのに…

「嘘でも？あれれ…」

修也は頭を下げる私を見下していた。

「何か矛盾してないかな？お前はそういうのが嫌で俺らを殴ったんだろ？」

それを覆す行為じゃないのかな？」

「そうかもしれない…」

それなら最後まで嘘を突き通して、優しい頃のお前の言葉で別れてほしいんだ…」

「都合が良すぎだろ？自分の時いた種だ…」

「そうだ…そんなことを頼むぐらいなら、始めから俺らのことを無視していれば良かったんだ…」

くっ…正論だ。

私は何も言えない。

「やなことだ。俺にはもう…終わった存在だ」

願いも空しくあっさりと断られてしまった。

「お願い…あの子…このままでは死んでしまいかもしれない…」

その言葉を聞くと、周りの二人は取り乱した。

「おい…」

「まずくないか？」

しかし修也は態度を変える気はなかった。

「あいつが死のうが関係ない…それよりも、もっと良い交換条件ならある…」

「何を…」

「お前が俺たちに好きなようにされてくれるなら、その条件飲んで

やってもいいってことね…

この前の屈辱はどうあっても返さないと気が済まないからな…女が男を見下すなんてな…」

こいつ…ここまで腐った人間だったのか。

プライドが高く、相手を傷つけることで欲望を満たそうとしている。

「いいんだぜ…あいつがそのままでもな。死んでも、俺にはどうでもいい人間だからな」

私の怒りは頂点にまで達そうとしていたが、そこをぐっと堪えていた。

こいつらが望むのは私の体を傷つけるか、求めるかのどちらかしかなかった。

そんなの許せるはずも無いが、どうしていいか分からなかった。

ここでこいつらを半殺しにしたらまずいし、かといって断っても進展はしない。

くそ…どうする？

思い悩んでいると、誰かが私の前に割って入った気がした。

そしてそいつはいきなり、三人の男を容赦なく叩きのめした。

幸い、人のいない線路の下の暗い道だったので、どこにも目撃者

はいなかった。

殴られた男達は、当然怒った。

以前私にしたようにそのきゃしゃな体の男に殴りかかろうとした。

しかしそれよりも先にそいつらの手足が、ぐにゃんと有り得ない方向に曲がったように見えた。

「ぎゃあああああああ」

絶叫して手足を押さえる男達。

その声がわんわんと反響していた。

私はただその光景を見ていることしかできなかった。

「うるせーな…軽く折っただけなのに。ちぎれなかっただけかもしれませんってんだ」

その男は吐き捨てるように言った。

何をした？

全く分からなかった。

今までいろんな能力を持つ者を見てきたが、そいつが不自然な行動をしたのはどこにも見当たらなかった。

そして男は、倒れて足を押さえている修也の方に近づくと、しゃ

がんで話した。

「おい…あの女の言うとおりにしろ！さもないと、この程度じゃ済ませない…」

「いいか、お前らを誰かが常に見ていると思え！」

「お…お前誰だよ？何で…こいつに肩入れする…」

痛みを堪えながら修也は質問した。

「あ？俺はお前らみたいな人間が大嫌いなんだよ。女を利用するクズがな！」

ぞくり…

その目には殺意を感じた。

私も男達もみんなそう思ったはずだ。

こいつには逆らえない…そんな何かだ。

「一週間以内に必ずやれ！それと、もしもこの女にまた復讐をするようなことがあったら、

首がねじ切れると思え…」

男はそう言うと、そのままそこから歩き出した。

私は追いかけて、男に話しかけた。

「ちょっと…誰が頼んだんだよ！」

男は立ち止まり、振り返った。

「ただの気まぐれだ…気にするな」

「っていつかさ…いつから話聞いてたんだよ」

「最初から全部だ…反対側の橋桁の側で休んでいたから…まる聞こえだ…」

「そう…でも、礼は言わないわ。私頼んでないから…」

「ふ…強気な女だな」

そして男はその場を去った。

「あいつ…」

私はただ黙ってその背中を見ていた。

感じたことのない恐怖と、その男の放つ禍々しい雰囲気を感じ出しながら…

41話

その日の夜の月はとても大きく見えた。

近い…まるで落ちてきそうだ。

満月で月明かりだけでも十分闇をかき消してくれた。

俺はその中を走っていた。

いつものように三度目の仕事を終え、気持ちを抑えきれなかったのかもしれない。

願いの成就…

それがいよいよ本格的なものになってきたのだから。

それにしても三番目の生け贄の女は、何故あんなに生気がなかった？

ふらふらと一人で外に出たところを一刺ししたが、どことなく死者のイメージに近い。

生を望んでいないような感じた。

しかし結果は結果だ。

これでこの地に根強い三つの魂が揃った。

後は八坂神社に眠るといふ神の涙とやらを奪えばそれで終わりだ…

いや、もう一つあった。

健人がいた。

あいつはあそこに逃げ込んでいる。

どうする…諦めるか？

いや、最後の目的の物はあそこにある。

それなら…全ての望みを叶えよう。

その上で、もしも八坂神社の霊能者たちが奴をかばい立てするなら、八坂神社もろとも壊すさ…

俺は高ぶる気持ちを再び抑えながらねぐらへと帰っていった。

びくん…

私はようやく見つけた。

今まではつきりと感じる事ができなかった、些細な違和感をようやく捉えた。

あの方向は…

私の見た先には絵里の家がある。

しかしあそこの家とは限らない。

反応も微量…まだ核心に至らないが、警戒は怠らないようにしよう。

それともう一つ感じたのが反対側だ。

雑居ビルの建ち並ぶ場所だ。

しかしあそこには何かが巣食っている。目には見えない何かが…

だが私にはそれが何かが分からない…

嫌なことがこれから起こりそうな気がする。

大蛇山の上からいつものように街を眺めていたが、どこか違った風景のように見えた。

翌朝

嫌な予感は的中した。

学校に行くと、絵里が意識不明で昏睡していることを知らされたのだ。

昨夜、家の前で倒れていたそうだが、外傷や病気等が原因ではないようだ。

みんなはなら大丈夫だろうと思う程度かもしれないが、私は違う。

昨日はつきりと感じたんだ。

あその場所から流れる不穏な空気を。

どうしたらいいか悩んでいると、久しぶりに顔を出した亜季が私を呼び出した。

私はそのまま屋上まで付いていった。

鉄の扉を開けると空は晴れ渡っていた。しかし今はそんな気分ではない。

「何？」

どうして私を呼び出したのか知りたかった。

「あのさ…一週間前から訳ありの客人が来たから実家に帰って話してたよね」

「ああ…」

「そいつは、得体の知れない化け物みたいな奴から逃げてきて、何

とかしてくれって言ってきたんだ」

「化け物？」

「うん…人を玩具を壊すように殺せる奴なんだって…」

でもさ、薬やってて頭が相当テンパッていたから最初はまともに取り合わなかったの…」

「それで？」

「半信半疑のまま、薬の効果を抜くぐらいの手伝いをしてやるうかと思っただわ。」

しかしその男の話していることがそれから数日して分かったの…
巨大な靈魂を持つ誰かがこの八坂市に入ってきた。

あなたは専門外かもしれないけど、私には感じ取れるの…
そしてそいつが動いた時には決まって意識不明者が出ていた。
外傷の全く無いきれいな体のね…そこで私は目的が分かったの」

目的？私にはさっぱり分からない。

「八坂神社に眠る秘宝、神の涙を利用しようとしている」

「神の涙だ？」

「ええ…それは伝説の一説にあつた話。」

八岐大蛇を退治するのにスサノオノミコトは神酒と草薙の剣を使ったそうなの。

神酒を八岐大蛇に飲ませて眠らせてから草薙の剣で退治したとね。
そしてその神酒とは万能薬でどんな効力も発揮したらしい。

思いのままの効果を発揮し、不老不死にもなれるとか様々なの。

その神酒には欠かせないものがあつた…」

「それが神の涙か…」

「ええ、結晶化している神の涙が私の神社に保管されている。

これを神酒にするには人の魂が必要と先人が書き記した本には書いてあつた。

魂を入れることで、結晶化された涙は元のような液体に戻る…

どうやって魂を抜き取ったり、入れたりできるかは分からない。

けど、実際に魂を抜かれている人が出ているのは事実なのよ」

「絵里もか？」

「そうね…そしてその魂が集まり次第、私の神社に来るに決まっている。

匿っている男とも関係のある誰かが…」

「何でそんな話を私に聞かせる？」

「素直に話すと、協力して欲しいの。」

たぶん、私一人の力では無理…あの巨大な靈魂を抑えることはできない」

亜季は自らの力量を測つてこそその発言をした。

「それに絵里を救わないと…このままでは、彼女が何のために生きてきたのか分からない。

そんなのって悲しすぎる…」

私は亜季の申し入れを断る理由がなかった。

この地を脅かすものを排除するのは私の目的と合致している。

それに、絵里を救わなくては私は前には進めない。

だから、亜季に協力することにした。

私が出来ないことを彼女がして、彼女が出来ないことを私がする。

意見もまとまった所で、私は逆に亜季に聞いた。

「あなたはどこまで私のことを知っているの？私の素性を知っているような話し方だし…」

するとにつこりと笑って、

「ふふ…秘密…」

その笑顔が何かムカつく…

42話

「いよいよだ…今日で全て片付けよう」

「そうだな…」

「短いようで長い期間だったな」

「くくく…」

俺は三人の霊体を従えて、八坂神社を目指した。

その夜は昨夜とは打って変わって黒くよどんでいた。

今にも雨が降りそうなそんな天気だった。

ゆっくりと歩いて目的地の前まで来ると、そこには大きな鳥居があり、長い石の階段が上まで続いていた。

「人の気配は？」

警戒して、辺りを見回した。

「ここにはないな…しかし上の神社の側には数人いる。たぶん、健人と八坂神社の関係者だな…」

「そうか…なら、好都合だ。健人を連れてどこかに隠られるよりはましだからな」

石段をひとつ一つ上がりながら、殺意を高めていく。

様々な経験が俺を強くさせた。

今までのように取り乱したりもしない。いたって正常で、冷静だ。

上りきると、そこには石畳が広がり、大きな神社が聳え立っていた。

歴史を感じさせる外観と、霊を鎮めるには良い地脈の上に建てられていると感心した。

さて…

俺は辺りを見回し、どのように動こうかと思案している時に、二つの影が近づいてきた。

私は正直驚いた。

まさか…あの時の男が…

そこに立っていたのは、昨日私に助け舟を出した男。

皮肉にも絵里を救う手助けをしながら、その魂を奪い去ったということだ。

「あんたは…」

向こうも同じだった。

私を見て、驚きを隠せなかったようだ。

それを隣で見っていた亜季はどういうことか説明して欲しそうだった。

「き…昨日の女か…まさか、こんな形で会おうとは…」

しかも四度目の顔合わせとなるとこれは正に運命のようだ」

「四度？私は二度目だと思うけど…」

「まあいい…勝手にこっちが気が付いただけだからな。

しかし…この先邪魔をするなら、容赦はしない」

するすると剣を抜いて威嚇した。

「その前に聞きたいんだけど、何が目的？」

あんたはどう見ても殺伐とした世界で生きてきたような人間には見えないんだけど」

「そうか…そうは見えないよな…お前の言う通り初めは普通のどこにでもいる高校生だった。

だけど俺は何度も悩み苦しみ自分を傷つけた…

その結果、今の俺になったんだ。

この世界が腐っていることを散々教えられたからな…普通の人間もおかしくなるぞ」

「なら、あんたが追っかけてる男が原因ってこと？」

「ないとは言えない。」

しかしそれはまだ通過点に過ぎないんだ…本当の望みを叶えるための…」

「神酒に望みを掛けたの？」

亜季は男に向かって怒鳴るように言った。

「ああ…全てを元通りにするには、それしかない…俺が死んでも…こいつには揺るがない決意があるらしい。」

まるで自分の生きてる意味を見出すために神酒を求めているようだ。

「何を言っても聞いてくれそうにないわね」

「ああ…話し合いで済むのなら、俺はこんなにはなっていない…」

それもそうか…

しかし相手に負けないぐらいの信念が私にもあった。

それは私に殺意を向けた人間は決して許さない…

新城家に長きに伝わる家訓。

対峙する敵が現れた時、能力を発揮する場合には確実に殺すこと…

それができなければこの技を継ぐことができないのだ。

だから、私は対峙した敵を何人も殺した。

そこには新城家の技の内容を悟られないための配慮があった。

今となつてはそんな家訓、考え方が古すぎるので、無視しても構わないと思つた。

しかしそれが唯一私が新城家の一員だと誇りに思えることなのだ。

だから…この男がどんな事情を抱えていようとも、私は自らの能力を使う以上は確実に殺す。

「これが最後になるかもしれない。それなら君達の名を聞いておくか…」

男は覚悟を決めたかのように私に聞いた。

今更隠すことも無いので、相手を睨みながら答えた。

「私は…新城冬香だ…この地を脅かすものを排除するためにここにいる」

「私は八坂亜季よ。八坂神社の直系の力を持つ巫女…冬香と同じく、あなたの存在は危険だわ。」

「ここで止める」

亜季も私に負けないぐらいの気迫を持っていた。

それは相手にも伝わっているらしい、ぴりぴりとした空気の中で
余裕など感じられなかった。

「俺は、如月雁亜だ。さあ、始めようか…」

そう言つと、雁亜の側に見たことない生物がすうつと姿を現した。

「お前らは、この先に隠れている健人と神の涙を探せ。

邪魔する者がいたらそいつらも殺して構わない」

「ああ…分かった」

雁亜の命令を受けて、そいつらは大人しく従つと、神社の方を目
指して飛び出した。

「あ…」

風のように私の横を通り過ぎていったが、社の中へ通じる道を亜
季が阻んでいた。

「貴様…霊能者か…」

セケルたちは驚いた。

三人の霊体の身動きを封じる術を瞬時に出していたのだ。

これで戦いは二手の分かれることになった。

私と雁亜、亜季と死霊。

雁亜は受身も満足に取れず、背中から地面に叩きつけられた。

頑丈な奴だ。

骨がばらばらになってもおかしくない衝撃を与えたつもりだが、相手はけろっとしていた。

それにこっちの拳の方が痛かった。

やはり何かの能力者……しかしあの戦い方ではこちらが優位なのは変わらない。

追撃を仕掛け、本当の実力を計ろうと大地を蹴り上げた。

雁亜は立ち上がったばかりだったが、関係ない。

剣を奪いさえすれば勝てる。

そう思い、持ち手を重点的に責めるためにも相手の右手に目掛けて、渾身の力を込めた蹴りを出した。

だが、次の瞬間。

私は恐ろしい殺気に体が反応して、蹴り足を下げて大きく後退した。

「なんだ？」

自分でも訳が分からなかった。

体が反応したことに。

そして雁亜は、刀を私の方に向けると、重心をぐっと低くした。

初めて見る構えらしい構えだ。

む…

何だこの殺気は…

私は異変に気が付いた。

さっきまで雁亜が放つ殺気と別物の気配がそこを支配していた。

同一人物なのか？そんな疑問すら浮かんだ。

姿かたちは変わらないのに、殺気だけが変わる…そんなのおかしい。

私は背筋が凍る思いだった。

雁亜の周りには空気が渦巻いて小さな竜巻のようになっていた。

剣先が歪んで見えるほど大気が揺れるとはな…

そして雁亜は動いた。

え？

何の前触れも無く、飛び出す動作を微塵も感じさせないその動きに私は出遅れた。

人の動作には、必ず何かをやらうとする意思が働く。

筋肉の動き、目の動き、息使い。

それが動くヒントになるわけだが、そのどのヒントも相手は与えなかった。

私の目の前に現れた瞬間、私の筋肉は硬直していたのだ。

脳から体に行く指令が間に合わない。

ぎりぎりの状況で体を無理やり反応させ、急所だけははずそうと必死になりながら後退していた。

その結果…目測を誤り、あっさりと腹部を突き刺された。

「ぐぐ…」

剣先が背中から数十センチ飛び出していた。

この痛みも当然感じたことは無い。

焼けるような熱い痛みが腹部からじわじわと湧き上がる。

そして雁亜は剣を一気に引き抜いた。

「かはっ…」

私はその時の痛みに崩れ落ちそうになったが、どうにか踏みとどまった。

しかし大怪我に変わりない。血がぼたぼたと地面に流れ落ちた。

その様子を見て、雁亜は不思議そうな顔をしていた。

何故、死なないと訴えかけているようだった。

「あんた…本当に如月雁亜？さっきまでの雰囲気まるで違う…別人だ…」

額に汗を滲ませ、腹部を押さえながら聞いた。

すると雁亜は、弱った私を追撃することもせず話しに付き合った。

「流石に鋭いな…確かに見た目は俺だ。しかし中身が違う」

「中身だと？」

「ああ…俺の能力は霊を操り、自らに憑依させることができる。

憑依の能力は俺の持つイザナミの刀の影響もあるが、そのお陰で俺はどの道の達人にでもなれるのだ。

今の俺にはかの剣聖、愛洲久忠の霊が憑依している…

陰流の創始者で、彼の流れを汲む者の中にはたくさんの剣豪が存在するのだ。

そんな実力者の剣技をお前は受けたのだ。

しかしそれで死なないとは大したものだ。初動で決めるつもりで、

最高の攻撃をしたのにな」

理屈は分かった。しかしそれが分かった所で、あいつに勝てるかは分からなかった。

気を失いそうになるぐらいの痛みを忘れるかのように、私は意識を集中させた。

「時間がない、一気に決めるぞ」

そこまで話すと、魔剣で私を殺そうと再び動いた。

44話

亜季も初めての体験をしていた。

ここまで大きく育った死霊の塊を観たことがないからだ。

物理的攻撃と、精神的な攻撃ができる霊など聞いたことがない。

それを簡単にやってのけているのが、セケル、オシリス、アヌビスたちだった。

「はは…やるな小娘。私たちに触れられても精神の崩壊を起こさないとは…」

「よほど強い霊能力者だな」

感心して亜季のことを見ていた。

この場は亜季の劣勢が見てわかる。

三人の霊体から同時に攻撃をされれば、身を防ぐことだけで精一杯だ。

亜季は特に目立った攻撃をすることもなく、最小限で襲い掛かる霊たちの攻撃をかわしていた。

「八坂神社に伝わる秘術は出さないのか？」

セケルは楽しんでいった。

久々に自分が圧倒的な立場で殺せない者が現れたから。

普通の人間なら、こいつらが体内に侵入した時点で殺される。

それに防ぐ術を知らない。一方的な殺戮は確定しているのだ。

しかし亜季は特異体質の持ち主らしく、霊が入り込めない体だった。

これは八坂神社の巫女ならではの能力だ。

セケルは笑いながら自らの体の一部の霊を投げつける。

霊は地面に穴を開けるほどの勢いで突っ込んできた。

肉体を外側から破壊しようという魂胆だ。

次々と襲い掛かる小さな霊たち。

亜季はそれをかわしながら動き回った。

こいつらの体は自由自在だ。物理的攻撃は当然通用しない。

すると、亜季はいつか見せたことのある呪文のような言葉を詠唱した。

「我が命に従い、その身を我が盾とせよ」

すると、全ての襲い掛かる靈魂がごとごとく目の前で弾かれた。

亜季は光の盾でその身を守っていた。

「これは…」

アヌビスがその盾を見て、表情を変えた。

「守護の盾…しかもかなり高度な言霊を使っているとは…よほどの実力者か。」

まずいぞ！セケル、オシリス。このままでは…」

アヌビスの様子が一変した。

「どうした？」

「奴は主と同格かそれ以上の言霊使いだ。」

そうならば、こちらの分が悪い。

主が更なる言霊の力を我々に提供しなければ、我々は奴に滅ぼされるのは必然だ」

「まずいな…それなら主の目的を最優先させよう」

「ああ…頼む」

そこまで話すと、セケルが体を無数の霊に戻して、社を目指すように飛び出した。

それを阻むかのように亜季は言霊を使い、自らの守護霊をセケルに追わせたが、横から邪魔が入った。

アヌビスとオシリスがセケルの道を開くかのように守護霊の動きを止めていた。

「くっ…まずい。先にこいつらを始末しないと…」

亜季は言霊で守護霊に更なる力を与えた。

「鳳凰よ、その身に我が命を刻みこみ、その二人を浄化せよ！」

背後から二メートル近くある大きな鳥のような靈魂が隼のように飛び出すと、

オシリスとアヌビスを体当たりで弾き飛ばした。

「ぐ…」

二人は完全に力負けしていた。

「麒麟！あいつを追え！そして始末しろ」

次に亜季の背中から飛び出したのは見たこともない、いろんな動物が複合したような生き物だった。

西洋で言うならユニコーンだろう。しかし角は二本あった。

まるで鹿と狼と馬と牛の融合体だ。

亜季の持つ守護霊は一つではなかった。

四霊といって四つの靈獣が彼女の守護霊だった。

麒麟、鳳凰、靈龜、応竜なる四つの瑞獣が亜季の身を守っていたのだ。

彼女はこの国最高の巫女といっても過言ではなかった。

こんなに高貴な守護霊を持つ者はどこにもいない。そしてそれを飼いならしているのだ。

並みの霊媒師程度なら、主に不満を持って瑞獣たちは従わないだろう。

それを意のままに操っているのを見るだけで彼女の實力が分かるというものだ。

アヌビスとオシリスは無数の靈魂の塊であったが、鳳凰の前では赤子同然だった。

鳳凰が雄たけびを上げると、その大きな嘴から炎を吐き出した。

全てを浄化させる神聖な炎だ。

アヌビスとオシリスはその炎を前に何もすることができなかった。

一軒屋を丸々飲み込むような炎を誰が避けることができる。

当たり前のように炎は二人を浄化した。

断末魔すら上げることなく、二体の死霊の塊はあっけなくこの世界から姿を消すことになってしまった。

「くっ…は…あ…」

それを見るのと同時に亜季が膝をがくんと地面に落とした。

精魂も尽き果てたような様子だった。

四霊を扱うことはそれだけエネルギーを消費するのだ。

だからこそ、これは切り札なのだ。

そんなに頻繁に使う代物ではない。亜季はそれを分かっ
ていて、温存していた。

しかしあと一人を仕留めなくては全てが終わらない。

気を失いそうになるが、強い精神力でそれを未然に防いだ。

そうやって亜季は、ぐらぐらする頭を押さえて、
感覚を研ぎ澄まさせていた。

呼吸を整えると取り逃がしたセケルの後を追っていた。

45話

私は腹部の痛みをすっかり忘れていた。

戦闘にそれだけ没頭していたのだろう。

相手は達人：いや、魔人の域に達している。

過去の偉人かもしれないが、そんなことは関係ない。

私の敵はぶっ殺すまでだ。

幸い相手は私の能力を知らない。それならば、知らない間に一撃で決めてやるだけだ。

焼死がお望みか：それとも冷凍か？

私は意識を集中させて空間の干渉能力を発動させる。

雁亜の体を覆うように空間を固定する。

数秒でそれは完成した。相手も全く気が付かない。

なら、今しかない！

脳が、かちりとスイッチを入れる。

その瞬間、雁亜の空間は数千度に達した。

私は完全に相手が炭になったと確信した。

しかし…

ぞくり…

二度目の悪寒が背後からした。

「まさか！」

今度は体が反応していた。

背後から高速で襲い掛かる凶器を体をひねりながら感覚だけでかわした。

どのようにかわしたのかは分からなかった。

しかし私の体は服を斬られることだけで留まっていた。

「そんな馬鹿な…」

振り返ると、そこには私の前にいたはずの雁亜の姿が。

完全に命を取ったと確信までしたのに、全てを覆された。

「なかなかのものだ…お前の能力今はつきりと見せてもらった」

にやりと微笑しながら雁亜は無傷でそこに立っていた。

こいつの言葉は憑依している霊が話しているのだろうか？

言葉の重みを感じる…

「見るだけで相手に影響を与えられるとは。お前も人という枠組みを外れているのだな。」

技は素晴らしいが、殺気を放ちすぎだ…俺の体は危険信号を感じ取り、すぐにその場を離れた…」

「貴様…」

私は勝てる気がしなくなってきた。

絶対的感覚の持ち主のようなこの人物と長くやりあったらこちらが押し負けてしまう。

思い悩んでいると、相手に異変が見られた。

「ふ…っ…」

雁亜は、汗を大量にかいていた。

それはにじみ出るといふものではなく、流れ出すという感じだ。

先ほどの言葉にもあった、時間がない。

これが何か関係しているのだろう。

なら、私にも勝機があるのかもしれない。

しかしどごやって…

相手は未熟な私の殺気を感じ取って狙いから外れるように移動してしまふ。

それも高速の反撃のおまけ付きで。

私は数秒の内に今後の展開を予見し、動くことを考えなければならぬ。

高速で動き、全く隙のない相手にどう打ち勝つ。

雁亜は次の一撃で決めることを決意したらしい。

膨れ上がる殺気は、今までの比べものにならないくらい巨大な渦を巻いて私を飲み込んでいた。

気当たりつてやつか…

私はそれだけで気分が悪く、判断を鈍らされていた。

腹部の出血も未だに止まらない。

心臓は激しく脈打ち、呼吸も荒い。

そして自分の死のイメージしか浮かばない。

くそ…くそ…余計なことばかりが頭に浮かぶ…

ぎりぎりの死闘で自分の未熟さを知らされた。

世の中は広いのだ。今までのように自分に有利な展開ばかりがあると勘違いしていた愚かな私。

「くそ！」

もう、ぐちゃぐちゃ考えるのは止めだ。

やってやるぞ。

雁亜も切羽詰っていたのだろうか、もう、動いていた。

刀はもう目の前に来ていた。

余計なことを考えず、一点に集中した。

剣先の軌道を読むこと……ただこれだけに。

痛みと疲労で体が自然体になっていたことが、勝機を生み出すきっかけとなった。

研ぎ澄まされた五感は、達人の剣の軌道をたった一度だけ読むことができた。

心臓一直線コースだ。

今回も初動で見せた突きが肉体に迫っていた。

しかもそれがゆっくりと見える。

私はそれを見て、横にすうつと半歩移動した。

勢いをつけたままの刀は、心臓を捕らえることはなく、私の肩を貫いた。

「ぐっ…」

深々と突き刺さる刀は以前のよりも、背中から長く飛び出していった。

これでは抜くのも困難。

私はそこを狙っていたのだ。

「貴様…まさか…」

そのまさかだ。

高速で動き、殺気を感じ取る相手に私の能力は当たらない。

それなら、自らの肉体でも何でも使って動きを止めるだけだ。

射程圏内に入った標的を目掛けて、私は渾身の力を使った。

すると轟音と共に雁亜は後方に弾け飛んだ。

至近距離で放った空間干渉能力の灼熱地獄は、

空気をおつという間に膨張させ、二人の体を無理やり引き剥がしたのだ。

46話

刀は私の肩に刺さったままだった。

激痛と共に私も後ろに下がれることを余儀なくされたが、直接技を喰らった雁亜程ではなかった。

彼の体の表面は焼け焦げ、黒くなっていた。

ぶすぶすと音を立てて、肉の焼ける匂いと共に煙まで立ち上がっていた。

「う…う…」

仰向けに寝たまますぐに起きることは出来なかった。

しかし致命傷までには至らない。

私と接近していたせいもあり、全力は出せなかったのが現状だ。

それが幸いしたのか、雁亜はゼーゼーと呼吸をして、生きていることを証明していたのだ。

刀は彼の手から離れ去った。そして重傷も与えた…これ以上は戦うのは無理だろう。

私はそう判断した。

「はあ…はあ…」

やばい…本格的に気を失いそうだ。

事実、私の体は真っ赤に染まっていた。

急所を貫かれなかったにしても、流している血は致死量に迫っていたかもしれない。

だが、あと少し…私の体よ持ってくれ…

このままでは、雁垂に何も聞くことができない。

ふらふらとその場に膝を付き、少し休む。

「く…」

そして肩に刺さっている刀の柄に手を添えた。

「ふ…ふ…」

訪れる痛みを想定しながら、私は肩に刺さった刀を無理やり引き抜いた。

ズズ…

「ぐぐっ!」

鈍った体でも激痛を感じる。

引き抜く瞬間に肉の千切れる感覚に襲われた。

からん…

抜いた刀を無造作にその場に捨て、呼吸を必死に整えた。

私は雁亜に聞かなくてはならないことがあるんだ。それを聞くまでは気を失ってなどいられない。

そう…魂の戻し方。

それを聞いてこそ、全てが終わる。

そしたら息の根でも何でも止めてやるぞ。

私はゆっくりと立ち上がった。まるで鉛のような体を引きずりながら…

「む…」

視線を雁亜の方に向けたつもりだったが、先ほどまでいたはずの彼がそこにはいなかった。

私は周囲を見回した、すると社に体を引きずりながら向かう雁亜の姿があった。

すでに十メートル以上は離されていた。

元氣な私なら瞬きも終わる頃にその距離を詰めていたかもしれないが、

今はその数十倍の時間を要する。

そして間髪空けずに社から破壊音と何かが飛び出してきた。

それはセケルが無残にも食いちぎられた姿だった。

死霊の複合体は亜季の持つ守護霊の一つ麒麟によって襲われていたのだ。

力の差は歴然だった。

セケルの体はもう三分の一ほどしかなかった。

このままでは食い尽くされて終わりだろうと思われたその時、雁亜がセケルに向かって叫んでいた。

「俺の命を…全て食い尽くしても構わない。お前の力を増幅させ、願いを我が手にもたらせ！」

最後の言霊だったのかもしれない。

振り絞るように雁亜は喉が裂けるほど叫んでいた。

すると、先ほどまで弱りきっていて、

存在を無に返すだけの靈魂は今までの劣勢を撥ね返すかのように増幅を始めた。

「何だ…」

黒い闇がどんどんセケルの体に吸い付いていた。

その大きさは留まることを知らず、社の高さ位の大きさになっていた。

これでは特撮ヒーローに出てくる怪獣だ。

「スケールがでかいだろ…」

冗談を独り言のように話ながら、その様子を見てみると、亜季が近づいてきた。

「どういふことだ？」

私は起こっている事態が飲み込めず、思わず聞いてしまった。

すると亜季はせえせえと肩で息をしながら答えた。

「あれは…言霊の力を借りて増幅した靈魂の塊…」

私でも…あそこまでのものを呼び出すことは不可能よ…」

その話を聞いている最中にぐちゃっと嫌な音が耳に響いた。

それは亜季が呼び出した守護霊、麒麟の最後だった。

馬鹿でかい怪物に手で踏み潰されていたのだ。

「ぐ…」

麒麟がやられると、亜季は苦痛を感じていた。守護霊と彼女は繋がっているのか？

「このままではまずいわ…彼と縁のある人物は別の場所に匿っているけど、神の涙はあそこにあるの…」

「何でそれも隠さないんだよ！」

「あれは大地と根付いていて、切り離すことができない代物なの…社の奥に多重結界を張って保管してあるけど…」

あの化け物なら、それも容易に突破してしまうに違いない」

はあ…最悪のシナリオだ。

私はこのまま寝ている訳には行かないってことだ。

あの怪物は神の涙の匂いでも嗅ぎつけたのか、その場所を真っ先に目指していた。

47話

俺はまた夢を見ていた。

誰もいない暗い黒い深い海の底だ。

そこには絶望しかない。自分という存在をちっばけなものと感じさせ、希望すら与えない。

そんな死の世界。

世の中の全てを拒絶して自分しかいない世界。

しかし今は少し違う…

そこには一筋の光が差している。

そうだ。最近見るようになったあの夢だ。

僅かに残る大地に一輪の花を照らす希望の光が俺には全てなのだ。

あれを求めて手を何度も伸ばした。

それがすぐそこにあるんだ…

俺はゆっくりと目を開いた。

「気絶していたのだ。」

セケルに向かって叫んでからの記憶がなかった。

辺りを見回すと暴れまわる怪物が何かを必死に探していた。

そしてそれを阻止するかのようにあの女たちが戦いを挑んでいた。

どれぐらいの時間気を失ったのだろうか？

恐らくほんの数分だ。しかしあの夢をまた見ようとは…

俺は最後の希望を叶えるために、半死の体を無理やり起こした。

そして無造作に落ちているイザナミの刀を再び手に取った。

もう憑依の技は無理だろう。

体がそれを拒否している。しかしイザナミの刀は願いを叶える鍵なのだ。

これを神の涙に突き立てれば俺の望みが…

その気持ちだけで、俺は社の中に入って行った。

社の中はめちゃくちゃだった。

幸い中に人がいなかったのが救いだ。

半壊していた建物は天井が抜け落ち、空が見えていた。

未だに木片がばらばらと頭上から落ちてくる。

私はそれを避けるように歩いたが、足取りは重い。

亜季は守護霊を使った反動で、無傷ではあるものの疲労困憊の様子だった。

それでも神の涙を守るべくために、私より先に動いて目的の場所に向かっていった。

大きな靈魂は体の分だけ動きが遅いので、目的の物を探すのには時間が掛かった。

そして出遅れた私たちの方がそれを先に見つけ出した。

「まだ、無事ね……」

亜季は手付かずの神の涙を見てほっとした。

その噂の代物は、話の通り地面から突き出していた。

まるで木のように生えているようだった。

こんなに大きな岩を運ぶのは確かに困難だ。だからこそ、ここにそのまま社を建てたのだろう。

多重結界が張られているこの岩も、あの化け物の手に掛かれば破られると、亜季は思っていた。

もう一度瑞獣の鳳凰を呼び出し、あの化け物を間近で、完全に浄化する。

それしかないのだ。

亜季から少し送れて私はその場に着いたが、嵐の前の静けさでも言うのだろうか、物音が全くしなかった。

ぎしぎしと歩く音だけが響き渡っていた。

「冬香…」

「間に合ったようね…」

神の涙という由来のその岩は微動だにしていなかった。

しかしそんな安心感も束の間だった。すぐに緊張感に変わり、得体の知れない恐怖が体に襲い掛かる。

物凄い数の殺気だ。

それがこの部屋に一気に迫ってくる。

「どこから来るの？」

「四方八方から感じるわ……」

この部屋を覆い隠すかのように、どす黒い感覚がどんどん迫って埋め尽くしてきた。

「勝てる気…する？」

私は亜季に聞いてみた。

「駄目かも……」

そう言い終えた瞬間に四方八方から、死霊の塊が津波のように流れ込んでいた。

先ほどまで外で暴れていた巨大な霊魂が姿を変えていたのだ。

その数は何万という数だろう。

どれほどの成仏できない霊がここに集まったのだろうか？

私たちは、なす術もなくその海に飲み込まれていた。

「く……」

身動き一つ出来ない。

広く見えたこの部屋も気がつけば、ぎゅっぎゅっ詰めた。

「このままでは…」

どうすることも出来なく、空しくもがくだけだった。

技を出そうにも体が動かなければ、無意味だ。自らの体にまで被害が及ぶ可能性すらある。

亜季も言霊を使おうとするが、それも無理だった。死霊の力は霊力を奪う。

亜季の力はどんどん吸い取られていたのだ。

そこへ、ゆっくりと姿を現したのは、渦中の人物如月雁亜だった。

彼も半死の状態で体を引きずりながら、この部屋まで来たのだ。

彼が岩に近づこうとすると、それを導くかのように死霊の塊は道を開いた。

「さあ…これで…全てが…終わる…」

独り言のようにぶつぶつと話しながら、たった数メートルを数秒掛けて歩いた。

岩の前まで来ると、イザナミの刀を目の前に構えた。

何をする気だ？

私たちはそれを黙って見ていた。

すると、死霊の塊の中から部屋中に響き渡るように声がした。

「よくやった…さあ、刀をよこせ…後は我々でお前の望みを叶えよう」

「ずっと死霊の塊は手のようなものを作り上げると刀を雁屋から奪い取った。」

そこに神酒の能力が加わることで、冥界の扉が開き我々の望む世界が訪れるのだ…」

「望む世界だと…」

「我々はどちらの世界にも属することのない救われない靈魂…

それならその境界線を取っ払ってやろうって話になった。

そうすることで、生きることも死ぬこともままならない世界が完成されるのだ。

生物というよりは、思念の世界…肉体を持たず、皆が世界を漂い続けるのだ」

「そんなことをしたら…」

「ああ…この世界は姿を完全に変えるのだ。

お前という言霊を操る者、そしてイザナミの刀、神酒の全てが揃って成せる技だ」

「貴様ら…それなら初めからそれが目的だったのか？

俺の復讐に賛同する振りをして…」

「全く…幸運だったよ。お前のような強い言霊を扱える者が偶発的とはいえ生み出されたのだからな…

とはいえ、はっきりと冷酷になれない精神力の弱さが問題だった。しかし我々と係わることで相当毒されたはずだがな。くくくくく

…」

雁亜は悔しがっていた。

自分の命を賭してまで、すぐれた物を逆に利用された。

もう泣くことしかできなかった。

生きてきた意味を忘れ、そしてそれを取り戻し、血の海の道を歩み、

悩み、後悔し、心が揺れて、最愛の者を再び亡くし、絶望へ叩き落される…

しかしそれを全て取り戻せると知った時の気持ちは今まで以上にない喜びだったのだろう。

強く願った。例え自らの命が失われてもそれだけが叶えば満足だ。

たったその一つの望みのためだけに生きていても良いと…

だが、それが完璧に覆され、三度目の絶望を味わい、自分の存在を呪った。

だからこそ、私たちに向かって恥じらいもなく懇願した。

「あの…あの刀を…砕いてくれ…」

弱弱しい言葉には生氣すら感じられない。

だが、私はその言葉を聞きいれ、計算に入れていた最後の余力を使うことにした。

無謀な戦いは私は好まない。だから余力を残していた。それは本当の最後にしか使わない切り札。

イザナミの刀に視線を浴びせると、空間の干渉能力を使い、一気

に温度を下げ冷却させた。

刀は真っ白に色を変えていった。

それを見るなり、死霊は嘲り笑った。

「刀を冷やしてどうする？それよりも我々を攻撃して刀を引き剥がした方が良くはないのか？」

それは無理だ。私の攻撃は思念体には効果がないのだから。

「これで終わりだ」

そして刀を振り上げると、岩に向かって一気に突き刺した。

「くっ……」

雁亜は疲れきり憔悴しきった様子で、もっとうでもいいやというような表情でその先を見ていた。

私は諦めない。

その剣先をしっかりと見ていた。

すると、ぱきいいいんという音が鳴り響いた。

それは金属が粉々に砕ける音だ。

私は自分の能力の限界の温度まで金属を冷却したのだ。

その温度はマイナス三百度を超える…つまり液体窒素以上の冷却効果だ。

硬い金属はまるで枯れ葉を握りつぶしたかのように細かくばららになった。

「なっ…」

一番驚いたのは死霊たちだろう。

突き立てるはずの刀が砕けたのだから。

それを同時に粉碎した刀から三本の光が飛び出した。

どこかに向かうように、それぞれ別の場所へと散らばっていった。

イザナミの刀が砕けたのを見た死霊は聞いたことのないような大きな咆哮を上げた。

「貴様らあああああああ」

理想郷を築こうとした願いがそこで絶たれた瞬間、死霊は初めて激怒した。

その声は笑い声同様に気持ちが悪くなるほど、あちこちから聞こえてきた。

死霊たちはこのまま私たちを飲み込んで、吸収するつもりらしい。

憎悪と共に私たちの体は締め付けられ、沈んでいく。

もう私にも力がほとんど残っていなかった。

「雁亜…もう一度だけ、言霊を使って、あいつらを弱らせて…」

亜季が雁亜を見た。

雁亜はも抜けの殻のような状態だった。

「目を覚まさない！」

このままこの死霊たちが野放しになれば、あなたのせいで、この世界に大量の死人がでる…

関係ない人も殺される…」

雁亜に檄を飛ばすが、反応はいまいちだった。目の焦点が合わず放心状態のままだ。

「もういい…もういいんだ…こんな誰も救われない世界…

俺は疲れた…もう…このまま眠らせてくれ」

その情けない傍観者的な言葉に私もキレた。

「ふざけんな！お前に未練無くてもな、私には大有りなんだよ。

お前も事を起こした張本人なら、最後まで自分の尻拭いをしろ！このまま何もしないなんて虫が良すぎるだろ。

お前の信念ってのはそんなちっぽけな結果で終わりかよ！

奴らを止めることを少しでも望んだのなら最後まで諦めんなよ！」

「頼む…雁亜、奴らに力を緩めるように指示して…」

言霊の力では霊を消滅させるのは無理よ、しかし抑制を与えるこ

と位はできる…」

亜季は一生懸命説得しようとかんばっていた。しかし雁亜の目には未だに生気が宿らない。

49話

もう…俺には何も無い…

たった一つの希望も今、踏み潰された。

はは…やっぱり俺ってそんなものなんだ。

そんな存在で終わりなんだ。

誰も救えず、誰にも理解されなくて死ぬんだ。

みんなの死んだ意味って何だったんだろう。

俺の存在って何だろう…

ちくしょう…ちくしょう…まるで分からない。分からないよ…

俺は自問自答を繰り返していた。

すると、目の前に急に花音の姿が現れた気がした。

そして慈母のような暖かさがその場を包み込んでいた。

「雁亜くん…私たちは生き返るのが望みではないわ。

あなたが…人の心を取り戻してくれることが何よりよ…」

まただ。

あいつはそうやって自分よりも俺の事を心配している。

どうしただ？どうしてなんだよ！

俺には全く分からなかった。しかし、最後に交わしたあの言葉が耳に残る。

『あなたのことが…』

くっ…心が締め付けられる。

忘れてくても忘れられないあの言葉。

俺は愛されていたのか？最後まで…

「…」

長い長い沈黙が続き、私たちはどんどん体を締め付けられる。

変わらぬ状況に止む終えないとばかりに亜季が何かをしようとして口を開こうとした時、

「我が命に従い、その身を元の形に…」

雁亜の死霊に対する言霊が聞こえた。

そして、固体になっていた死霊はばらばらと一つ一つの霊に別れた。

それと同時に私たちを締め付けていた圧力も無くなくなり体が軽くなる。

待っていましたとばかりに、亜季はそこから巻き返しを図るように、言霊を使った。

「四霊よ…この場にいる全ての霊を浄化し無へと帰せ！」

すると亜季の背後からは四つの巨大な守護霊が飛び出した。

麒麟、鳳凰、霊亀、応竜が惜しげもなくその姿を現す。

亜季は私同様に力を温存していたのだ。

目の前はもう現実の世界なのか区別すらつかない。

まるでファンタジーの世界そのものだ。見たこともない生物が次々に魂を食い尽くす。

四つの巨大な守護霊は、圧倒的な力で埋めつくす靈魂をどんどん浄化していた。

弱りきった体の力は次第に戻っていた。

その場を支配していた霊力が弱まっていったのだ。

そして周囲の様子が元の姿に戻った時、亜季は気を失って倒れた。

「おい…亜季…」

私は駆け寄って亜季の体を抱きかかえた。

私も軽傷とはいえなかったが、それ以上に亜季のことが心配だった。

亜季の表情を見ると真つ青だった。

四霊を飼いならすにはそれほどの霊力が必要なのだ。

一体でも並みの霊力では扱えないものを亜季は四体同時に思いのままに扱って見せた。

それはどんな負荷が体に掛かっているのか想像もつかない。

亜季は苦しそくに短い呼吸をしていた。

生きてはいる…しかし危ない状態だ。

「おい…しっかりしろ！」

声を必死に掛けると、呼吸を荒げながら目を開いた。

「ちょっと…休ませて…大丈夫…だから…」

良かった。とりあえず命に別状は無いようだ。なら、後は雁亜だけだ。

雁亜はそのまま逃げることもせず、座り込んでいた。

「おい…」

私は何も考えず無謀にも雁亜に近づいた。

そこにいるのは、ただの骸だ。

生きながら自らの存在意義を呪い、そして全てを失ったただの人という殻だ。

目に力はなかった。

死んだ魚のような目をして、ただ一点を見つめていた。

壊れてしまったのだろうか？

私はそんなことお構い無しに雁亜の胸倉を掴むと体を無理やり引き起こした。

「おい！聞けよ」

相手の反応は未だに変わらなかった。

ぶらぶらと足を揺らしながら吊るされていた。

そして何かを呟く。

とても小さな声で、ぼそぼそと。

「しろ…殺して…」

あろうことが、死を望んでいた。

「もう…疲れた…俺には…もう帰る場所も、すぎる望みもない…
こんなのは…嫌だ。なら…いつそのこと殺してくれ…殺してくれ
…殺して…殺して…」

「ちっ…」

雁亜は完全に壊れてしまった。

そこに彼の意識は無い。

もう夢の世界のまま永遠に自分のことを呪い続けている。自己嫌
悪の終わらない夢だ。

それに体を見ても火傷の跡が酷い。それは私の付けたものだが、
生きているのが不思議な状態だ。

このままほっといても数時間で死ぬのは間違いなかった。

50話

そこで私は決断した。

これは私の信念…

彼が敵として、私の命を狙ったのならこの結末は当たり前だ。

同じ言葉を永遠と繰り返す目の前の愚かな人形の電池を引き抜いてやるっ…

「悪いな…敵として私の前に現れた以上は、これが原則だ…」

ぎりつと奥歯をかみ締めながら、雁亜を見つめる。

雁亜はこれで救われると思っている。

死こそが、今の自分の最大の望みだと。

これまで戦った奴に全く当てはまらない。

悲しい生き方しかできなかった奴。

ぼそぼそと呟き続ける雁亜の声だけが私の耳に響く。

それから一呼吸置いて、私は雁亜の体に標準をあて、業火を浴びせた。

一瞬の出来事であったが、雁亜は炎に包まれながら笑みを浮かべ

た。

「帰れる…やっと…」

そんな言葉を残しながら…

雁亜の体は骨一本も残さずそのまま蒸発してしまった。

今までいた、雁亜という存在はその空間からすっぽりと抜けてしまったのだ。

「くっ…」

私はやるせ無い気持ちで一杯だった。

これが正しかったのか、それすらも分からない…

すると、彼の体のあった場所から一つの魂がゆっくりと浮かび上がり空を舞った。

そこから部屋自体が光始めた。

部屋の周囲に散らばっていた金属片がきらきらと輝いていたのだ。

「これは…」

部屋中の異変を感じて私は見回した。

「イザナミの刀の能力よ…」

後ろから立ち上がったばかりの亜季の声が聞こえた。

「あいつの持っていた刀か？」

「ええ…砕けてしまったけど、あれは紛れもなく神の刀…その能力は冥界へと通じるものなの。」

たぶん、迷わないように道案内をしてくれるのだと思う。
彼の想う人たちのいる世界へね…」

「そうなのか？」

「ほら、見て」

亜季が指差した先には空間の中にぽっかりと穴が空き、そこへイザナミの刀の破片がきらきら流れ込んでいた。

まるで魂を呼び寄せるかのように。

雁亜から抜け出した魂はそのまま光の通じる穴の中へと目指して動いていた。

夢でも見ているかのようにだった。

この部屋が宇宙で私たちは光輝く星の中にいる。

無数の星達は何かに導かれるように一斉に移動した。

「はは…なんだよ、これ…」

「生命は水の如く流れては形を変えて輪廻する…その兆しを今見た

のかもね」

そしてゆっくりと元の世界へと部屋は姿を戻した。

「なあ…殺した私が言うのもなんだけどあいつどうなったんだ？」

「大丈夫…迷わず、彼の望むべき本当の世界へと向かったわ…」

「あいつ…こうなることを望んでいたのか？」

願いを叶えると言ってたけど、本当はそうじゃなかったのかな
って…」

「どうしてそう思うの？」

「あいつはずっと悩んでいた。それがいろんな面から伝わってきた…
自分のしてきたことをとても後悔して…」

「それを感じ取れるようになったってことは、あなたはもう大丈夫
ね…」

「え？」

「あなたに足りなかった心の一部が今、その体の中にはまった…」

「足りなかった心？」

「人を思うという心…それはすごく大事なこと。

絵里を無碍に扱いその結果一人の人間を間接的に追い込んでしま
った…

そのことからあなたはいろんなことを考えた。

そして生きてきて初めて人の気持ちつてものを正面から受け止めたはず…

あなたは強い。しかしそれだけでは駄目なの。そのままでは、あなたはいずれ気付くはずだから…
自分は生物でないと…生きる意味もないと」

生物じゃない？私は生きている物そのものだ。

「心が死んだものは人間とは呼ばない。

無意味に殺戮だけを繰り返すのも生物ではない。

それは兵器よ…あなたがその道を選んだなら、死すらも怖くないし、自分の生きている目的も持たないまま死を迎えるでしょう。

それって悲しいこと…私はいろんな魂に触れているから分かる。人を思う心がなくなままに死んだ人間の末路はただその場に漂うだけ。

何も無い、何も残らない…そんな道はあなたには歩んでほしくない」

「あなた私の母親にでもなったの？そこまで人の心の中に入り込む人間も珍しいわ」

「私は私が生きたいようにしてるだけ、それが私の信念だからね…あなたと何ら変わりはないわ」

「よく言うわ…でも、どうしてそこまで私のことを気にするの？」

「さあね…秘密…」

「そうですか…」

こいつの考えていることは最後まで分からなかったな。

それでも私は、自らの仕事を助けられながらも果たした。

戦いの内容を見ていない連中に結果だけでも報告すれば、まず功績を称えられることだろう。

嫌な話だがな…

しかし今回の一件で自分の未熟さを散々思い知らされた。

技に殺気を込めすぎたり、無駄な動きが多かったり、冷静さを失ったり、無様な戦い方この上ないといった感じた。

そこで思い知ったのは、私は所詮は井の中の蛙だったということ。

それに人の気持ちも分からない能天気野郎だということだ。

女だから野郎はないか…

それでも得るものは大きかった。

慢心していた心に活を入れて、やり直すことを教えられ、人の気持ちの奴も考えることにした。

そこに私らしさがあってもいい…しかしそれで、全てをないがしろにするのは間違いなのだ。

51話

あれから目まぐるしく回りは動いた。

匿われていた健人は大量の薬物接種と、襲い掛かる見えない恐怖のせいで、

精神に異常をきたし病院へと運ばれた。

今ではベッドの上でしか生活できていないらしい。

まあ、悪人らしい末路だ。

一方で病院にいた絵里の意識は戻った。

それがどうしてかは分からなかったが、私は心から喜んだ。

そして見舞いにも何度か足を運んだ。

始めは嫌がられたが、雁亜に怯えた元彼が何度か訪れ約束通りに彼女の心を形は違えども癒してくれたので、

三度目の訪問で家に入れてくれた。

彼は自らの行いを大人しく認め、誠心誠意謝罪を繰り返したらしい。

絵里はやはりショックを受けた。しかしそれは避けられない道だった。ゆっくりではあったが、しばらく経つとそれを受け入れるようになった。

以前のように明るい笑顔も見られるようになり、顔には生気が戻っていた。

「冬香さん…ごめんなさい。」

私…あの時、頭が真っ白になって…あなたの存在自体を受け入れることができなくなったの…

それで、自暴自棄になって、彼と上手くいかなかったのも全てあなたのせいにした…

本当は、私が馬鹿なだけだったのにね…」

絵里はベッドの上で悲しそうに俯いた。

「そんなことないよ…私こそ、ごめん。」

自分勝手に人を傷つけて、それが当たり前だと勘違いしていたんだから…

あなたに教えてもらったよ」

「何それ…いつもの威張った冬香さんじゃないんだ…ふふっ」

「お前なー」

「いいじゃん。もう少しで学校にも行けるからさ、その時はよろしくね」

「ああ…」

そこで私は気が付いた。彼女は心が元々人よりも狭かったのだ。

だから私の言うことを何も聞かなかった。

受け入れられる入れ物が小さすぎたからこそ、あの出来事は彼女を狂わす元凶になってしまったのだ。

それは私が勝手に彼女のことを私と同じ目線で考えていたからだ。だから反省。

ゆっくりと時間をかけてあげることが必要な人間もいるのだ。

その後、絵里は彼と正式に別れることになったが、もう未練はないようだった。

すっきりとした表情で、学校に復帰した。

これで、安心だ。

私はつい先ほど学校に転入届を出して、別の街へ引っ越す準備を整えていた。

ここが嫌になったからではない。

あの一件を八鬼へ報告しに行ったら、ひと悶着起こした人間がここに長居するのはまずいと判断され、後任を置く代わりにお前は別の町へ行けと言われた。

神の涙なるあの岩は、今でもあの八坂神社に祀られている。

本来なら無限の欲望の象徴とも言つべき忌むべき存在の物は
早めに壊そうと言うのが私の組織の決断だった。

しかしそれは私が断固として拒否した。

亜季も私に話した。

あれはあのままでも八坂市の迷える霊を黄泉の国へ導く効果のある重要なものだ。

私はあの光景を見たからこそ納得できた。

だから破壊行為を食い止め、残すことを提案したのだ。

頭の堅い連中はそこまでこだわる理由が分からないと言ったものの、
その場にいた私の意見を尊重してくれた。

イザナミの刀の無い今、神酒に戻すことは不可能なのだから大した危険もないだろう。

一人でせつせと荷造りをしていると、亜季が部屋の中に入ってきた。

「行く準備は整ったの？」

「ああ……」

「そう……」

どこか寂しそうな目で見ているような感じだったが、それだけではあいつの感情は理解できない。

「結局…最後まで私が何者かお前、聞かなかつたな」

荷造りの作業を終え、夕焼けの差し込む窓辺に立った。

「私には…言わなくても大体分かるから。

生まれついてから霊の囁く声はいろいろ聞こえたわ…だからあなたのことも」

「私の事？じゃあ、誰か知り合いが囁いたってことか？」

「ええ…お母さんよ」

「はあ？」

「あなたのお母さんはあなたを一人前にする志半ばで亡くなった。だからこそ、伝えたいことがあったの…それはあなたの内面を鍛えること。

上辺だけの強さではいけない…あの子の内面を…心を…育ててあげて、と」

「母さんが…」

うつすらと残る母親の記憶の断片を一生懸命探していた。

母さんはいつも私の味方だったのは、はっきりと覚えている。

こんな形で母さんから教えられるとは…

「まあ、私もあなたと初対面じゃないし、その願いを叶えてあげようと思ってるね」

今、何か言ったか？

「初対面じゃない？嘘でしょ。どこで会ってるのよ！」

ダブルで驚きだ。

「四年前…ここに着たでしょ。」

その頃中学生だったけど、あなた本当に人を寄せ付けない位の才
一ラ放っていたのよ。

人を殺しそうな勢いのね…」

そうか…あの時か。

私は八鬼に就任したばかりで、自分のことで精一杯もいいところ
だったからそこまで気が回らなかった。

そっぴゃあの時の私は殺伐としていたよな。

だから誰も寄せ付けないし、目に入らなかった。

それが、力を付け、自信が付いたことで今の性格にまで落ち着い
た。

まあ、心はがらんどうだったけど…

「それで、お前は一緒に中学だったのか？」

「ええ…私は何度も話しかけたけど、無視されたからね。」

「こいつうーって腹立たしくも思ったけど、あなたの境遇をお母さんから聞いたら…ね…」

「同情かよ」

「そんなんじゃないわ。」

あの時のあなたを見てたら分かるけど、とんでもない方向に進むのは間違いなかったから、

変えてあげるのとは大事だと思ったの、一友人として」

「友人ねー…まあ、そのお陰で、私もちよとは人の心つてのが分かったよ。」

絵里も少しずつ良くなっているみたいだしさ…」

「あなたが、何度も顔見せて、元彼にもお願いしたからその結果になっただんでしょ。」

それがなければあの子は遅かれ早かれ自殺という道を選択していたわ。

あの子は側に漂う死霊に影響されやすかったからね…

極端に明るかったり暗かったり…だからあの子に対する発言は慎重なものでなければなかったの」

「なるほどね…しかしイザナミの刀が壊れたことで意識不明者の魂が戻るのには驚いたが、あれってどういう代物なんだ？」

「あれは元々冥界へ死者を導く箱舟のようなものなの…魂をあの中に集め、黄泉の国へと誘うの。」

本来の使い方は、簡単な話し安楽死の道具かな。

病気で苦しむもの、生きるのがこの上なく辛いもの…そんな者たちの望むべき最後をすぐに与えてくれる。

そして魂が抜け出し四十九日を迎えると、その魂は自然と黄泉の国へ導かれる…

だけどあの時は、四十九日前に刀が砕けてしまったから、魂が元の肉体に戻ったの」

「しかし雁亜の魂は導かれていったんじゃないか？」

「あれはきつとイザナミの心意気よ。

しばらくの間自らの刀を現世で使ってくれたことの恩返しみたいなの…」

「そんなものなのか？」

「たぶん、でもあの刀はまたどこかで復活しているかもね…

神の刀がそんなに簡単にこの世から姿を消すとは思えないからね」

「厄介な代物だ…」

「まあ、私がここにいる内は大丈夫だからさ。もしもいなくなったらお願いね」

「いなくなる？お前、家継がないでどこかに行くのか？」

「ちょっと違うけど…まあ、似たようなものかな？」

「訳わかんないな…相変わらず」

そして私は荷物を持つと、亜季だけに最後の挨拶をして八坂市から去った。

52話

六年後

私は再び八坂市に来ていた。

「かー…この空気はあんまり変わんないわね」

私はバスから降りると伸びをして、鼻で息をした。

そして辺りを見回し町並みを思い出すが、そんなに違いのないことに気がつく。

六年という年月を持って、ここは目まぐるしく動かない。

ゆっくりと時を刻んでいるかのようだ。

よく行ったあの公園の前を通ると、私は学生だった頃の自分を思い出した。

未熟で、子どもで、それで悩んだり、人を好きになろうと努力して…若いねー青春って奴だね。

うんうん…

一人で勝手に納得しながら公園の中に足を踏み入れる。

すると、砂場で遊んでいる一人の女の子が目についた。

砂山を黙々と大きくすることに専念している。

年は三歳位か…こんな小さい子を一人で遊ばせるなよ。

迷子かもしれないと思って私は声をかけた。

「ねえ…誰かと一緒に来たの？」

私の声で振り返るその子は、どこかで見たような顔をしていた。

まさかね…

「お母さんとか、お父さんは？」

話しかけてもその子は私を無視して一人で黙々と砂山を叩いて大きくしていた。

何て無愛想な…

「あのねー…誰もいなかったら危ないでしょ！誘拐でもされたらどうすんの？」

「おばちゃんの方が怖い！」

「あ…あのねえ！私はおばちゃんって年じゃないのよ！」

こう見ても大学じゃミスキャンパスに選ばれた美人のお姉さんなのよ…

って聞いてないし！」

全く…このクソガキめ。

私は力説することに疲れてそのままその子を見ていた。

すると、しばらくして父親らしい人物が駆け寄ってきた。

「すまんすまん…待たせちゃったな。」

千代さん話が長くてね…でも、ほら、たい焼き買ってきたよ。一緒に食べよう！」

「遅いよ…」

その男は私と同じぐらいの年で、爽やかな好青年だった。

子どもに平謝りして、帰ろうと手を伸ばすと、私の事に気が付き会釈をした。

去り際に男が娘に聞いていた。

「あの人と遊んでたのかい？」

「違うよ…からかっていただけ」

あのクソガキ！

「でもね…懐かしい匂いがするんだよ」

「え？」

男は戸惑いながら娘の手を引っ張って夕日の沈む方へと歩いていった。

私はそのまま一人その場に残された。

懐かしい匂い？

なんのことが分からなかった。

私は八鬼の任務もあったが、友人と約束を果たすためにここにいた。

公園を後にした私は八坂神社の裏の敷地にいた。

そこには大きな墓石があった。

歴史を感じさせるようにコケがびっしりとついていて、字もよく見えなくなっていた。

「八坂家のお墓？」

私は八坂家と刻まれた墓の脇にある墓誌を見た。

そこには亜季という名前が刻まれていた。

享年二十三歳

彼女はつい先月亡くなったらしい。

そしてどうやって調べたのか、死ぬ数日前、私の元に手紙が届いた。

六年前の約束をお願いします。八坂神社の裏に来てくれれば全て分かります。八坂亜季。

たったそれだけだった。

私には何のことだか分からなかったが、今ここで理解した。

あいつ…死んだのか？

私は放心状態になってしまった。

「そんな…殺しても死ななそう奴なのに」

その時頭の中を過ぎつたのは六年前の言葉だった。

「もしもいなくなったらお願いね…」

あいつ…

自分が長くないこと分かっていたのか？

じつと墓石を眺めながら、ただもどかしさだけがそこにあった。

ざわざわと風に木々が揺れる音が聞こえた。

私はぐっと拳を握り締めていた。

「くそ…」

私に道しるべを指し示して死ぬって、どういうことだよ！

そのまま日暮れをそこで過ごすことになった。

心の整理をして、落ち着いた頃に私はそこから動くことが出来た。

そのまま表に回って八坂神社の正面を見ると、壊された跡はどこにもなかった。

あの頃のままの綺麗な神社そのものだ。

亜季の家族に話を聞くわけにもいかないの、そのまま帰ろうと思えば石段を降りていった。

すると、誰かが私の事を見ていた。

視線を感じた先を見ると石段の上から私を見ている少女がいた。

あの子…公園にいた女の子？

そして少女は私に向かって何かを話した。

「またね…冬香…」

懐かしい声のような気がした。

そうか…亜季はあの子の守護霊になっているのか…

だとすれば、あの子は…

まあいい。私は懐かしい亜季の心を感じ取れたのだから…

そしてそのまま暗くなる街中に消えた。

「今日からこちらの学校にお世話になります。新城冬香です…」

そこは八坂市の男女共学の普通校だ。

私は春からここに就職することになった。

まあ、表向きはそうだが、これは八鬼の任務でもあった。

慣れない教師という役柄も少しすれば慣れるだろうと安易な気持ちだった。

職員の先生に軽く挨拶をすると受け持つクラスに早速出向いた。

教える教科は数学、本当は体育とかの方が向いていたが、私の性格上スパルタになってしまい子どもたちを殺しかねない…それだけは避けないと、言うわけで普通の教科を選んだ。

当然、大学も通っていたから教員免許も持っている。

嘘偽り無いスーパー先生なのだ。

がらっと、ドアを開けると大人しそうな子たちがきちんと座っていた。

こういつのは始めが肝心だ。

私はあくまで地そのままで行く。

そして黒板に自分の名前を書くと、

「新城冬香だ…よろしくな。担当教科は数学で、あんたたちの担任にもなる」

教室は静まり返っていた。それもそのはずだ、女の私がいきなりこんなしゃべり方をしたら引かれる。

しかしそんなことお構い無しに話を続けた。

「一番初めに言っとくけど、私に楯突く奴は半殺しに合うということを頭の中に入れておくように…」

そう言っただけでポケットに入っていた硬貨をみんなの前で二つ折りに曲げた。

おおっ…とクラス中にどよめきが走った。

「先生…それはマジックかなんかですか？」

一人の生徒が私に臆することなく聞いてきた。

そりゃあそつだ。硬貨をあんな形で曲げれる女はこの地球上に存在しないわな。

「いや…その…」

私がおろおろしていると、

「先生、綺麗ですね。僕と付き合ってー」

「いやいや…俺と付き合ってください」

男子の何人かが、悪意のない茶化しかたをしてきた。

クラスはわちゃわちゃと一気に騒がしくなってしまった。

くくく…いいだろう。

こいつらには私の怖さをゆっくりと教えてやるよ。

こうして私の三度目になる八坂市の生活が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7553e/>

崩れる歯車

2010年10月8日23時50分発行